

科学研究費補助金 2009 年度～2011 年度

ネットワークデータによる、「心・身・文化」の健康社会学

研究課題番号：21530536

報告論文集

代表者

桜井 芳生

研究者番号：50264396

鹿児島大学・法文学部・教授

研究分担者

大山 小夜

研究者番号：10330333

金城学院大学・人間科学部・准教授

研究課題基本情報

研究期間

2009 年度～2011 年度

研究分野

社会学

審査区分

一般

研究種目

基盤研究(C)

研究機関

鹿児島大学

目次

どのような類が友を呼び、どのような友が類となる、のか？

ープロジェクト全体の総括もかねてー

桜井芳生・大山小夜

コミュニケーション論と社会関係

～ネットワーク論に先行する社会学的な基礎理解～

新睦人

3 部門調整モデルと情報構造

藤山英樹

(獨協大学経済学部)

専門知と包括知：医療専門職におけるパラダイムの混交

ー日本における新しい医師卒後臨床研修を事例としてー

加藤源太

どのような類が友を呼び、どのような友が類となる、のか？
ープロジェクト全体の総括もかねてー

桜井芳生・大山小夜

【どのような類が友を呼ぶのか？ーA 女子大学の場合ー】（前半）

「類は友を呼ぶ」、これはよくいわれる言葉だ。

しかし、われわれのプロジェクトにとっては、これは、注意すべき言い回しである。少なくとも二つ注意点がある。

第一は、「友が類になる」のと、よく混同されがちだ、ということだ。これは、因果の方向が逆である。「類友」と「友類」とは、異なる。

第二の注意点が拙稿前半にとって、重要だ。

それは、「類は友を呼ぶ」のだとしても（われわれの調査からはこれは実証される）、

「あらゆる種類の「類」が、友を呼ぶわけでない」ということである。

では、「どのような類が友を呼び」、「どのような類が友を呼ばない」のか？

これは、端的に実証調査によってしかわからない。これを、今回のわれわれのプロジェクトは遂行できた。

【個人調査パラダイムからの脱却】

「社会調査」とよく言うが、それらはほとんどの場合「個人」調査である。

われわれは、実際の「友人」（非友人も）のダイアドからデータを取得し、そのダイアド関係そのものを、分析する。（三人組、四人組の分析も可能である）。

本来の意味での「社会」調査に一步ちかづけたと自負している。

【調査の方法と対象】

2010 年年度から 2011 年度にかけて、3 大学（3 フィールド）に、おいて、それぞれ、3 波ないし 2 波のホールネットワークウェブアンケートをおこなった。



ウェブアンケートシステムについては、放送大学による REAS(リアルタイム評価支援システム)を使用した。

K 大学 k 科目 2010 年度前期 3 波

2011 年度前期 3 波

S 大学 s 科目 2 クラス 2010 年度 前期 3 波

A 女子大学 a コース全員 2010 年度～2011 年度 にかけて、2 波

本「前半」では、A 女子大学のケースのみを分析する。(すなわち、サンプルは全員女性)。

分析の方法としては、平松 ,Van Duijn , T. Snijders らの、p 2 モデルを参考にした。平松 (2003)によると

「p 2 モデルは、いわゆる p 1 モデルの発展系で、対をなす従属変数に対するロジスティック回帰モデルの一種である。従属変数は、二者間関係(i,j)で、行為者 i と j の二者関係を表し、四個の値(0,0),(1,0),(0,1),(1,1)からなる。、、、」とある。

この記述を参考にして、いわば「順列モデル」とでも呼ぶべき、簡易モデルをつくってみた。

100 のネットワークデータがあったとする。

1 番さんから 100 番さんまで、「ふたり一組（順位あり、(左さん,右さん)）」の順列をすべてつくる。9900 ケースとなる。

それら、9900 ケースのそれぞれに、

左さんと右さんとの、「友人関係」の「値」を割り振る。

平松 (2003)では、「両思い」「左の片思い」「右の片思い」「他人の関係」の四値でやっていたが、まずは、「有向グラフ」に関心があったので、また、最初の単純モデルとして

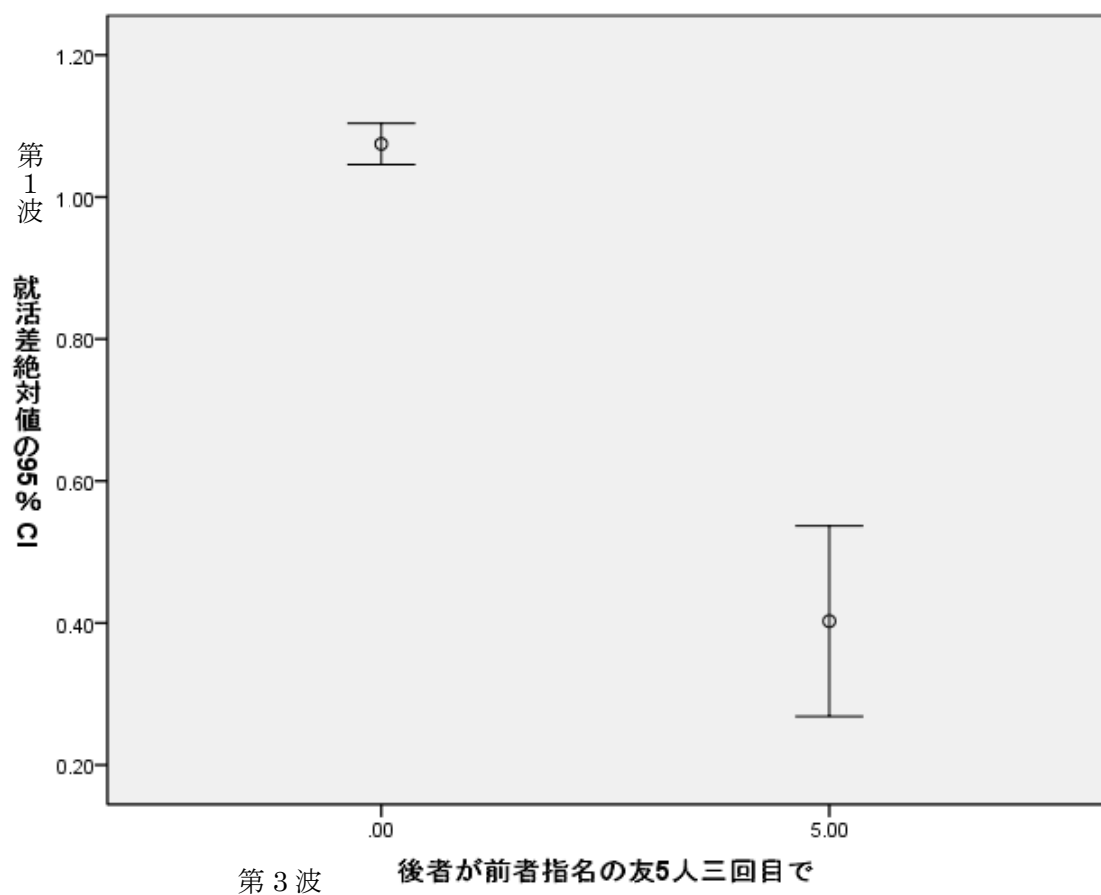
「第三波のデータにおいて」、「左さんが、右さんを、（第一でも第四でも）友達」としていたら「5」、それ以外にはすべて「0」の値を与えた。

そして、この「5か0か」を従属変数にして、「左さん、右さん」の変数を独立変数にして、二項ロジスティック回帰にかけて、どのような独立変数では、「左さんは右さんを友人とみなすか」のモデルをたてる方針である。

さらに、独立変数のほうも、まずは「二者」間の類似性を分析したかったので、その（第三波の）「左さん、右さん」それぞれの、「第1波のときの回答」をよみだして、その第1波時の「左さん、と、右さんの、同じ変数の差の絶対値」を、それぞれのケースに付加してそれらのいくつかと独立変数にしてみた。

【結果・有意な類似モデル】

両者の類似性が、友人タイ形成に貢献していたと解釈できるものとして、以下のようなものがみいだされた。

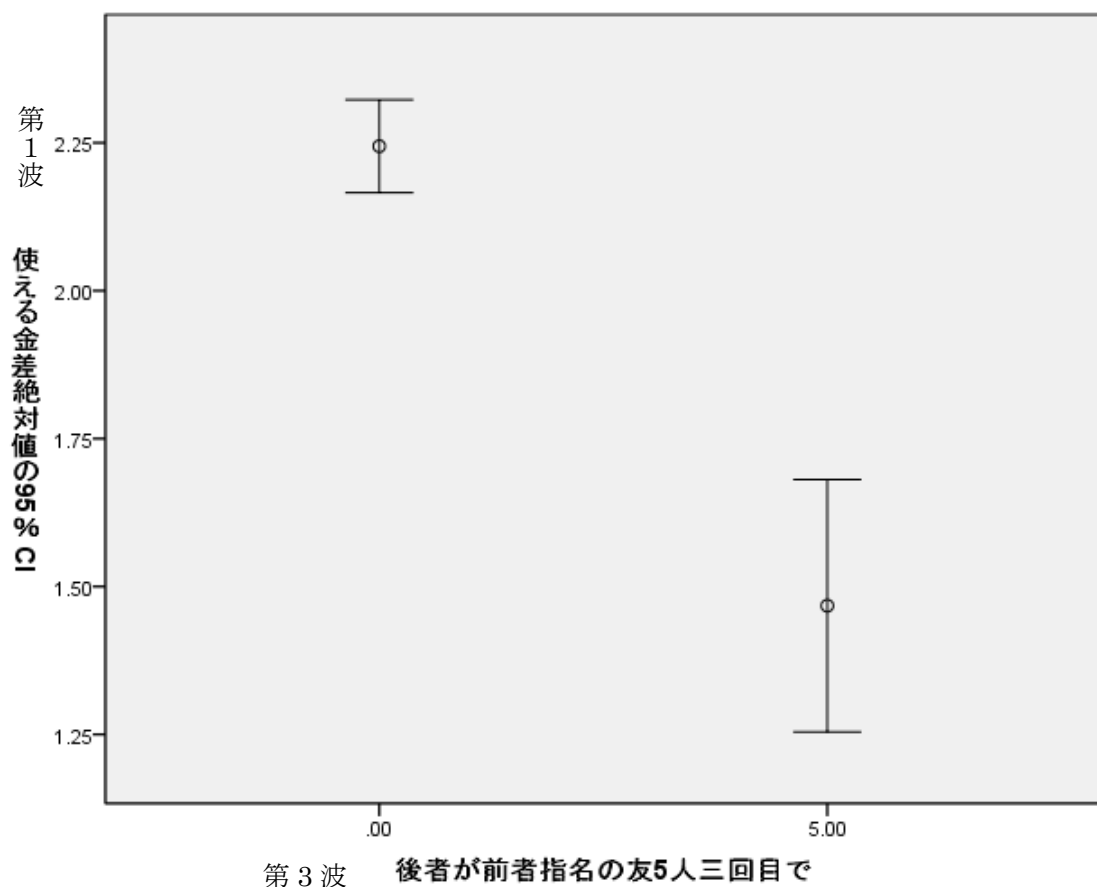


上図は、使用した統計ソフト SPSS の都合で、通常とは、「独立変数」「従属変数」が、縦軸横軸逆になっているので、注意してほしい。

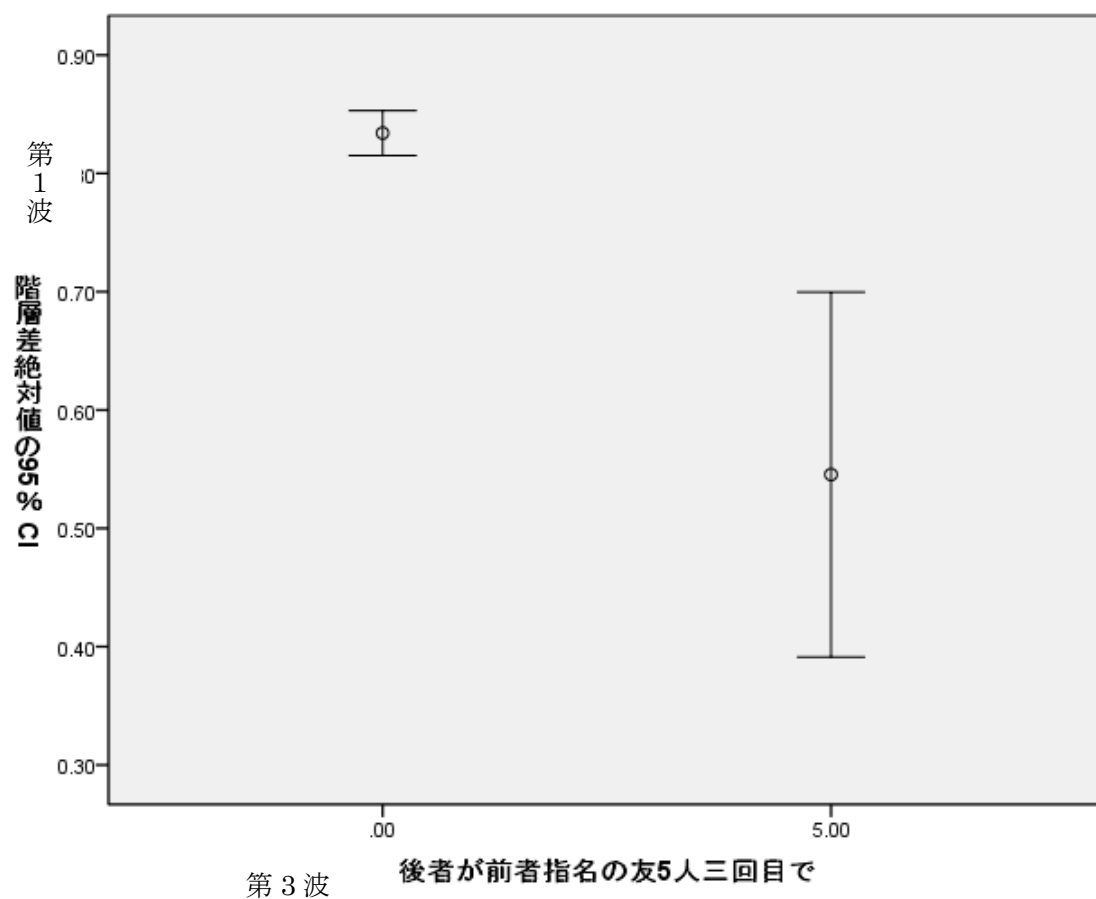
縦軸がいわば、独立変数である。第一波の時点における「就活をがんばりたいですか」という質問（回答肢 6 択）の平均値と 95%信頼区間である。第 1 波時において、左さんと右さんとが、友人であるかどうかは、無視している。

横軸はその従属変数といえる。第 3 波の時点で、「友でない=0、か、友である=5、か」を表している。（以下同様）。

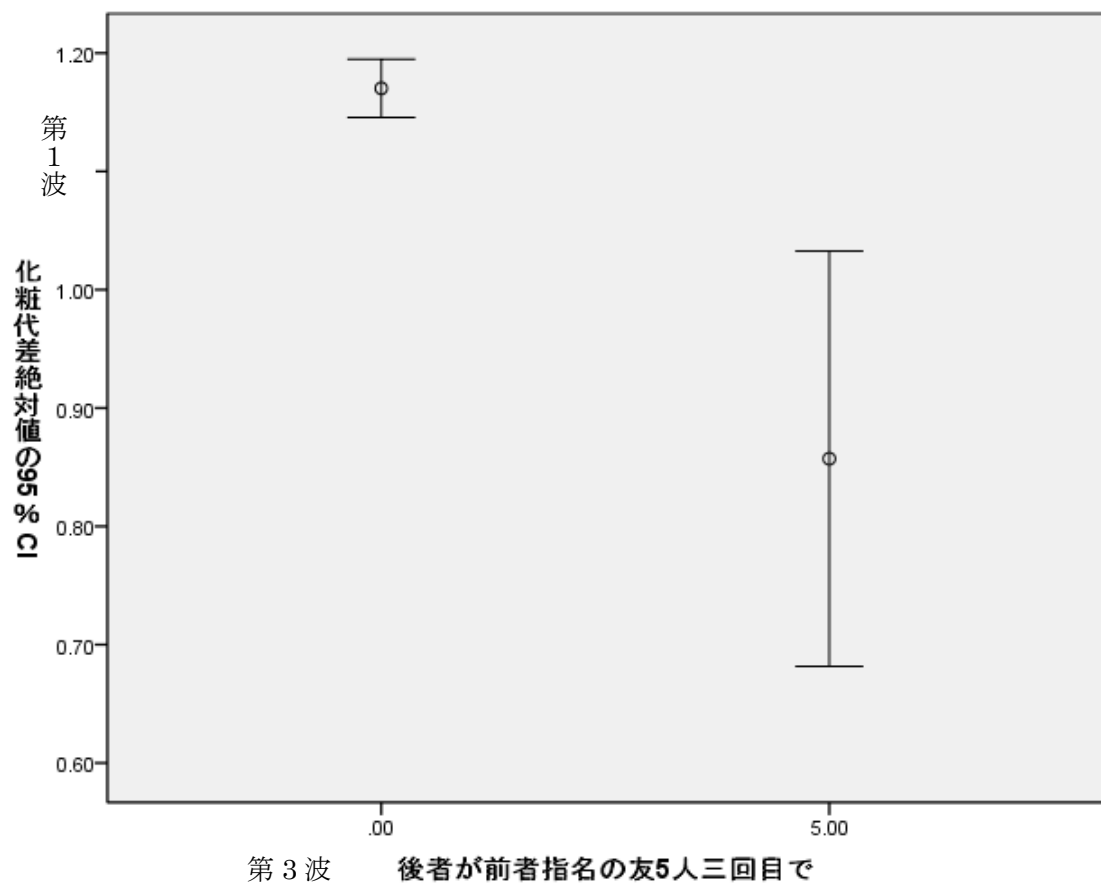
つまり、第 1 波時点で、「就職をがんばりたい」のスコアの差が小さい（仮想的）ペアのほうが、第 3 波の時点で、友人である比率が有意に高いわけだ。



第1波時点で、「使える金の差」が少ないほうが、第3波時点で、友人となっている割合が
たかい。



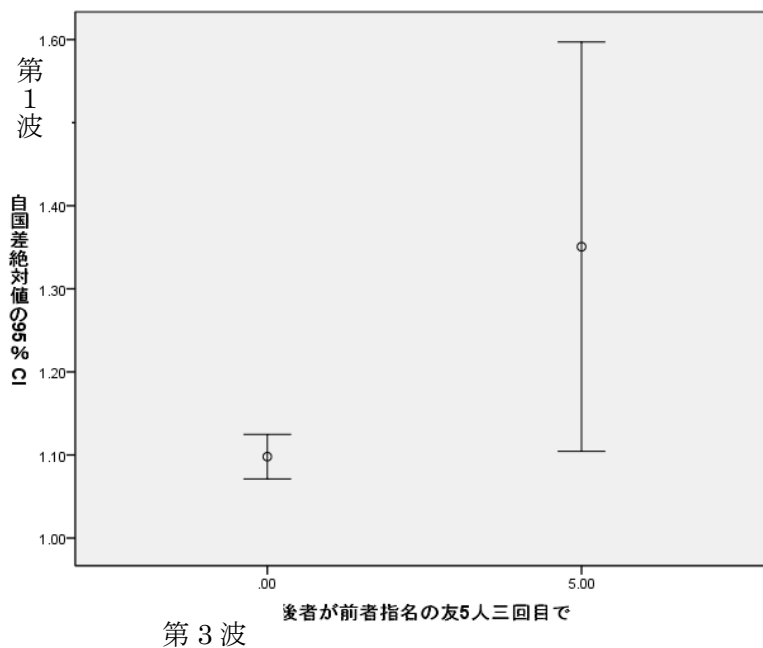
第1波で、階層（自己評定、5段階）の差が、小さい方が、第3波で友人となっている割合
が高い。



第1波で、化粧品代（5段階）の差が、小さい方が、第3波で友人となっている割合が高い。

【「類似していない（相違している）」ことが、友人タイ形成を促進していたと解釈できるパターンがあった！】

さらに、興味ぶかいことに、どれほどの再現性があるか疑問だが、「類似していない（相違している）」ことが、友人タイ形成を促進していたと解釈できるパターンがあった！



上記の縦軸は、設問「あなたは自国のために役立つと思うようなことをしたい、ですか」（回答肢 6 択）の回答の差の絶対値である。いままでの、分析論法からすると、この「自国のために役立ちたいスコアの差の絶対値」が小さい仮想ペアに比して、第 3 波において、実際に友人となったペアは、その差が大きいわけだ。ある視点から一番自然な解釈は、この変数については、「差が大きい方が友人になりやすい」というものだ。ただし（この点は、t 氏のコメントによる深く感謝します）、友人（= 5）の場合のほうが、分散が大きい。全ありうるペアのうち、友人であったペアは少ない、たんに、その差を表しているだけ、すなわち、アートファクトかもしれない。この点、さらに追試・再考してみたい。

【二項ロジスティック重回帰分析】

当然、これらもろもろは、擬似相関している嫌疑がある。
そのため、二項ロジスティック「重」回帰分析をおこなってみた。

以下がその結果である。

モデル要約

ステップ		Cox-Snell R ²	Nagelkerke R ²
	-2 対数尤度	乗	乗
1	744.353	.012	.089

方程式中の変数

	B	標準誤差	Wald	自由度	有意確率	Exp(B)
ステップ化粧代差	-.314	.144	4.742	1	.029	.731
1a 絶対値						
自国差絶対値	.268	.105	6.532	1	.011	1.308
階層差絶対値	-.631	.182	12.005	1	.001	.532
就活差絶対値	-.988	.195	25.610	1	.000	.372
使える金差絶対値	-.101	.083	1.467	1	.226	.904
定数	-3.022	.279	117.401	1	.000	.049

以上のように「使える金の差の絶対値」のみが、有意でなくなり、他は、有意のままであった。

「自国への愛」は、上と同様、「似てない者どうし」が、友人タイを形成したと解釈できる。

(前半、了)

【どのような「友」が、「類」となるのか？と、プロジェクト全体の「総括！」ー逆因果の推定・3フィールド統合データによるー】（後半）

以上「前半」においては、一つのフィールドにおいてであったが、「類が友になる」のはどのような場合であるか、を探求してみた。

「後半」においては、発想をちょうど逆転させて、「どのような友が類となるのか」を3つのフィールドの統合データセットによって、探求してみよう。

「前半」でものべたが、「友が類になる」のは、「類が友を呼ぶ」のと、よく混同されがちだ、ということだ。これは、因果の方向が逆である。「友類」と「類友」では、まったく逆因果である。

第二の注意点が「後半」にとって重要だ。

それは、「友は類となる」のだとしても（われわれの調査からはこれは実証される）、

「友のあらゆる種類の属性が「類」となるわけではない」ということである。

では、「友のどのような属性が類となり」、「友のどのような属性が類とならない」のか？これは、端的に実証調査によってしかわからない。

上記二点の「因果方向」問題、「結果類似性の属性」問題、これらを、今回のわれわれのプロジェクトは明示的に区別して解くことができた。

【調査の対象と方法】

調査の対象については、前述のとおりである。とくに、「後半」では、3フィールドすべての統合データを利用する。

方法については、「前半」とかなりことなるので、読者は頭をきりかえてほしい。

【線形重回帰/二項ロジスティック（重）回帰モデル】

基本的な発想は、簡単で（自然で）ある。

上述で、最大 3 波のパネルデータを採集したと述べたが、未だ、2 波しか採集していないフィールドがあるので、「第 1 波」と「第 3 波」のみのデータをつかう。2 波しか採集していないフィールドでは、「第 2 波」を第 3 波とみなす（以下同様）。

ある属性が、友人間で影響を与えたかどうかを、第 1 波のその友人の属性が、第 3 波の本人の同じ属性（変数）に、影響したか、回帰分析して確認する。従属変数は、二値の場合は、二項ロジスティック回帰分析をおこなう。

ただし、第 1 波の本人の属性（変数の値）が、第 3 波の本人の状態に影響をあたえていることもありうる（というか、あるのが普通な）ので、統制変数として、これも重回帰式に投入する。

さらに、他の変数との「交互作用」の有無を確認する場合もある。具体的に見てみよう。

【恋愛は伝染する、か？】

恋愛について、まずは分析してみよう。

第 1 波のデータと、第 3 波のデータを利用する。

従属変数は、第 3 波における自分の「恋愛している/していない」（恋愛中ですか。_J）である。

独立変数の第一は、第 1 波時の友人の「恋愛」（恋愛中ですか。_A）である。まずは、当波の「第一の友人」の影響のみ、みてみよう。

第二の独立変数は、第 1 波時の自分自身の「恋愛している/していない」（恋愛中ですか。）である。これは、統制変数として投入する。
以上の結果が、以下である。

モデル要約

ステップ		Cox-Snell	Nagelkerke
	-2 対数尤度	R2 乗	R2 乗

1	144.387	.179	.242
---	---------	------	------

分類テーブル a

観測	予測		
	あなたは、今、恋愛中ですか。 _J		正解の割合
	1	2	
ステップ 1 あなたは、1 今、恋愛中で2 すか。 _J 全体のパーセント	64	12	84.2
	23	27	54.0
			72.2

方程式中の変数

	B	標準 誤差	Wald	自由 度	有意 確率	Exp (B)
ステッ あなた プ 1a たは、 今、恋 愛中 です か。 _A	0. 869	0. 425	4. 188	1	0. 041	2. 385

あなたは、 今、恋愛中 ですか。	1.875	0.434	18.63	1	0	6.519
定数	-4.08	0.892	20.98	1	0	0.017

以上のように「第1波目の第一の友の、「恋愛している/いない」は、第3波目の「自分」の「恋愛している/いない」に有意に影響をあたえていた！

【交互作用項の影響の確認】

せっかく、ネットワークデータをとったのであるから、ネットワーク指標によるなんらかの変数が、上記関係に影響をあたえていたのかいないのか、確認してみたい。

まず確認してみたいのが、「中心性」（以下「インーボナチッチ中心性」を使う）の指標の効果だろう。

中心性指標は、その名のとおり、各ノード（この場合はヒト）が、そのネットワークのなかで、どれほど中心的な位置にあるか、の指標を目指している。

中心性と関連して、一番初めに、社会的に確認してみたいのが、いわゆる「トリクルダウン（したたりおち）」効果だろう。

「中心」から「周縁」にむかって、なにかがしたりおちてくる（伝播していく）……。そんなメカニズムがあるのではないかと。

中心性指標は、このようなシナリオを、操作的定義のもとで確認することを可能にする。

もしトリクルダウンのメカニズムがあるなら、友人であったとしても、「中心性の高い方から低い方へ」影響がつたわることが、ありそうなこと、となるだろう。

また、逆に、ある友人関係（方向付き）が、「中心性の低いほうから高い方へ」というものなら、その影響は弱まるだろう。

すなわち、統計的にいうと、友人からの影響が、「中心性格差の正負と値」とで「交互作用」しているはず、となる。

というわけで、「友人の中心性－自分の中心性」という差を算出し（この場合は、友人の自分への影響を考えているのだから）、

それを、「第1波時の第一の友人の恋愛の有無」に乗じて、「交互作用項」とした。

それもふくめて、二項ロジスティック回帰分析をした結果が以下である。

モデル要約

ステップ	-2 対数尤度	Cox-Snell R ²	Nagelkerke
		乗	R ² 乗
1	143.672	.184	.249

分類テーブル a

観測	予測		
	あなたは、今、恋愛中ですか。_J		正解の割合
	1	2	
ステップ 1 あなたは、1	63	13	82.9
今、恋愛中 2	22	28	56.0
ですか。_J			
全体のパーセント			72.2

方程式中の変数

	B	標準誤差	Wald	自由度	有意確率	Exp(B)
ステップ 1a あなたは、今、	1.922	.440	19.099	1	.000	6.837
恋愛中です						
か。						
交互作用項	-.021	.025	.730	1	.393	.979
あなたは、今、	.901	.427	4.451	1	.035	2.463
恋愛中です						
か。_A						
定数	-4.192	.903	21.524	1	.000	.015

以上のように、交互作用項の影響は有意とはならなかった。

すなわち、この場合にかぎっていえば、トリクルダウンの現象は、確認できなかった。

【トリクルダウンの別操作的定義】

ただし、いうまでもなからうが、トリクルダウン現象を別様に操作的に定義することも可能だ。

とくに、「上から下へ」の尺度になにをつかうか、について、自由度が存在する。

今回は「せっかくネットワーク指標が算出できたのだから」、その代表的な中心性指標をつかった。しかし、それは不可避でなない。

経済的貧富の「差」、
意識された階級の「差」、
IQ の「差」、
学歴の「差」、
父職の「差」、
身長 of 「差」、
BMI の「差」、
容姿の「差」、
住居形態の「差」、
セクシャルデビューの早晩の「差」、
バイトデビューの早晩の「差」、

などなど、いろいろ利用できるだろう。

【幸せは伝播するか】

別の変数について、同様な確認をしてみよう。たとえば「幸せ」である。

相関係数

	あなたは、現在、 幸せですか_J	あなたは、現在、 幸せですか_A
--	---------------------	---------------------

あなたは、現在、Pearson の 相 幸せですか_J 関係数	1	.189
有意確率 (両側)		.033
N	274	128
あなたは、現在、Pearson の 相 幸せですか_A 関係数	.189	1
有意確率 (両側)	.033	
N	128	189

これは、第3波目の本人の「幸せ」についての回答、と、第1波目において第一の友とされた者の第1波時点での「幸せ」の回答との、相関である。
有意に相関している。

これはつまり、第1波時の友人（の回答）が、第3波時の自分に影響をあたえたのだろうか。

先ほどと、同様に（ただし、この場合は連続変数なので）線形重回帰分析を行ってみよう。

モデル要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	標準偏差推定値の誤差
1	.519	.269	.257	1.043

係数 a

モデル	標準化されていない係数	標準化係数	t 値	有意確率
-----	-------------	-------	-----	------

		B	標準偏差誤差	ベータ		
1	(定数)	.995	.280		3.560	.001
	あなたは、現在、幸せですか_A	.105	.089	.092	1.177	.241
	あなたは、現在、幸せですか	.501	.079	.493	6.316	.000

以上のように、「重」回帰分析してみると…

友人の効果は有意ではなくっている！

【「英語を学習つもり」】

相関係数

	あなたは今後、英語を学習するつもりですか_J	あなたは今後、英語を学習するつもりですか_A
あなたは今後、英語を学習するつもりですか_J	1	.439
Pearson の相関係数		.000
有意確率（両側）		
N	274	128
あなたは今後、英語を学習するつもりですか_A	.439	1
Pearson の相関係数		
有意確率（両側）	.000	
N	128	189

これは、第3波時の自分の回答、と、第1波時の第一の友との回答、有意に相関している。
これはつまり、第1波時の友人（の回答）が、第3波時の自分に影響をあたえたのだろうか。

先ほどと、同様に線形重回帰分析を行ってみよう。

モデル要約

モデル			調整済み R ²	標準偏差推定値の誤差
	R	R ² 乗	乗	
1	.781	.610	.601	.828

係数 a

モデル		標準化されていない係数		標準化係数		有意確率
		B	標準偏差誤差	ベータ	t 値	
1	(定数)	.480	.176		2.736	.007
	あなたは今後、英語を学習するつもりですか_A	.161	.065	.152	2.479	.015
	あなたは今後、英語を学習するつもりですか	.689	.060	.701	11.391	.000
	英語 111 掛ける中心性差	-.006	.009	-.036	-.638	.525

以上のように、「重」回帰分析してみると、友人の効果が、有意であることがわかる！

【髪の色 （鯉の滝登り）】

モデル要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	標準偏差 推定値の 誤差
1	.851	.725	.720	.682

係数：従属変数 第3波の自分 すべてのかたにうかがいます。
あなたの髪の毛の色はどれですか_J

モデル	標準化されてい ない係数		標準化 係数	t 値	有意確 率
	B	標準偏 差誤差	ベータ		
1 (定数)	0.148	0.159		0.931	0.353
すべてのかたにうかがいます。あなたの髪の毛の色はどれですか_A (第1波の第一の友人)	0.138	0.063	0.119	2.177	0.031

すべての のかた にうか がいま す。あな たの髪 の毛の 色はど れです か(第1 波の自 分)	0.85	0.059	0.785	14.362	0
--	------	-------	-------	--------	---

ここまでのところで、さらにひとつ注意点がある。それは「友人の向き」の問題だ。

いままで、分析してきたのは、第1波時に「本人が、友人とみなした」ヒトの属性が、第3波時の本人に影響を与えていたかである。

「本人が友人と「みなした」ひとから影響をうけたか」、であるので、分析順序としては、非常に自然だともうが、図式としては「鯉の滝登り」影響となっている。

当然逆の、「鯉の滝下り」すなわち、「友人とみなしたひとに、影響を「与えて」いたか」も関心を引く。

ただ、残念ながら、今回使用しているデータベースは、その問題意識には、直には対応していない。(第3波に「友人」とされたヒトの「第1波」の回答が直接には記されていない。もちろん、この情報が明記されているデータベースへと増補することは原理的にはまったく不可能でないが、経験則上は、結構時間がかかる。)

そこで、以下、「第1波で(第一の)友人とされたヒト」と「第3波で(第一の)友人とされたヒト」が同一人物であるダイアド、のみを抽出して、分析比較してみた。

第3波の友人(x氏)に対する第1波の自分の影響を回帰分析するのだが、当然、第1波のx氏の回答で統制しなければならない。しかし、データベースにはその情報はまだない。

しかししかし、第1波の友人と第3波の友人が同一であるダイアドケースを分析すれば、
↓

第1波の友人はx氏なのであるから、第1波の友人の回答を統制変数として利用できる。

以下がその結果である。

モデル要約

モデル			調整済み R2 乗	標準偏差 推定値の 誤差
1	.860	.739	.727	.593

：従属変数 第3波の第1の友人 すべてのかたにうかがいます。

あなたの髪の毛の色はどれですか_K

モデル		標準化されてい ない係数		標準化 係数	t 値	有意確 率
		B	標準偏 差誤差	ベータ		
1	(定数)	0.012	0.281		0.042	0.967
	すべて のかた にうか がいま す。あな たの髪 の毛の 色はど れです か(第1 波の本 人)	0.27	0.091	0.255	2.956	0.005

すべてのかたにうかがいます。あなたの髪の毛の色はどれですか _A (第1波の第1の友人)	0.788	0.095	0.718	8.324	0
---	-------	-------	-------	-------	---

このように、前述の「髪の色（鯉の滝登り）」においても、直前の「髪の色（鯉の滝下り）」においても、「第1波の自分を統制したもとの、上り友人・下り友人の効果」は、ともに、有意だった。

もちろん、ことなるケースも容易にみいだせた。

【幸せ、再考】

まえの「幸せ」の分析を想起してみよう。

第3波時の本人の「幸せ」に、第1波時の「友人」の効果は、有意ではなかった。

これは、ここでのいいかたでは、「鯉の滝登り」現象はみいだせなかった、ということだ。では、逆方向はどうだろうか。

モデル要約

モデル			調整済み	標準偏差
	R	R2 乗	R2 乗	推定値の

				誤差
1	.654	.427	.401	.843

係数 a. 従属変数 あなたは、現在、幸せですか_K

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準偏差誤差	ベータ		
1	(定数)	.350	.345		1.016	.315
	あなたは、現在、幸せですか	.300	.124	.303	2.413	.020
	あなたは、現在、幸せですか_A	.486	.131	.467	3.719	.001

というわけで、「鯉の滝登り」現象が、しょうじていない、のに、
「鯉の滝下り」現象が生じているトピックも存在している（幸福）こともわかった。

【総括】

以上のように、われわれは、比較的フィージブルなリソースを使用するだけで、ネットワークデータを収集し、その分析することができるようになった、と、思う。

この「知的ツール」の入手は、「社会学における顕微鏡」の出現にも、比することができるとおもう。

また、これも記述したとおり、これまでの「社会調査」は、「社会に住んでいるヒトの個人調査」だった。

ネットワークリサーチは、これを、本質的に「ミクロ社会調査」化した。（ダイアド、トライアド、クオリアド、双方（三方、四方）のデータをそれぞれとり、ベクトルとして分析単位とする）。

また、中心性をはじめとする「新・指標」をうることができ、社会分析ならびに、それをめざす仮説構築にはばができた。

しかし、

「や、こう」（やったら、こうなった）研究、あるいは、
“so what?”（だから、どうした？）研究、

の気味は否めない。

その点でも、われわれが範としたハーバード学派は、じつに、うまくやっていた！

クリスタキスらが分析した「肥満の伝染」などは、「疫学上」「(米国の) 公衆衛生上」、重要な論点であることは「論をまたない」。

また、クリスタキスの共同研究者、フォーラーが、「政治学者」であったのも、いまからふりかえると、妬ましいほど、うらやましいシチュエーションだった。

「実証政治学」（のある重要分野）では、「共和党支持か、民主党支持か」、「投票するか、しないか」、など、白黒はつきりした従属変数を、よりたかい予測力で、予測できる「モデル」「独立変数」を、新発見すれば、それは大きな新貢献といえそう、だからだ。

【それにしても「売る」のがうまい！？】

クリスタキス自身ではないが、クリスタキスの指導を受けているハーバード大学の博士候補大学院生を筆頭著者とする研究チームの、Facebook 上での大学生を対象とした調査結果によると、Facebook 上で人の好みが他の人にうつる可能性は極めて小さいという、驚くべき事実が判明したという（Lewis et al. 2011）。

こういっては失礼だが、クリスタキスやフォーラーが「これは伝播する」「それも伝播する」といって、それが人口に膾炙し、「口コミマーケティング」「ステルスマーケティング」などが流行ったところを、見計らって（なわけではないだろうが）、

↓

「いや、あれは伝播しない。エビデンスがある」と言っているようなものだ。

じつに「売り方」がうまい。

当初、われわれは、彼らのようなりサーチオペレーションができるかどうかのレベルで不安で、そこ（売り方）までおもいいたらなかった。

しかし、量的はともかく、質的には、（家内手工業的だが）、この不安はかなり払拭できたと、思う。

今後は、「販路」を十分考慮して、プランを立てることができるだろう。
既存の「係争問題」だけでなく、このアプローチ自体が、あらたに「開く」問題意識もすくなくないだろう。

とくに、「にわとり・たまご」問題についてはそうだろう（類が先か、友が先か、など）。

【文献】

Christakis, N.A. and Fowler, J.H., 2007 "The Spread of Obesity in a Large Social Network Over 32 Years," *New England Journal of Medicine* 357(4): 370-379

Fowler, J.H. and Christakis, N.A., 2008 "Dynamic spread of happiness in a large social network: longitudinal analysis over 20 years in the Framingham Heart Study" *BMJ*. 2008; 337: a2338. doi: 10.1136/bmj.a2338

平松闊, 2003, 「類は友を呼ぶ?」『甲南大学紀要. 文学編』126: 1-20

Lewis, Kevin, Gonzaleza, Marco and Kaufmanb, Jason, 2012 "Social selection and peer influence in an online social network," *PNAS*, 109(1): 68-72. doi: 10.1073/pnas.1109739109

【謝辞】

ウェブアンケートに答えてくださった回答者の皆さんに深く感謝いたします。S大学におけるウェブアンケートを実施してくださいました、B先生、C先生、に深く感謝いたします。

コミュニケーション論と社会関係

～ネットワーク論に先行する社会学的な基礎理解～

新 睦人

0. いわゆる「独我的な行為論」からの脱皮のために

社会生活の何らかの単位——それを「社会システム」と呼ぶかどうかは決定的なことではないが——について語るとき、観察や記述や説明の出発点を人びとの行為、とくに社会的行為に求めるか、それともコミュニケーションに求めるか、ということは、20世紀社会学の展開の仕方を判断するにあたって一つの分岐点ともなった。

私も同様にその一人であるが、ドイツ社会学に主要な影響を受けて育ってきた社会学者たちの多くは、《社会学は行為の学である》とする基本的な命題をしごく当然のこのように受けとめて、M. ヴェーバーの論議にそいつつ社会学の営みを続けてきた。「社会的な行為」に関するヴェーバーの著名な定義は、《人びとの志向が他者に向けられ、他者から方向づけられ、そのことによって、行為はく社会的な行為になる》と理解することができるが、一定の意味を他者に伝えて他者を動かすという、行為の相互性を把える発想は乏しい。あくまでも、その力点は主観的に意味を与える、自律的な **行為者主体** の側にある。ヴェーバーにとっては自律的な人間こそが興味の対象であった。しかし、これだけでは、主体となる行為者(自己)が他者との関わりをどうして形成できるかという点には関心が向かっていかにくい。

周知のように、この把え方は、絶大なるヴェーバー礼讃者であった、T. パーソنزの社会学および行為理論の展開によっても継承されたり増幅されたりしてきた。彼は、ヴェーバーの線上で行為システムを構想し、社会システムをそのサブ・システムとして把握しようとしたのであって、行為理論としての体系化はさらに「主意」的な性質を込めて拡張されたのであった。広く理解された意味での「主意主義」的な行為論には、行為者の意志や意味づけを強調するという共通点があり、その傾向には、ともすると、人びとの行為における、「**独我的な行為**」の特徴がつきまとい、それは、ヴェーバーやパーソنزのような主張者自身の固有な人物像に内在する傾向としても了解され、理論的にももとより人物的にもくいかにもありそうな話>として受容されてきた。そのことは、行為の社会的な過程における相互性という、まさにそれこそ「社会的行為」の重要な特性よりもむしろ行為における＜意味的な世界＞の重要性の方向へと社会学の論議を導く働きをしてきた。つまり、個人的な行為者を動かす内在的なメカニズムは主意的に説明されるが、行為者と行為者との関わりが形成される仕組みや経過が十分に説明されないできた。相互作用の事実を明らかにするには、行為者個人が行為する事実だけでなく、自己と他者とが互いに他者

と出会い、互いに何らかの接点を見つけるというプロセスを説明しなければならない。その点において、**シンボリック相互作用説**は、ヴェーバーとヨーロッパ、とくにドイツの社会学とは異なって、行為における相互性と意味のシンボル性の両方の均衡のとれた方向を内蔵しているはずであった。けれども、その期待は理想どおりには達成されていない。

たとえば、シカゴ学派の第一世代であった、C. H. クーリーはその「第一次集団」モデルを社会のイメージにも拡張的に適用し、集団の第一次的な理想が社会の組織規模におけるデモクラシーの理想に拡大的に転換していくとみていた。フェース・トゥ・フェースの緊密な相互作用が理想の定着過程を説明する有効な仮説であることは誰しも認めるところであるが、クーリーは、その緊密な接触過程が成立したメカニズムについては自明のこととしてとどめているので、論議がそれ以上には展開されていない。今日、シンボリック相互作用説といっても多様な学派が存在しているが、その代表的な地位にある、H. ブルーマーの集合行動論も、集合化のメカニズムを説明する方向には関心が向かっていない。この学派を精力的に追求してきた、船津 衛によると、シンボリック相互作用説の思考傾向には、 a. 人間の行為がシンボルに媒介されており、主体的に状況を解釈することによって形成される、 b. それが、他者との相互作用を通して生成、変容、発展する、 c. 人間の自我それ自体も他者と向かいあうことによって発達していく、 d. 人間の社会も生成的な社会的な相互作用のダイナミックな過程として成り立っている、という基本的な性質を認めることができる(船津 1988, 178~81頁)。だが、少なくとも、この特徴づけにも、相互作用の形成メカニズムへの論及はみられない。意外なことに、この派の論議の関心点も人間の行為における意味のシンボリックな働きにあった。もっとも、この派のマクロ・レベルに関する論議では、組織レベルでの役割メカニズムが解明されており、それは大切な方向であったが、相互作用の説明にはもっと力が注がれていてもよかったと思われる。相互作用の説明を進めるには、もっと思い切った発想の転換が必要なのかもしれない。

シンボリック相互作用説を先導した社会学者の一人はG. ジンメルであった。彼の相互作用論のなかにヴェーバーからパーソンズへとつながる社会学の系列とは異なった発想を追うことによって、転換の手がかりを見いだしてみたい。

1. 「心的相互作用」から出発して社会化を説明する

「社会はいかにして可能であるか」(Wie ist die Gesellschaft möglich?)というよく知られた問いをジンメルは発した。心的相互作用(seelische Wechselwirkung)をとおして、人びとは互いに社会を形成する過程に入ることができる。この動的な事象を、たとえば、商人の営業用のスマイルとその抜け目のない取引きの仕方、はるかな恋人へ心のたけをこめて密かにしたためる手紙、友だちとの親しい関わりのなかでふっと浮かぶ嫉妬、信仰の敬虔(けいけん)な祈りのかたわらに異教徒に対していや増す憎しみの感情、……………

こうした事例には、互いに関わりあう個人と個人との直接的な作用だけではなくて、心をとおして互いに通いあう関わりが社会を形成していくという把え方である。

大著『社会学』(1908)の冒頭で、ジンメルは、「社会化」の概念を社会学の基本にすえた。社会をメイン・テーマとする社会学であるが、その出発点は、微視的で「分子」的ともいえる「心的相互作用」であると彼は考えた。そこから社会が形成されていくからである。ジンメル特有な意味での「社会化」(Vergesellschaftung)の始まりである。それは、あくまでも進行形として社会を把える表現である。個々人または行為者がそれぞれにいだく、何らかのインタレスト(=関心や利害)、あるいは衝動、動機、目的など、社会化の「内容」にもとづいて、人びとは、直接的であれ間接的であれ、互いの心を通わせながら相互作用をくり返しつつ社会を、そして社会の諸単位を形づくっていく。それは社会づくりの出発点である。そのような社会づくりの過程で、人びとは、たとえば、支配―服従とか代表制といった、社会づくりの諸「形式」(Formen)を生みだしてきた。分かりやすく言えば、人びとが関わりあって社会の集合的な状態を運営していく知恵を方式化してきた、と彼はみていた。人間と人間との、分子的な関わりをぬきにしては、私たちが「社会」と呼んでいる巨大な出来事も成り立ちはない、とジンメルは見た。《社会の本来的な特徴は意識の事実ではない》と彼は見ていたが、行為者が他者を意識することによって、互いに何らかの関心をもたなければ「心的相互作用」から「社会」への物語は始まらないことは確かであり、個々人の心理(あるいは意識)は相互作用のステーションであると、彼自身も考えていた。そのことを認識したうえで、私たちがジンメルから学ぶことは、この場合、[意識から行為へ]という解き方ではなくて、[相互作用から社会、あるいは社会づくりへ]という解き方が問題の焦点であるということである。

彼が「心的」と把えた事象が具体的に何を意味するのかは必ずしも明確ではないが、人が直接的に関わっていないくても、その意図を《相互の心に関わりの用意がある》と理解するなら、それは一つの大切な示唆を含みうる。相互作用への構えが問われるからである。そこから社会が形成されていくという見方である。そのことを含めて、ジンメルは、「社会化」という言葉で表現したのである。彼は、あくまでも「化」(～ung)という進行形で社会を把えようとした。さまざまな(社会化の)「内容」にもとづいて、人びとは、直接的であれ間接的であれ、他者との間で互いに心を通わせながら何らかの関わりをつくりだし、その累積状態として社会を形づくったり維持したりしている。そうした社会づくりの営みには、上述のように、支配―服従、代表制、対立の諸形態、集団の分化、……といった(社会化の)いろいろな「形式」が見いだされる。「**社会化の形式**」を見いだして説明していくことこそ、社会学の独特な課題であるとジンメルはみた。彼にとって、**社会学の特有な視点**は、相互作用が成立し存続し解消されていく過程で、行為者の内面から行為へとつき動かす、社会化の「内容」に当たる、さまざまな要因から分析的に区分して、社会的な場面の「形式」的な特徴を追求することにあったからである。と

もに社会づくりをする人びとの、行為における内面的な諸特質から社会にアプローチしていく思考の系列ではなくて、行為者が相互に関わりあう場面と過程に社会学の中心的な課題がある とするのがジンメルを示唆する大切な点である。この系列における思考の方向は《相互作用が成立し存続し解消されていく過程を追求する》ことに向かっているから、行為者の主体的な意志や意味づけを強調することはしない。その点で、ジンメルは、少なくとも、ヴェーバーにみられるような「独我論的な行為論」の傾向は脱している。

ただし、「心的相互作用」というキャッチフレーズの割には、ジンメルの相互作用論は、<どのようにして行為者が対面しあうようになるか>、<いかにして行為者が相互に心を伝えあうことができるか>というメカニズムの解明までは十分に達成していない。望ましい水準で言うならば、相互作用論が完成されるためには、《行為者の自己が相互的な場面で、他者と出会い、互いに何らかの接点を見つけて、相互作用を始める》という一連のプロセスを説明しなければならない。このプロセスは、広い意味で語られるコミュニケーション過程であって、このプロセスで自己と他者との何らかの相互依存的な性質が高まることにより定着的な状態が生まれる。相互作用の相対的に静止した状態として語られることが多い「社会関係」である。

20世紀社会学の不幸な偏りは、ヴェーバーからパーソンズへとつながる行為論の線上で社会学の理論的な試みが展開されてきたために、コミュニケーション過程の基礎的な位相である社会関係について地道な追求が放置されてきた点にもみられる。こうした不幸な事態が生まれたのは、社会学の主要な学説の流れにおいて、ジンメルの信奉者であった、A. スモールに代表される、初期アメリカ社会学の社会過程論的な伝統が正当に継承されてこなかったという問題もあったし、「社会関係」という概念それ自体が示す静止的なイメージやミクロな視野に限定されがちなイメージが、動態的な社会認識を要請されていた、20世紀社会学の主流からマイナスの記号として受けとめられたという不幸な事情もあった。だから、このようなネガティブな傾向は、シンボリック相互作用説の大きな活動実績のなかにさえも影響していたことは前述のとおりである。

問題の焦点は、冒頭に述べたように、行為論の系列に対するコミュニケーション論の系列から社会分析の組み立てを考えていく可能性にある。この場合、視点は、人びとと個々人の内面における意志や心のレベルで観察される志向の方向にとどめないで、行為者、すなわち発信者と受信者の相互が直接かつ接触的な関わりの方向に関わっている。いまさらいうまでもないが、コミュニケーション (communication) とは 発信者から受診者への情報の伝達 を意味している。日常的に<意志の疎通>と理解されている語意と基本的に異なっていない。「情報」 (information) とは意味のある記号の集まりである。経験する事象では微妙な違いのように思われるが、人びとのコミュニケーションの事実は、このようなミクロ・レベルの関係が累積された現実である、とするのがジンメル理論の正当な継承の仕方である。N. ルーマンは、ジンメルの考えをうけて《コミュニケ

ーションの基礎的な地位》を認めている。彼の主著、『社会システム』（1984）では、上述のような、「ヴェーバー＝パーソンズ」系列の行為論的な基盤から社会システムの成り立ちを説明する方式が社会のまさに「社会性」を的確に説明しきっていないとする立場から、「社会的な存在を独自なリアリティとして成り立たせている基礎的な過程はコミュニケーション過程にほかならない」と宣言している（Luhmann, 1984. 214～17頁）。

コミュニケーション過程は、**情報と伝達**（あるいは送信）に加えて、**理解**（あるいは受信）という、それぞれに独自の選択性をおびた3次元がそろわなければ「**社会的**」な性質を達成できない。それには、とくに受信する側での理解が重要である。このことは、ルーマンの強調点でもあった。たとえば、ファックスかメールか何らかの伝達装置を使って記号を一方的に発信するような仕方で、単に発信しただけではコミュニケーションの社会的な成果は生まれない。また、発信者の情報が受信者に届いても、受信者に何らの変化も生じないような伝達は「社会的コミュニケーション」としての性質は希薄である。社会的な性質をもつためには、プラスにせよマイナスにせよ、両者間の共通な理解を生みだしうる基盤、たとえば、言語が同じであるとか両方の知識水準が類似であるとか、発信者と受信者との共通要素が**媒体**として介在しなければ理解は具現できない。受信者の理解によってコミュニケーションは相互作用に近づいていき、社会的な再生産の軌道にのっていく。その理解が行為に還元されることによって、客観的な形で、しかも限定された、単純な形にして把握され、さらに相互作用の反省をとおしてフィードバックしていくという過程がくり返されるのである。《**コミュニケーションの過程は人間社会を人間らしく成り立たせる基礎的な事実である**》。

2. 相互作用における「相互化」のプロセス

家族、恋人、友達、遊び仲間、学校、会社、ボランティア活動、レジャー、……など、私たちの**ミクロな世界**、いわゆる「**第一次的な関係**」の世界では、今でも身体的な接触が主要なコミュニケーション形態であることは事実である。けれども、そうした関係は、近代人たちが自分の可能性を求めて拡張したマクロな広い世界では、もはや主役の座を第二次的な関係、身体的には間接の接触に譲り渡してきた。しかも、現代では、情報メディアの飛躍的な発達を基盤的な事実として、デジタルなネットワークによって多くの重大な事柄が処理されていることは、ほとんど自明の事柄である。その意味では、私たちの関わりの世界は、もはやフェース・トゥ・フェースの直接的な関わりの比重が減少し、そのようなミクロの直接的な関わりが意味をもつ世界が限定されるようになりつつあるかのようなのである。そうした今日的なコミュニケーション過程の現実を生活の舞台としながら、第一次的な関係のネットワークが私たちの生活にとって独特な意味をもっていることを、理論的な視線で把えてみようというのが、この論文の意図である。

人びとが互いに関係をもたない、＜無関係な形で並存＞している「社会化」前の状態から、直接的または間接的に＜互いに向かいあう＞「社会化」状態へと転換する過程を、社会学的に問うということが問われるのであるが、特定の空間と時間の枠づけのもとで、人びとは、単なる個人(またはパーソナリティ)として孤立的に生きていることは少ない。人びとは、通常、相互作用をとおして積極的な協力(Miteinander)、互恵(Fuereinander)、消極的な並存(Nebeneinander)、さらにはまた対立(Gegeneinander)の状態に入り、それによって、単なる有機体としての人間ではなく、まさに**社会的な存在**になる。この場合に、社会学からみて大切な点は、人びとが個々の具体的な場面において、そうした共存(協力)、互助(互恵)、並存、対立などの状態に置かれている、その自己と他者の個々の関係の内容と種類だけでなく、その**場面における関係上の位置の置かれ方または分布のパターン**である。

実際、私たちが一つの場面で他人と出会ったとしても、その他人との間で必ず積極的な相互関係が生じるというわけではない。たとえば、長距離列車のコンパートメントで同席したとしても、ジメルという並存関係以上にならないこともある。いったい、そこでは何が人びとを積極的な相互行為へと導くのであろうか。これまでの行為論では、ある行為者の単位行為に見いだされる種々の要因が概観され、そのなかで、行為者の利害状況と価値の基準をベースとしながら、とくにその内面世界(パーソナリティとその意識)の中心である自我が社会のどのような部分に包絡または付託して自分のおかれた行為状況を定義し、どのような結果(目標の達成)によって満足するかということを決めていることに目を向けてきた。と同時に、そのような行為の決定を具体的に実現するためには、行為者自身の行為能力(たとえば行動の知識や技術、行動エネルギーの動員など)に加えて、社会の側で用意する社会的な地位、諸資源、社会規範、などが重要な役割を果たすことも明らかにされてきた。そのように考えると、行為が相互的な形で具現されていくためには、それらの要因を＜**相互化**＞の観点から把えなおしてみる必要がある。

相互行為の形態としては、たまたま交通信号のかわるのを待ちながら話をするとか、出会いがしらに会話をして去っていくとか、音楽会で隣りあって寸評しあうとか、短い時間のなかで対面的に接触しあっている状態から、特定の場面、典型的には家族、学校、教団、会社、食堂、交通機関など具体的な集団の内部で持続的かつ反復的に相互行為を展開する場合まで、それらの事実がパターン化される度合の違いがあるし、そのなかで行為者が相手のなかに浸透しあう関わりの度合にもいろいろな差異がある。ジメルの考えによると、「社会は、統一的に固定している概念ではなく、所与の個々人のあいだに成り立つ相互作用の数量と密度とにしたがって、多くもなり少なくもなる程度の概念である」。彼は、この性質を「**相互作用の規定度**」(Messe der Festsgestelltheit Wechselwirkung)と表現したが、こうした把えかたは、デュルケムが、まだ固定化していない「社会的な潮流」から次第に「生理学的事実」、さらには「形態学的事実」へと、多数の人びとによって固定的で

凝結的な形態と認められる度合の違いを見た「社会事実」の様式化の観点にも共通している。社会事実は、きわめて不安定で不確定で流動的な状態から次第に形を整え持続的な性質をもってくる。相互作用から「相互関係」または**社会関係**(social relation)へと固まっていくわけである。やがてこの関係は解消され消滅していくこともあり、一連の過程として把握することが必要である。ただ、社会関係という言葉のもつ静態的なニュアンスはどうにも避けがたいところがある。

そこで、ジンメル の意図をうけて、さらに積極的に、相互行為の動態的な諸契機に着目し、行為者が相互行為に向かう事象と傾向を「**相互行為化**」(interactionalization)、略して「**相互化**」と呼ぶことにしよう。この相互化の契機(=条件)として作用するのは、人びとがその特定の行為環境のもとで、他者との間で共有できる要素として見だし判断し活用することができる行為の諸要素である。人びとの相互行為はさまざまな要因によって成り立つが、基本的には、行為の諸要素のそれぞれが「相互化」の働きをする必要性と可能性に分析の手がかりがある。複数の行為者が相互行為を実現するには、通常、両者が直接的または間接的に **出会うという事実** が必要である。社会の開放性が高まり、人びとのコミュニケーション・チャンスが情報メディアの働きによって格段に変化した今日の社会では、この出会いは、相当の程度まで、偶然的な性質をおびたものを含むであろう。だが、相互的な行為であるからには、行為の主体(自己)の側に必要性と可能性があるというだけではなく、相手(他者)の側にも相互化の必要性と可能性がなければ現実の具体的な形になることはない。そのように相互行為は、それぞれの行為者における「相手」への — まだ現実に特定の他者と出会う以前の — 一般的な受けいれの構えとか用意によって具体化されていく。これを、行為者における相互行為の受けいれ態勢(readiness)という意味で、「**相互化のレディネス**」(interactional readiness)と呼ぶ。たとえば、私たちの日常生活で最も分かりやすい事例は、<適齢期>という考え方である。一定の時期になると、若い男女は、それぞれに異性を強く意識しはじめ、次第に自己の側から自己の出会うべき異性のイメージを特定するようになる。たとえば、理想の男性や女性の像とか、どういう出会いかたをしたいか、などと、各人なりに愛する(べき)異性との相互行為について何らかのストーリーを描いて現実の相互行為の機会を待っているのが常である。まさにそれは恋愛過程の相互化レディネスであり、その描いた物語に枠づけられて若者たちは愛する相手との出会いの場を設定したり、相手を選択したりするの。それは、他者が自己のなかに浸透してくることへの受容が基本であって、この受容の意識がなければ、そして受容の準拠枠組(frame of reference)が合致しなければ、どんなに一般的で客観的な眼でみてすばらしい男性や女性に出会っても行為者本人にとって刺激度(価値)は低い。それは、他者への構えという点で、「態度」の概念に近似するが、相互化レディネスの場合は、特定または不特定の行為状況における相互行為への態度を、主として行為状況の受容サイドで把握しようとするという点で、態度よりは限定された事象

を指している。もちろん、こういう意味でのレディネスは、具体的な集団のなかで相互行為を受け入れる心の準備として見いだすことができるのであって、たとえば、日本の親子関係でも、親子の相互化レディネスは、母親とのコミュニケーションが大きな比重を占めるという、伝統的な傾向がある。

相互化のレディネスを追求していくと、人びとが内在している人間観やそのまた背後にある価値基準の働きが説明の基本的な出発点となることが分かる。すなわち、その特定の相手(しばしば類型的に理解された相手)との相互行為をとおしてどれだけ有意義または有効な価値を実現できるかという「価値志向的」な意味づけが基本枠組となって、他者にたいする判断や配慮を方向づける。これもレディネスであって、しかも、単なる個人の内面でのみ形成されているのではなく、**社会のなかに一種のモデルが用意されている**ことが多い。ひと頃よく話題になった<恋愛マニュアル>もその事例である。こうした評価機能に一定の枠組を示すのは社会と接続した文化の標準的な働きである。この価値の座標に即しつつアスピレーション・レベルに凝縮されている個人的な欲求や関心など、「動機志向」的な諸要因も他者についての認知や評価に関わって、レディネスを左右する。

もっとも、価値志向と動機志向との、内的な志向の二つの側面は、恋愛とか友人の関係のように相対的にプライベートな領域では、大きな矛盾を含まないかもしれない。つまり、実現すべき(したい)価値の内容が、たとえば優しさとか美しさとか賢明とかいった個人的な属性であるとすれば、それは相手への願望の内容でもありうるから、そこには社会の側の価値的な要請が侵入してこないであろうし、ごていねいなことに、社会の潮流(雰囲気とか世論とか流行など)に乗って、ほどほどに調整された――顔の、服装の、言葉の、表現の――標準パターンが型どりされている。

けれども、相互行為の展開される生活領域によっては、社会という存在が、望ましい行為のルールを行為者にたいして否応なく強制しはじめる。ある時代には、日本の社会は、男女の結合に対してもさまざまな拘束を加えていた。今日でも望ましい人間関係像は存在している。人びとの価値づけの背後には、行為者の準拠する集団や社会の要請と働きを見ることができる。既にみた、準拠集団が行為者に基準を与える働きもレディネスを左右する重要な事実である。たとえば、集団、コミュニティ、階層、教会、会社、故郷……などのいずれに行為者がコミットするかという、社会的準拠のあり方についての的確に答えを用意しているとそれだけ個人のレディネスは社会的にも適合しやすいことになる。ただし、ここまでは、人びとが行為者として意識のなかで自ら決定できる部分である。たとえば他人の目にはどんなに喜劇的に映ろうとも、行為者が自己の属性と合致しにくい準拠をとることはできるのであるから。けれども、相互化のレディネスが、他者を受容する枠組として、あるいはもっと積極的に、他者への関心や接近を誘導する枠組として適切であるためには、行為者自身の主観的または客観的なインタレスト状況に応じて、とくに行為を通路づける諸要因について社会の側が的確な基準を用意しているかどうか相互化を左右す

る焦点となってくる。このことは、行為における社会の側の主要因として考察される事柄であるが、具体的な行為における目標達成にとっては、必要な手段（知識や技術、金銭の支出、道具や装置など）を考慮しなければならないし、実際にその行為状況において必要な手段が分布しているかどうか、行為者自身がそれを動員できるかどうか、という状況要因が関わってくる。したがって、行為者にとっても、果たしてそうした手段を動員しコストをかけて十分にメリットがあるのかどうかという計算がしばしば必要になる。しかも、行為者は、自己が準拠する関係の広がりの中で、相手と（第三者も含めた）他者との間で織りなす一種の関係網のどこかに位置づけられて、一定の地位または立場を与えられ、その限りで自己の実行すべき行為を決めることになる。この地位の事実は次章で詳しく考察することになるが、行為の計算では、相手がその地位にふさわしいかどうかの判断が加わるし、さらに単なる行為主体サイドだけではなくて、相手サイドにもその行為を具現するための直接的な知識や技術などの手段がレディネスとして備わっていなければならない。

3. 秩序のミクロ・モデルとしての「ダブル・コンティジェンシー」

相互行為のレディネスが問われるのは必ずしも当の行為者だけではない。たとえば、行為者を取りまく他者の理解（許容度）や協力の可能性も社会的な事実として忘れられてはならない。そして、受けいれの態勢は、かつてグループ・ダイナミックスの先駆者、K. レビンがパーソナリティの表層または周辺領域と中心に関する「社会的距離」の平均的な傾向として示したように、**民族的な型どりの違い**を含み、たとえば、アメリカ人は、パーソナリティの周辺領域には進入し通過しやすいが中心の領域はコミュニケーションの影響から孤立している。これに対して、ドイツ人は、最も周辺的な領域にだけは侵入することができる。これはマナーとして受けいれる公開的な領域である。しかも、その内側になると、私的な領域とされているから、個人的な情緒や友情の世界といえる。アメリカもドイツも双方ともにパーソナリティの中心には入りにくい点は同じであっても、周辺領域の意味づけによって、民族レベルで相互化のレディネスが違ってくるのである。

このような種々の相互化レディネスのもとで、人びとは、何らかの直接的または間接的のきっかけをとおして相互行為の過程に入っていく。相互化は、人と人との出会いから個別および具体的に始まるのであるが、その過程には、偶然的な要素が内蔵されている。しかも、この過程では、個々人の一方的な行為ではなくて、相手の側の行為諸条件や相互化レディネスがかみあってこそ相互化が可能であるから、他者との相互行為の実態は実に途方もないほどの組み合わせにもとづいている。人びとの行為において相互の期待または予想・予期の合致が秩序状態を実現する過程について、パーソンズは、自我の行為の可能性がその行為状況において関わりあう（べき）他者のあり方に依存しているという性質に着目し「**ダブル・コンティジェンシー**」(double contingency)

と表現した。これは、状況による依存して生じうる二重の偶有性を意味している。つまり、ある自我の要求充足は、他者の側で期待したように自我の行為が遂行されそれ相応に他者の反応も肯定的な形をとって現れることを条件としてはじめて達成されるのであり、このように、行為の主体と客体との間に何らかの点で相互補完的な関係が成り立つことによって相互作用は順調に進行するはずである。しかし、この相互に期待しあう関係は自我と他者との双方に偶発的で不確定的な要素を含みうるから、人間と社会との特有な複合性のもとでは、自我が他者に期待し予期しているとおりには他者が意志をもち行動するとは限らない。他者の側でも同様である。個々の行為状況には期待はずれや予想はずれが内在しているから、期待が型どおりに実現されうる100パーセントの保証はない。しかも、それは自我と他者との往復の関係であり、**二重の偶有性**である。この不確定な状態をゼロに近づけるには期待の相互補完性(相補性)を高めることが課題となるというのがパーソンズの社会分析の出発点であった(鵜、1979 [あゆみ] . 51~55頁; 1981 [システム] 80頁)。

けれども、自我が他者との間で相互に行為を期待し予想しあうという指摘だけでは、分析は不十分である。ルーマンは、相互行為において、自我が他者の側でどのような期待をもって自分(他者)の行為を選択するか、そこでは自我が他者の期待にとってどのような意味をもつかということを推測、予想、期待することがなければ、自我は、自分の意図するような行為とその結果を生み出すことはできないと考えた。これは「**予期(について)の予期**」(Erwartung von Erwartungen)と呼ばれる想定である。単純なことのようであるが、このように他者の意思決定の内面に一步はいりこんで把えないと、他者との間の文字どおり「相互的」な関係をとおしてシステムの秩序が成り立つ過程や、その結果として「予期の予期」が外れてコンフリクトの源泉が生じていく過程も明らかにされない、とルーマンは見た(1972。37~46頁)。これが彼の「ドッペルテ・コンティンゲンツ」論であって、「行為の一般理論」の修正案の一部である。こうした仮定の背後には、かつてT. リットが「**視界の相互性**」(Reziprozitaet der Perspektiven)と名づけた発想がある。つまり、自我と他者との間では、互いに相手と同じ視界に立てば同じことを同じように経験する可能性が高まるし、その特定の行為状況では他の面での相違に優先して現在の視界のもとで互いに理解することができるというわけである。たしかに、日常の生活に帰してみると、たとえば一卵性双生児の場合など、生理的な水準で互いに相手の状態が分かると言われるし、円熟した夫婦の場合など、やはり相互に発信する記号化と記号の解釈が合致しやすく、互いに何を感じ何を考えているのか分かりあいながら相互化の度合を高め、また維持していくことができるのであろう。**ダブル・コンティンジェンシ**の仮定は、私たちの**社会秩序が成り立っていく最初**の**ミクロ状況**であって、このズレを解消するのは、集団のメンバーが<望ましい行為>を自発的に判断し実行できるように効果的に社会化することによって相互に食い違いのない行為状況を作り出すという**理想の秩序論**をいかに具体化できるかということになる。ただし、これらの論議はみな **ミクロなレベル**での

模型的な話 である。

自我と他者との関わりあい、現象学的な社会学の立場からは、「**我と汝**(なんじ)」の関係として論じられている。自我が他者をどういう基準と関係づけて意味づけ理解するかによって、行為者の位置はさまざまな様相を示す。A. シュッツは、まず、他者が「共在者」(Mitmenschen)として自己とともに生き生きとした現在を共有している「直接世界」に注目する。それは、人びとを直接に取りまいて世界であって、具体的な諸要因によって動かされている生活世界である。この世界は、我となんじとの向かいあう「なんじ-志向」と「われわれ関係」とから成り立つ。「なんじ」というのは明らかに親称であって、「おまえ」や「あんた」の関係で把えられた相手である。「あなた」(ドイツ語では "Sie")ではない。だから、「なんじ-志向」のもとでは、時間と空間の直接的な限定のなかで、相手を自分と同様な 主体として「第2人称」的に見つめ、私の面前にいる存在として相手を経験し、相手の内的な体験に迫ることが起こる。その限りで、**われ-なんじ関係**のもとでの他者は「**仲間**」(fellow man)であって、なんじ-志向の相手との向かい合う関係が成り立つと「われわれ関係」が生じる。このように理念的な「われわれ」関係が形成された時に、その親密な関わりをとおしてダブル・コンティンジェンシー問題、すなわち秩序形成のミクロな可能性がどのように理論的に解決されうるかという点について、シュッツは明確にしていない。それは単なる親密関係の描写に終わっている。

シュッツの考えの延長線上で、M. ブーバーは、『われと汝』(1968)を書いた。そこでは、行為者は「個我」ではなくて、もともと「**人格**」として現れてくるべきなのに、今日の社会では、我となんじの関係で、自我が「個我」としてのみ現れ、他者は利用すべき「対象」にすぎないことが多くなっている。そのような存在でしかない他者の存在では、考えてみると、人間関係のうちに把えられている部分が増加していることは否定できない。いわゆる< **マン-マシン・インターフェイス** >と呼ばれるメディア接触の実態は、たとえば、パソコンと向かいあっている大人やファミコン・ゲームに熱中している子供の情景に典型的に現れているように、人間を間にいれない「**我-それ**」関係である。しかも、単に機械との接触様式が増加したというだけでなく、そうした機械とのダイアログ(=相互にかかわりあう関係)に慣らされた人びとが人間(汝)さえも「**それ**」化してしまうという傾向が現れはじめている。ここでは一種の倒立現象が問われなければならない。実際、現代の日本の子供たちにとって、実際の「友だち」の多くは、たとえば、学級が同じであるとかクラブが同じであるとかいった外的な枠づけだけは「友だち」として共通性を与えられた「友だちである」にすぎないことが見えてきている。それは、互いの自我に深く関わった存在ではなく、いわば見かけのうえで成り立った「われとなんじ」であって、そうした外的な枠がなくなればいつでも簡単に解消でき、いざという時にはもろくて当てにならないに他者と自我の関係が生じつつある。「それ」的な「なんじ」への変質である。このように微視的な視点からすると、「**社会秩序**」、すなわち

《 相互作用の反復性と期待または予測の可能性にもとづく相互作用チャンスの型どりされた状態 》は、次第に相互作用の人間的な要素を失いつつありながら安定していることが分かる。他者を「それ」または「もの」と見る傾向もひとつのレディネスに違いない。自分にとって他者をどう意味づけるかの問題である。

4. 関わりを基礎づける「相互化の契機」と資源

私は、これまで自我と他者との関係を「相互」作用と表現してきたが、厳密にいうと、社会関係は、自我が他者と向かいあうだけではない。現象学の立場から、清水盛光は、人びとが他者を、どのような方向づけによって、どのように「意味づける」ということについて三つの可能性を指摘している。「意味志向」の相互関連(志向関係)である。A. 人びとの志向する意味が相互に限定しあうだけでなく、(それぞれに帰属する場合をも含めて)自と他とが相対し、しかもその志向が自と他との差別(以下では区別と言いかえる)の意識をともなう個人意識として作用している関係を、「相互志向関係」という。自我と他者とがそれぞれ自己を保持しながら相手を対象として向かいあっている関係である。B. 自と他との個人的な志向にもとづいて成り立っているが、互いに向かいあうのではなくて、同じ対象にむかって平行的な志向が作用して人びとの間に志向に関する同一性が生まれ、そのことを人びとが相互に了解している場合、この関係を「共通志向関係」という。この場合は、自と他との外側にある同じ対象が複数の個人的な志向を一つに収斂させるのである。c. その同じ対象に向けられた志向が相互に共有されることによって、もともとの個人的な志向の単なる累加ではなく、何ほどか一体化され、区別の意識から離脱した(清水の言葉では「無差別化した」)複合的な主体として体験されている関係は「共同志向関係」と呼ばれる。この場合は、心理的には各人のなかで個別または個人的な志向が希薄となり、体験としては自と他とが単一化した状態で相互を見ていることになる。

「主体の一体的無差別化と志向の共同的単一化」が共同志向関係の要件である。双方の矢印が→から＝になるのである。清水の論議は難解なので、具体的な例で考えてみよう。

たとえば、相互志向としては恋愛、友人、取引、格闘技……などの関係を、共通志向としては芝居や音楽会の観客、スポーツの観衆、観光地で解説を聴く旅びと……などの関係を、そして共同志向としては、家族の生活、会社の仲間が手伝いあう仕事、仲間で作る芸術作品……などをあげることができる。狭く捉えると、相互行為は相互志向関係に相当することになるが、前述の定義との関係で言えば、相手を行為の客体とする仕方において、相対しあう位置におくか、平行的な位置におくか、それとも相対と平行のいずれをも含みつつ自と他との単一化が見られるかという違いと考えられる。そこで、相互行為の広範な該当範囲がこの意味付与の積極性によって限定され、相互化は、意味志向に即して、相互志向的、共通志向的、共同志向的な相互化とに分かれるのだとみよう。この

3形態の間の位置づけは、必ずしも段階的(進化的)なものではない。経験的には、出会いという相互志向関係を経て共同志向関係が生まれるように思われるが、ある行為状況のもとで突然に「共同的な」陶醉の境地に引き込まれることがありうるし、旅さきでたまたま同じ風景を見ている人間にとっては、互いに顔を見あわせるとか会話をかわすとかいったことでもない限り、共通志向関係にはならない。

行為者が相互に相手を客体として行為する、相互行為の過程は、従来の研究では、とくに社会心理学の領域で、「対人関係」(interpersonal relation)と呼ばれてきた事象に近い。《相互に刺激と反応をくりかえす相互作用を経て、個々人の間にある程度の持続性をもつ心理的な結びつきが形成される時、「対人関係」という》が、それは、組織体におけるモラルや生産性を左右する要因としての「狭義の人間関係」と区別された「広義の人間関係」とほぼ同義である。この対人関係のアプローチでは、対人認知、態度、対人魅力、対人援助や攻撃など、私がここで「相互行為」と呼ぶ事象である。けれども、ここではそうした<人間関係=社会関係>の形成プロセスには詳しくふれない。

たとえば、<出会いの過程>は多分に偶然性に左右され、運の良さ悪さという制御不可能な要因を含んでいるが、結婚でいえば日本の見合いのように、あるいはヨーロッパやアメリカの結婚相談システムのように設定的な仕組みによって出会いが実現されることもある。E.ゴフマンは、たとえばパーティ、卓上ゲーム、二人で組むダンス、求愛、ボクシングなどのように「人びとが、互いに相手と身体的に直接的に居あわせる場合に起きるタイプの社会的配置」として「焦点の定まった集まり」に限定して出会いを論じているが(1961)、私たちが通常で出会いと呼ぶのは「めぐりあい」の意味であろう。

<相互化の決定過程>では、単にどのようなパターンを、どれくらい、どの程度の水準で達成するかというだけではなくて、その行為を選択する限り、どのような意識と行動の様式をとらなければならないかという現実的な判断が必要である。さらに言えば、その相互行為状況において自己が動員できる資源の判断や、どの範囲の人間関係の広がり連鎖反応していくかという判断、も重要である。したがって、<相互化の学習過程>では、選択された相互化パターンに応じて相互化の規範、資源、関係をも学習し、共通な認識や感覚や判断をもつ努力が必要であって、そのうえ、たとえば相手の関心(ホンネとタテマエ)、相手の長所と弱点(致命的なポイント)のバランスシート、相互の矛盾点、相手の戦力(直接的または間接的に動員できる力)、状況のなかで譲歩できるゲームかどうか(ゼロ=サムか、ノン・ゼロ=サムか)といった特殊情報の学習による文字どおりの現実的な相互化能力の修得が必要である。

こうして概観してみると、私たちがコミュニケーション過程として考察していた事柄が相互化過程の1位相であることが分かる。この過程の興味ぶかい部分は、ゴフマンのドラマツルギーで「自己呈示」の問題として論じられている。相互行為のより社会的で面白くかつ蓄積の多い部分は<遂行の過程>であって、まず、行為者は、自己の保持してい

る魅力の諸源泉、つまり各種の具体的な資源を操作することによって他者のニーズを誘導する行動をとり、客観的な行為状況に働きかける制御の試みを相互に交わす。その作用過程に並行して、自己の利益はもとより、他者の利益をも考慮する、相互化にふさわしい情報処理、たとえば、他者に働きかけることにともなう自己の心理的なコスト(恥ずかしさ)や他者の側でのコスト(相手の体面)を計ることによって、相互化に有利な状況を作り出すことが必要である。ゴフマンが相互行為の儀礼として取りあげているのは、こうした自己利益と他者利益に作用する情報制御の問題である。また行為者は、相互化以前に保っていたメンバー相互間の心理的、社会的、文化的、地理的、生物的な距離、とりわけ心理的な距離を相互化の進むなかで排除もしくは短縮化していくことに努力する。そのことは、同時に行行為者が相互に相手の心理的、文化的、地理的な、さらには生物的な領域になかに何ほどこ進入し、次第に相互志向的、共通志向的、共同志向的な相互化の成果を累積し確認していく(=逆にその可能性を否定し成果を拒否していく)過程である。相互作用の遂行には、相互化を促進する各種の記号と意味の約束、つまり社会的コードがともない、それ相応の社会的なルールがそれぞれの生活領域に形成されている。と同時に、相互作用の主体の間には、主体を超えた枠組が成り立ち、主体の相互化を方向づけていく。ジンメルは、この枠組のことを「カテゴリー」として把え、ゴフマンは「フレーム」と表現している。それゆえ、当然に、行為者間の、たとえば、日常的な取引、結婚、親子関係、パーティ、恋愛、犯罪、医療……などのやりとりが、まさにトランザクション(transaction)の名にふさわしい一種の**相互化ゲーム** <(かけひき)>として含まれている。この場合の枠組は社会関係としての「システム」と言いかえてもよい。したがって、このシステムは、単にその当事者のみではなく、相互化を促進しうる第三者の支援を求めることも起こる。たとえば、相互化を望む行為者に情報を伝えたり、双方を媒介したり、という役割を担うシステムが成立するのは、相互化過程の開放的な側面を示している。それは、一種の**媒介システム**であって、広義の<市場的>な性質をおびており、そのようなシステムが相互化過程の周辺に形成されるのは、そもそも相互化の過程それ自体にも相互化ゲームとしての**<市場的>な性質**が内蔵されているということでもある。

相互化のプロセスは、このように、**態勢、出会い、吟味、決定、学習、呈示、遂行、評定、修正、解除**といった種々の**位相**を経て進行する。そのなかで行為者が相互化の情報処理と相互化の作用とをとおして文字どおりの「相互的な行為」の過程に入る事実を説明する社会学的な鍵は、まず、ひとたび何らかの機会を得て運命的に出会った行為者が相互化のレディネスに内蔵された相互化の価値基準を双方でどれだけ共有できるかという点にかかっている。社会の情報システムの観点からすると、現代社会においては、各種のマス・メディアやニュー・メディアによって拡大したネットワークをとおして上述の意味での市場的な媒介情報や媒介システムにこと欠くことはないように見えるが、実際には、拡大し複合化した世界のなかで過剰な出会いと情報の機会によってむしろエントロピカルに

なっている。60億人を越えた世界の人口構造では、年齢幅5歳として単純な計算をしても、配偶者として考えられるのは約2億人は存在する計算であるが、実際には、この数が各人のレディネスの枠組、それも理想化された枠組によって大幅に狭められていくのである。

相互化の吟味から決定や学習へと、情報処理が優先される位相では、その相互作用をとおして客観的にどれだけの価値を具現できるかということが大きな鍵となる。それは、たとえば、憧れや原理で示されるような、単なる価値基準一般ではなく、その行為によって具体的に何がどれだけ得られるかという問題である。つまり、特定の行為状況におかれた行為者が直接的または間接的な相互的な関わりをとおしてそれぞれの価値リスト上のどのような基底価値を付与されたり剥奪されたりするかという問題に係わっている。それは、相互化の客観的な行為そのものが優先されていく〔呈示から遂行〕の位相でコミュニケーション能力と相互化のコードが特有な働きをするのに対して、その内容は自己利益的でも他者利益的でも、行為における相互的なバランスシートを最適化していくうえで相互化過程を一貫して行為者それぞれの意識と行動を導く実質的な基準であり、これを柱として

— 相互志向も共通志向も共同志向も — 妥協点を見つけたり断念したりする相互の具体的な判断を導くことができる。したがって、この実質基準に相当する事象や事態は、相互肯定的と相互否定的のいずれの結果を導くものであれ、行為者に共有され活用されて何らかの端緒となりうる行為の諸要素という点で< **相互化の契機** >と呼んだのである。

人びとの相互化の契機となりうる、自我と他者との共有可能な個別的で具体的な特性は千差万別であるが、ある程度まで項目化してみると、次のようなリストを掲げることができる。すなわち、(1). 科学、芸術、宗教、道徳など精神文化における価値的な標準、(2). 法、慣習、儀礼など社会規範、(3). パーソナリティや身体レベルにおいて敬意や愛や友情の対象あるいはパートナーとして他者の存在そのものを求める志向、(4). 行為者の具有した意味や言語などシンボリックな媒介状況、(5). 仲介的な人物や代理的な組織や市場的な施設・機関など社会的な媒介状況、(6). 生得的な血縁、人種、年齢、性、など人間的自然の特性、(7). 設備・道具・乗り物などの物財やサービスの所有や利用、(8). 自然環境や地域特性などへの帰属、(9). 地位、階級、身分、コミュニティなどへの帰属や集団の外的状況、(10). 特定の事態や状況のなかで、他者との関わりをもつことへの意味づけ(親睦、同情、共感、信頼、礼賛、好み、など)、(11). 自己の欲求・関心・目標などの達成にとってもっぱら手段的な価値をもつ交換(売買、貸借、贈与)の対象、(12). 他者が自己のゲームの対象として手段的な価値と同時に共に楽しむ価値をも提供する広義の遊び、(13). 人びとが自己の欲求・関心・目標を相互的な関わりのもとで集合的な形で具現的価値を求める作業や活動における役割や課題や活動それ自体、といった諸項目である。

このようなリストは人間の生活にとって一つの例示にすぎないが、これら相互化の契機は、人びとを行為の相互的な状態におく、まさに< きっかけ >に過ぎないのであって、上に挙げた各種の項目に当てはまる一つまたは複数の契機が共有されたとしても、行為者の

双方にとって常に肯定的で相互促進的な結果をもたらすとは限らない。たとえば共通な関心や目標をもっていても互酬的な条件が得られないために交換ではなくて相互に競争しなければならなかったり、同じ世代に帰属することによって相手がライバルとなったりというように、共有された契機がかえってマイナスの形で作用することもありうるからである。

5. 相互化過程における「資源」の意味

では、いったい行為者がそれぞれの行為状況のもとで操作する行為諸要素として制御するのは何かという問題になる。このことは、これまで暗黙のうちに論及してきた相互化の資源の問題である。いったい「資源」とは何をさすのか。ここで問題とする「資源」(resource)とは《行為システムが目標達成のために活用しうる諸手段(材料)であって、自然のままの資源とは限らない》。人間の行為システムは一定の環境諸条件のもとで生存しつづけるのであって、それぞれのシステムは、その内部過程と外部過程でさまざまな資源を産出したり調達したりする必要がある。その資源のなかには、a. 収入のように貨幣の形をとった資源も含め、家屋、車、機械、道具、衣服など、動産や不動産の各種多様な**物財的資源**、b. 各種の知識、技術、芸術、信仰、礼儀などの**情報的資源**、c. 人員やその人のサービスおよび肉体的な強健さといった**人的資源**、d. 種々の人間関係において愛されたり尊敬されたり恐れられたりする相互行為レベルの対人的影響力や会社の社会的信用や威信や勢力など**関係的資源**、という4種の系列を区分することができる。

後にみる交換という発想もそうであるが、資源という発想も、その原型は経済学に見られる。イタリアの経済学者で優れた社会学者としても社会システム論の先駆となったV. パレートは、経済の世界のほかに社会的な世界の面白さを教えてくれたが、その発想を受けて、たとえば地域経済学者のW. アイザードは、経済的な財または資源のみならず、地域システムの分析を進めるために、尊敬、社交、連帯、愛情、公正、安寧、勢力、投票、愛情贈与、賞罰などの「**非経済財**」(noneconomic comodities)に注目し、社会生活のかなりの部分が財や資源の交換関係として成り立っていることを明らかにした。また、政治学者のラスウェルが提示した社会生活の価値表も、非経済的な生活場面におけるいろいろな資源の形態を含んでいる。こうした資源の基本的なリストについては、さまざまな見解がある。厚東洋輔は、資源の処分力の程度と処分力の利用形態を複合した分類の枠組を示した。彼の場合、モノ、ヒト、シンボルという「社会的資源」の基本形態が、交換メディアとしての、貨幣、権力、名誉、情報処理力という4形態に変換され则认为している。機能の欄にAGIL図式との対応関係が示されていることから推察されたとおり、厚東の図式はパーソンズのメディア論をベースにしているけれども、行為状況の特性については、ヴェーバーの見解を承けている。モノの所有と利用という処分力が貨幣メディアに媒介されて行為場面に現れ、それが市場での利用の仕方に具体的な影響を及ぼすのが「階級状

表 社会的資源・交換メディア・行為状況

況」である。「権力状況」に対して「身分状況」は社交に見られる人間的な交流と性的な交渉(親族)の有無によって示されるという。同じ身分の人びとが互いに頻繁に交渉をもち、この身分にたいする帰属感を共有することを通して、身分状況は人びとの生活の中心部分を占める「社会的交渉」の範囲を画定する。したがって、身分状況の違いは人びとの生活態度にも差異をもたらす、と考えられている。概念の問題など若干の異論はあるものの、こうした整理は社会学にとって大切である。

外部体系環境		自然体系	パーソナリティ体系		文化体系
投入(社会的資源)		モノ	ヒト		シンボル
交換メディア		貨幣	権力	名誉	情報処理力
行為介入様式	利用形態 (処分力対象(財))	営利資本財	勤労リーダーシップ	階級(ランク)	テクニック
	報酬 (利用形態 (処分力対象(財))	入用充足消費財	威信地位	アイデンティティ 準拠集団	知識表現 シンボリズム
行為状況 集団の純粋型		階級状況 経営体	権力状況 政党	身分状況 身分	シンボル状況 教団
配分の規則		経済構造	政治構造	社会的交渉構造	基準情報構造
行為体系		経済体系	政治体系	共同社会体系 (親族体系・種族 コミュニティ)	認知体系 (教育体系) 宗教体系
産出		モノの生産	政策	運搬性	レリヴェンス (妥当性・有意性)
機能		A.(適応)	G(目標達成)	I(統合)	L:(潜在性)・Z

いうまでもないが、ここで区分した資源の諸形態は分析上の違いを示すものである。実際には、さまざまな資源が社会生活の内と外に個々断片的に分布しているというよりも、それらが、行為状況の特性に応じて、ある程度のセット化された状態で分布している。個々の行為状況に断片的に分布している諸資源(resources)に対して、それらの資源が行為者の何らかの目的や目標、あるいはさらに何らかの原理や原則に即して組み合わせられ、行為の手段、装置、設備、制度などのセットをなしている場合、これをまとめて「便益」(facilities)と呼ぶことにしよう。そうした便益を提供する資源の物的な側面を文化システムの下位システムとして扱った場合は、建造物、交通、通信施設、各種機械、道具、食器、衣服、……………など、人間の適応諸様式を物質的な素材を用いて結晶化した人工物(artifact)、すなわち「物質文化」(material culture)と呼ばれる。断片かセットか、いずれの形をとるにせよ、行為を実現する、したがってまた行為の相互性が生じていく場合の主に社会サイドの要因として、行為の手段となる具体性の高い資源(便益)がその行為状況内に<どのように配置されているか>、<どれだけ実際に活用できるか>ということが問われるのである。いくら高度な工学知識をもっている、それを理解しそれを技術的や資源的に具体化できる文化をもつ社会にいないければ、なにほどの効果もない。

コミュニケーション、または相互化の過程は「社会的」なシステムが成り立っていくための基本的な要素、いわば社会のストーリーが始まっていく出発点であるが、たとえば、システムの典型的な形態の一つである社会組織では、メンバーの活動(労働)能力や活動意欲(モラル)が何よりもまず人的資源として、また彼や彼女の技術や知識などは情報的資源として、あるいはパーソナリティや社会的な評価が関係的な資源として、社会生活の諸過程で動員されうる。それは、個人にとっての資源というより、まさに有機体、文化、パーソナリティ、社会の諸次元の諸要素を総合した種々の<人材>が関わりあう相互化の過程における——社会にとっての——<資源>なのである。これで分かるように、抽象的な行為者や行為の関わりは実在しえないのであって、社会学的な考察においては、有機体

とパーソナリティの諸要素は別として、文化と社会の諸要素が相互行為に関わりあう過程を取り上げないわけにはいかない。

このようにして、各種の資源は、単に個人的な目的にかなった手段にとどまらず、個人と個人との関わりあう場面で、それぞれの行為状況の特質に応じて、行為者個人を超えた文化と社会の諸要素として何らか型どりされて人びとの相互行為の過程に介在する。それを素材としてどのように活用するかは行為者のニーズや能力や責任の問題であるとしても、相互行為に適用されて社会生活の形成や存続や変動に貢献する。その意味で、資源はしばしば「**社会的資源**」と呼ばれる。こうして、行為および相互行為にとって各種の資源が重要な媒介役をすることは明らかである。それは、行為の独我的で観念論的な説明に対して、人と人、行為者と行為者を互いに結びつけるミクロ・レベルにおける具体的な要素であると同時に、その**媒体機能**(media functions)はマクロ・レベルにおける集団間の結合や個人の集団参加を考察する場合にとっても大切な解き口となる。問題は、そのように媒介の役割をする資源が、—— 単に資源がくある>というだけでなく —— どのようにして人びとの間や集団の間を具体的に結びつけていくのかということである。

6. 相互作用における「相互制御」の意味

もともと、私が、社会関係を明らかにするうえで資源の媒体機能が重要であるというのは《人間または行為者の相互関係が自我による他者の制御を意味している》という点に注目したからである。資源それ事態はまだ相互化の契機、つまり<きっかけの可能性>があるにすぎない。大切な事柄は、人びとが自分たちのインタレスト(=利害得失)の内容である、各種の資源を——それが相手にたいして一定の制御効果をもつと、またそれが自我と他者との共通化および共同化の志向に適した制御効果をもつと予期される主観的または客観的な条件のもとで——制御することによって、単なる<きっかけ>にすぎない事象や事態を、**相手との情報交流をとおして相手の行為のなかに何らかの反応を引き起こす**という意味で、もっと現実の効果的な働きを具現することである。

前にみたように、このきっかけを具体化する前に、私たちは、人びとといろいろな場面で出会う以前に、ある種の受け入れ態勢をもっている。私たちは、出会った誰とでも相互関係を形成するわけではない。言葉の用意とか、顔の好みとか、ファッションの良し悪しとか、好きなタイプの人とか、民族的な偏見であるとか、合理的か非合理的かを問わず、私たち人間は、他人または他者に対して、<一種の触覚のような振り分け能力>を身につけている。それが前述した「**相互化のレディネス**」であった。他者を受け入れる準拠枠である。それは、個人の違いだけでなく、社会のなかである程度まで型どりされている。それぞれの期待は、必ずしも100点満点に実現されているわけではない。

行為の相手を対象とする相互行為をさら実質化してみると、**行為主体の意識や行動の**

何らかの特徴的な記号や振る舞いを相手に伝達し相手に何らかの反応を引き起こす のでなければ、そしてこの **伝達と反応の相互性** が見られなければ相互行為の実質はない。つまり、私たちは「相互行為」という言葉を、何らかの対象または客体に向かって、個人の行為者という形でまったく一方的に意志を伝えたり対象を物理的に操作したりするという観念的な形で理解するのではなく、その対象がたとえ乳児であれ動物であれ機械であれ、いくらかでもその対象の発する信号を受け取り何らかの反応を示すのであると仮定する。行為の主体が互に関わっているという事態は、情報を制御しながら相手に伝えることだけではなく、**行動のレベルにおいても、実質的に「相互制御」** (intercontrol) するのが相互行為であるということを大切にしようとする。このように考えると、ゴフマンが注目した **呈示と遂行の位相における実際的なコミュニケーションと相互行為の過程**も、自己および他者の制御過程として捉えることができる。その制御の手段や媒体も各種の相互化の資源である。もちろん、この場合、資源とは広い意味での資源であって、自然環境の提供する素材という限定された資源(自然資源)ではない。

一般に、「**制御**」(control)とは《行為者が自己の情報処理にもとづいて設定された(あるいは自ら成立した)目標または方向にそって、自己の内外における行為諸要素を操作することにより、直接的または間接的、また意識的または無意識的に特定の対象に作用を及ぼし、その対象からの反作用(=反応)を引き起こすこと》を意味している。もちろん、目標に適合している場合はプラス、不適合であればマイナスの制御である。高度な制御は、特定の対象、他者や物体、を行為者(あるいは作用主体)が自由に — 極端な場合は、対象の側の意志や都合をも無視し逆らってでも — 処理することであって、相互行為の場面でも、支配関係がそうであるように、この種の形態を見ることができる。いずれにせよ、そのような意味での制御する可能性を保有する能力を「**制御能力**」(controlability)と呼ぶ。この能力は、対象に作用を及ぼし反応を呼び起こしうる行為諸要素の動員と操作の能力を意味するのであるが、その効果のうちには、たとえば相手の行為や意識を規制する場合もあるし、愛情を得る場合もある。

制御能力は、制御する主体自身に備わる人格的な魅力とか体力や知能などだけでなく、動員できる手段や支援システムとかいうように、制御能力の基盤や源泉の種別や量に負うところが大きいし、それに応じて制御対象の種別や量も、また対象を制御できる問題のレベルや次元(領域)や位相などの制御範囲も決まってくる。それゆえ、もし有利な状態にあれば、具体的な「**制御チャンス**」(controlable chance)のパターンまたは形態や水準も違った様相を示す。そのような「**資源の制御**」は、資源の生産、収集、加工、貯蔵、再生、評定、廃棄、輸送、用役、実効といった各種の資源処理の位相で行われる。それは、単に物財を「所有」するだけでなく、「借用する」という形態をも含めて、調達し利用する可能性、つまり資源を「動員できる力」という広い捉え方をしておくのが適切であろう。たとえば、住居に関して「持ち家」にこだわる人も依然として多

いが、一方、一定の供給量と水準が確保され、それが適当に情報化されてさえいれば、快適な家屋を折々に選択でき自由に動きやすくコストも安価であるという理由から、「借り家」を選ぶ人も次第に増加しつつある。もちろん、いうまでもないが、日本の場合は、なによりも都市で土地を買うということが至難の業であるという事情が先行する。だが、もっと日常的な資源処理の方式として、たとえばパーティ・ドレスやドライブ・カーなど、いわゆる<レンタル>によるニーズの充足が少なくとも営業として成り立っている。

ここで大切な点は、いろいろな資源を有効かつ適切に制御することによって、私たちは、単にある行為者の内面に生じた欲求充足の手段としてだけでなく、その行為者が他者の行為を制御する手段でもありうるということである。つまり、他者にとって必要な資源をプラスの方向で促進的に、マイナスの方向で阻止的に制御することによって、他者の行為の可能性を左右し、他者の意識さえも支配することができる。こうして、《より多くの制御能力をもつ行為者が直接的または間接的、あるいは意識的または無意識的に、他者の行為を制御しやすい》と仮定することができる。多くの相互作用は、このような意味で、行為者またはその集合体が資源を制御することによって他者や他の集団をも制御する相互制御の過程でありうる。

(情報処理による資源の)制御能力は、種々の資源、とりわけ一般性の高いメディアを高度な質的水準で大量かつ多様に処理する自由を保有することによって高まる。制御源泉としての特定のメディアまたは資源の種別と量は、制御対象と制御範囲に関して有利な条件となり、具体的な制御チャンスのパターンまたは形態や水準に影響する。そして、このことによって、対象への制御効果が高まる。もちろん、この能力は程度的なものであるし、その資源制御の形態は、たとえば法的コードの違いでみても、物権的または知的な所有、共有、総有といった幾つかのパターンとして現れるのである。

80年代のハバーマスが相互行為の典型状況を強調して「コミュニケーション的行為」(kommunikatives Handeln)という概念を提唱したのも、共通価値や規範の妥当性が行為者相互の「合意」形成にもとづくと考え、行為と行為とが結びつくための条件、すなわち「行為調整」(Handlungskoordinierung)のメカニズムを明らかにするためであった。この問題は、相互に関わりあう(あるいは関わりあう可能性をもった)行為者がどのような拘束のもとに置かれるかということに焦点を合わせている。相互に関わりあう行為者が特定の知識を間主観的な拘束力をもった妥当な存在として受け入れる場合は、そこに「了解」(Verstaendigung)が成り立つ。これに対して、行為者が暴力や権威や嘘などを用いて相手の行動決定に影響を及ぼすことによって相手を拘束する場合、そこには「影響」(Einflussnahme)が成り立つ。ハバーマスによると、了解的な行為調整では「了解志向的」な態度が、影響的な行為調整では「成果志向的」(erfolgsorientiert)な態度が現れる。他者との関係を本質的な契機とするのは、了解志向的な場合であって、その典型がコミュニケーション的行為である。真理の妥当性を求めて、経験的な事実を確認しながら、会話をと

おして客観的な了解を達成しようとする「対話的な討論」(dialogische Diskurs)に行
為の調整力を認める考え方には楽観的な知性主義が現れているが、彼は、了解を促す契機
として価値と規範の調整力とドラマ的な一体化の調整力をあげ、他方、客観的な成果を求
めながら技術的かつ戦略的な基準の選択が合理的に行なわれる過程にも行為調整力を認め
ている。端的にいうと、ハバーマスが「行為調整力」と呼んだのは、私のいうく相互化の
ための制御能力と制御効果>である。相手の行動に決定作用を果たし相手の行動を拘束す
るという点において、ハバーマスは、了解志向的な制御と成果志向的な制御とを想定して
いたことになる。

パーソンズは、「一般化された媒体」の代表的な形態として、貨幣、権力、影響力、価
値の付託をあげ、これを「コミュニケーション・メディア」
と呼んだ。彼は、それらのメディアが人びとのコミュニケーションを媒介するという意味
で一般的な媒体機能をもつと同時に相互行為の具体的な場面での制御機能をもつという、
二重の能力を社会全体の規模で示しうと見ていた。だから、パーソンズは、社会生活に
おいて、これらのメディアを用いて制御効果をもたらす主要な形態として、貨幣に対応す
る誘引(inducement)、権力に対応する承諾の確保(securing compliance)、影響力に対
応する説得(persuasion)、付託に対応する付託の活性化(activation of commitment)を
あげている。たとえば、貨幣の誘引機能が相互関係を基礎づけている場合、このメディア
は効用という価値原理に支えられて、相互行為およびさまざまな資源を「貨幣」的な方式
で決済する能力を標準として他者を制御することができる。またその関係が支配形態に転
化するとすれば、それは、貨幣または貨幣的に換算されうる物財的な資源との取引きによ
って「他者の服従」を獲得するという「権力」的な制御方式をとることになる。このよう
にして 種々の資源が「メディア」として機能するための一般的な条件 は、その
メディアが、 識別、抽象、簡単、便利、正確、安定、丈夫、持続 などといった特質を具
備することによって、普遍的な流通の可能性をもっていることにある。典型的な例は、国
際的な場面でコミュニケーションの基礎を与える情動的資源としての 英語の流通能力 と
か商取引の物財的資源となる 貨幣(とくにアメリカ・ドル)の流通能力に現れている。
最近では、貨幣に代わってより安全で携帯に便利、しかも操作も簡単、迅速に処理できる、
世界共通で普遍的なメディアとしてクレジット・カードという情動的で物財的資源をメディ
アとして利用する度が高まっている。

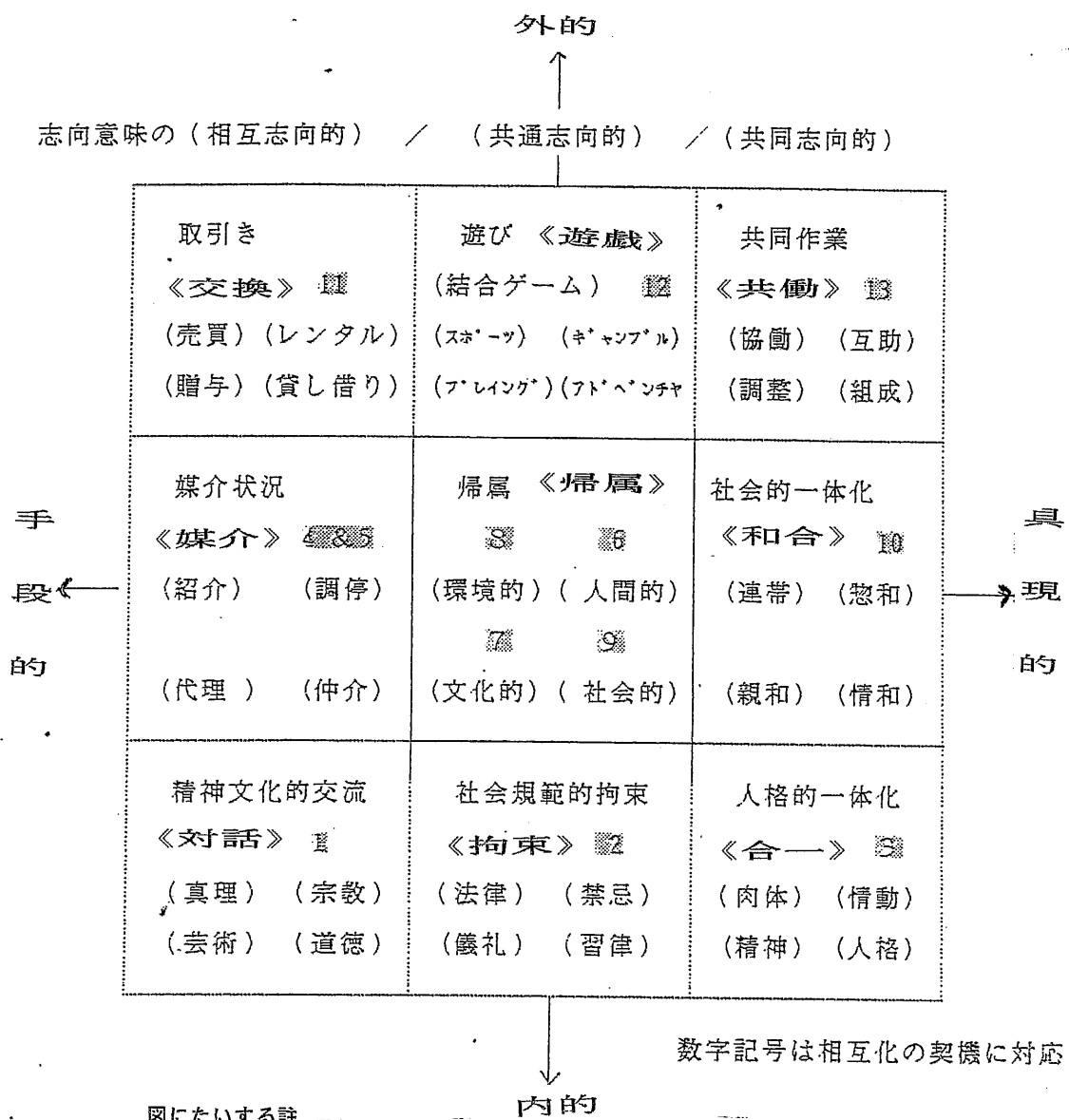
7. 社会関係の諸形態を分類する

社会関係の**基本的な形態**を決める一つの分類軸は、関係しあう行為者の
「**志向する意味**」—— 相互志向的、共通志向的、共同志向的 —— の違いであった。いま
一つは、行為者が外部との相互作用をとおして関係の独自性を獲得する傾向と、行為者の

内面での働きをとおして関係の独自性が見えてくる傾向との「外的-内的」の軸である。志向する意味の軸は、手段的-具現的の軸と重なりあうことができるが、この横軸が「志向意味」にしたがって3分割されるところが重要であるので、図のように、9分割した。

人びとの関係がその生得的な、あるいはそれに準じた性質の **帰属的な契機** にもとづいて成り立つ場合が、結合の中心に位置している。テンニエスの「ゲマインシャフト」は、思考に先立って無条件的に結合を肯定する「本質意志」にもとづく結合である。この場合は、人びとが何か特定の積極的な活動をしなくても、親子や兄弟姉妹の関係をもつということだけで関係が成り立っているという性質である。この関係形態は人間の本質的な結合の絆であることが強調されている。だからこそ「本質意志」なのである。これに対して、企業や官庁や農作業、レジャーなど、人びとが具体的な共同目標を積極的に追求し共

図 相互関係の基本形態



図にたいする註

図のなかで《 》内に示しているのは相互関係の一般名称である。

また、1～13の数字は、前述の相互化契機の番号を示す。

それぞれのボックスにいくつかのサブ・パターンが属している。

同志向的な関心を充たしうる集団での結合は、「**共働的な結合**」と呼ばれる。いわば人びとの「共同」的な目標(common goal)に向かって共同のインタレストをめぐり、メンバー間の心理的または社会的な境界を取りはらって無差別的な意識に支えられている関係である。同じく共同志向的といっても、パーソナリティの積極的なかわりのもとで恋愛や家族関係や友人関係などが形成されうる。これは「**合一的な関係**」である。ここでは、相互の人格的な一体化が重要な性質をおびている。恋愛は、男女の合一の典型的な姿である。これとよく似ているが、メンバー間の共同志向が共働的と合一的との中間的な性質をおびて、社会的なレベルでの関係として現れるのが「**和合的な関係**」である。和合的な価値は、日本人の社会関係において重要な役割をしてきた。それは、長い村落生活のなかで、最高の善として認められてきた価値原理であった。このような和合的な結合形態のひな型は、もっぱら「第一次集団」のようにインフォーマルな性質の強い集団における人間関係をベースにしている。こうした関係を通じて特徴的な傾向は「**親密さ**」であって、それは、冗談や笑いのコミュニケーションに現れてくる。それは、集団のメンバー間にお互いを熟知できるような等質的な前提があって、お互いの関係が何らかの「縁」によって共に包括されている者の結合として意味をもっている。

合一的な関係の典型である愛の関係にとって核心となるのは人格レベルの相互行為であって、きわめて内面的な性質が強い。このような関係は、一方では、行為者または行為者間の個人的または個別的で「**私**」的な特質による結合それ自体が価値をもつということで、(パーソンズの用語にしたがって)、「**個別主義的**」(particularistic)と呼ばれうる。

日本語でも、「和」は、**個別的な関係にある人びとの間の親しい結びつきが自己抑制的な意識と態度によって全体としてのまとまりをもった状態**をさしている。ここでいう「まとまり」はシステムとしての関係を示している。だから、その点で、和の原理は、一見して、むしろ異質な人びとの関わりあう社会で互いに認めあって共存していくために有効な意識や行動の原理であるように思われる。開放社会(open society)では、相互の関わりのなかで自己主張を抑えて他人の存在を認めることが必要だからである。

合一的な関係の場合は、たしかに共同志向的ではあっても他者が限定し特定されて個人の人格的な世界に浸透しあう、時には没入しあって完結していく結合形態であるが、和合的な関係は、その「親しさ」を相互肯定または相互浸透的な一定境界にとどめながら、と同時に、会社、学校、役所、教会など社会の枠組から相対的に離脱し、他者の範囲を格別に特定しない関係である点で、ヨーロッパも日本も問わない、一般的な性質をもっている。けれども、**日本的な和合の特徴**は、この一般的な和合の特質に加えて、特定の親しい関係にある人びとの間に最初からその全体としてのまとまりの状態が一種の論理的および心情的な前提として設定されている点にあり、和合の関係が、何らか合理的な根拠によって支持されるというよりも、情緒的なレベルで成立している。それが「善」とか「正義」の観念をともなって倫理的な意味が強調されている点では「**エトス的な和合**」というほうがよい。

日本の村の生活を自ら<むら人>として体験し観察した、きだみのるは、村(むら)の生活で実現されるべき第一の価値として<和が最高の善である>という命題を掲げている。閉じた狭い空間で、限られた資源ねそれも決して豊ではない資源 — たとえば日本映画『檣山節考』で描かれたように、一人が生まれてくるためには一人が死ななければならない厳しい環境 — のもとでひしめきあうようにして生きている生活では、誰かの利益は誰かの損失という「ゼロ＝サムの」な状態が生じる。

相互志向的な結合で、最もパーソナリティ要素が強く現れるのが「**対話的な結合**」である。精神文化に焦点を合わせると、真理、信仰、道徳、芸術の価値をめぐる関係になる。また、相互志向的でも、自我と他者との媒介それ自体が直接の目的とされる関係は、「**媒介的な結合**」と考えられる。共通志向的な結合で外面的な性質の強くゲーム性の強く支配する関係が「**遊戯的な関係**」である。逆に、社会規範の拘束に強く影響されて強迫的な感覚をとまなう緊張した関係は「**拘束的な結合**」と呼ばれうる。

このような人びとの結合関係が相互化の事実として具体化されていく様子は、相互化のレディネス状態から始まって、現実の相互化過程をへて、相互化が遂行されるまで、さらに、相互化が修正されたり解除されたりする、ポスト相互化過程といった時間の流れまで、いくつもの段階または位相がある。

8. 社会的な過程における「交換関係」の展開

「相互化のメディア」のなかでも、普遍的な流通力が問われる最も典型的な場合といえ、**「交換的な結合」**である。経済的な交換はよく知られているが、P.ブラウは「社会的な交換」もありうると論じた。そのような複合的な視点からすると、**交換の一般的な形態**は、A. 利得の相互性、B. 資源の授受、C. 資源の手段的な評価によって判定されうる。日本人の関係ネットワークを特徴づけるコミュニケーションの社会的コード、中元や歳暮などの贈答は、交換的な結合の一つの変形である。それらは、人びとを行為の相互的な状態におく、まさに<きっかけ>に過ぎないのであって、上に挙げた各種の項目に当てはまる一つまたは複数の契機が共有されたとしても、行為者の双方にとって常に肯定的で相互促進的な結果をもたらすとは限らない。たとえば共通な関心や目標をもっているにもかかわらず互酬的な条件が得られないために交換ではなくて相互に競争しなければならなかったり、同じ世代に帰属することによって相手がライバルとなったりというように、共有された契機がかえってマイナスの形で作用することもありうるからである。

たとえば、海の幸と山の幸とを互いに交換するというように、行為者と行為者がお互いに必要なものを他の行為者に求めあう相互志向的な場合、たとえば、美術展や野球の試合を観るというような同じ目標(目標的な資源)に向かって行為者が同一または類似な行為をし資源を共通にするとか、民族、部族、郷土、会社、学校、身分、教会、などの所属

(帰属的な資源)を一つにすることで自我と他者とが相互に並行的な位置で関わっていることを確認できる共通志向的な場合がある。さらには、真理、愛、利潤、理想、美、信仰、階層的自尊、民族の栄光……などの価値(目標的資源および帰属的な資源)をめぐる、行為者がある程度の一体性をもって活動しているような共同志向的な場合もある。資源はそれぞれの場面でそれぞれの役割をする。客観的に同一の特徴をもっている資源でも、人びとの行為状況に応じて相互化のメディアとして果たす機能は違ってくる。たとえば、利潤や利益として算定されうる金銭的な富(とくに貨幣)は、互いに自己の利益に重点をおいて取引をしている当事者にとっては相互志向的なメディアとしてしか意味はないが、何らかのきっかけによって、相手が自分の利益にとって有効な手段的価値をもつだけでなく、共同で事業をすることでいっそう利益につながるという判断が付加されることによって共同志向的な相互化の資源に転化することもあるだろう。その場合は、向いあう行為者間の矢印が媒体的な資源を間において単に向かいあっているものが矢印の先端の方向指示部分を没して等号に近づくわけである。

利得の相互性という第1標識は、相互行為がこれから生じていく過程であれ、既に確定している過程であれ、《**自分が利益を得ることは、同時に相手の利益ともなる**》という相互利得に関する最小限のバランス観念にもとづいている。この基準に照らすと、潜在的であれ顕在的であれ、相互利得の評価(または意味づけ)が欠けている場合には、その行為は交換カテゴリーに属しないと見ることになり、利己的に自己の利益の獲得だけを考慮していたり、相手に損害を与えようという評価がなされている(したがって資源のプラス移転もない)ような場合は当然に交換のカテゴリーから外れる。客観的にも主観的にも互酬性が実現されていないからである。ただし、利得の相互性が評価、算定、予想されているという事実は、具体的な場面においては意識、態度、行為のレベルで把握(=測定)されうるから、客観的と主観的とのギャップが当然に予想され、この標識を確認する作業は必ずしも一義的ではない。そこで問題となるのは、客観的に相互的な利得があっても一方の行為者だけが利得の相互性を算定しているような場合であるが、これもまた原則として相互性を条件とするものではない限り、やはり交換とは見にくい。

経済の場合であれば、市場における行為者間の相互的なバランスは等価交換を原則としており、その相互性を共通なコードにより通貨を用いて確認することができるが、非経済的な交換では、たとえば政治的な交換でも知識の交換でも、明確な交換レートがもともと用意されていないし交換の市場も特定されていないことが多いから、相互性を確認することが経験的に困難であると言える。日常的に語られる<貸しと借り>の感覚である。結局、この利得の相互的な関係は、相互行為の形成という観点からすると、相互性を客観的に把握できる程度の射程で行為のやりとりを把握するべきであろう。

資源の授受という第2標識は、物財だけでなく、人とサービス、情報、関係財といった各種の資源を他者の側に双方向的に移転するという客観化しやすい標識であっ

て、私たちが日常的な行為のうちに経験している事実である。複数の行為者の間で資源が双方向的に移転する事実を、単なる一方的な提供に終わるものではなくて、まさに「授受」として成り立つと見るところに交換の特質がある。相互利得の算定に加えて、この授受という要件が充足されることによって、交換の事実がいっそう可視的(visible)になる。実際に交換の社会的な事実が複雑な様相を示すのは資源という名のメディアの多様性に一因がある。交換の資源として、いわゆる<政略結婚>に見られるように、人的かつサービスの資源(この場合は女性)と権力的な資源との交換が行なわれることは十分に理解できる。フランスの人類学者、レヴィーストロウスが先住民社会の部族間で発見した婚姻関係の交換的な輪の事例もよく似た例であった。日常の経験のうちに、私たちは一方の物財やサービスにたいして他方の感謝という形の返礼が行なわれるのを見ることができるし、そこに資源の相互的な授受(移転)を認めることもできるが、問題は、たとえば、行為者の意識で愛他的な献身や慈悲として自覚されているような場合でも交換と呼びうるかどうかである。

答えは微妙である。ブラウはこれを交換と見なさない。それは、私のいう第1標識が欠けているからである。このような場合、自己の利得の観念や報酬や費用といった考えすらない純粹に一方的なサービスであれば、たとえ感謝の気持ちが具体的に形に表わされて相手に届いたとしても、それは資源的な意味を——論理上の想定にすぎないが——もたないであろうから、「利得」の観念という第1標識はもとより、第2標識の授受の「受」にも相当しないので、それは相互行為ではあっても交換ではない。そこから、この第2標識の経験的な基盤にも、意識レベルの問題が忍びこんでいることが分かる。資源の意味(価値)づけの難しさである。この難点を何らか特定の標識を加えることで緩和しようとするのが、

《当事者に**手段としての評価の意識**があるかどうか》という第3標識である。交換は、相互利得の観念(自覚)をとともなう何らかの資源の授受という互酬的な関係であって、その相互行為も、売買にせよ貸借にせよ、資源の相互移転的な位相において何らかの外面的で顕在的な、その意味で客観的な様式をとともなう。その場合、たしかに、たとえば、愛や好意のような相互化のメディアも移転資源とみなすことはできるが、それらの資源(=メディア)は、具現的(consummatory)な価値を多分に含んだ関係的資源でありうるため、あくまでも自己利得や自己利益を守りながら他者との間に一線を描く相互志向的な関係にとってはマージナル(=境界線的)な事象であると考えられる。相互関係の典型例である愛のメディアでは相互の交換的な行為に何かが加わると見たほうが資源としての価値を理解しやすいから、そのような具現的な性質とく愛が交換の材料でありうる>という事実とを調停するためには、愛のすべての側面を交換というカテゴリーで包括するよりも、愛の手段的(instrumental)な側面のみに焦点を合わせて愛の交換を語るのが適切であろう。関係的な資源、また、それに準じて人的およびサービスの資源は、その性質上、通常の動産がそうであるような移転的なメディアであるよりは、結合的なメディアとして機能しているのであって、交換過程における資源の働き(=機能)をみること

は大切である。

いうまでもなく、資源の個別な意味は、行為状況により、行為者によって主観的に異なってくるから、**互酬的な関係の成り立ちを予期しつつ利得の相互性という条件に**そって授受される資源が利得の「手段」として評価されている場合に限定する のが「交換」事象の経験的な把握のために適切である。

ここで、資源の形態が何であるか、またその移転する資源のバランスが客観的に等価であるかどうかは問わない。だから、一方の移転する資源が客観的な物財で、他方の資源が主観的な感情でも、その返報としての感情（実際には表情や言葉に示される意識）が他者にとって資源的な価値がある限り、資源の相互授受があると見ることができる。逆に、物財はおろか精神的な報酬も含めて何も返ってこないという場合はもちろん交換の枠から外れている。だが、このケースは、資源の授受に関する時間的なパースペクティブ、つまり、資源の移転が即時的な短期の交換か長期間にわたる移転なのかという問題を示唆する。

この **第1標識** は、相互行為がこれから生じていく過程であれ、既に確定している過程であれ、＜自分が利益を得ることは、同時に相手の利益ともなる＞という相互利得に関する最小限のバランス観念にもとづいている。この基準に照らすと、潜在的であれ顕在的であれ、**相互利得**の評価が欠けている場合には、その行為は交換カテゴリーに属しないと見ることになり、利己的に自己の利益の獲得だけを考慮していたり、相手に損害を与えようという評価がなされている（したがって資源のプラス移転もない）ような場合は当然に交換のカテゴリーから外れる。客観的にも主観的にも互酬性が実現されていないからである。ただし、利得の相互性が評価、算定、予想されているという事実は、具体的な場面においては意識、態度、行為のレベルで把握（測定）されうるから、客観的と主観的とのギャップが当然に予想され、この標識を確認する作業は必ずしも一義的ではない。そこで問題となるのは、客観的に相互的な利得があっても一方の行為者だけが利得の相互性を算定しているような場合であるが、これもまた原則として相互性を条件とするものではない限り、やはり交換とは見にくい。

経済的な交換の場合であれば、市場における行為者間の相互的なバランスは **等価交換を原則** としており、その相互性を共通なコードにより通貨を用いて確認することができるが、**非経済的な交換**では、たとえば政治的な交換でも知識の交換でも、明確な交換レートがもともと用意されていないし交換の市場も特定されていないことが多いから、相互性を確認することが経験的に困難である。結局、この利得の相互的な関係は、相互化のメカニズムという観点からすると、相互性を客観的に把握できる程度の射程で行為のやりとりを把握するべきであろう。ところが、行為の相互化に向かう過程を問う場合には、肝心の客観的な事実そのものがまだ確立されていないのであるから、動機的な位相で利得の相互性が評価、算定、予想されているかどうかを確認する傾向があり、行為者の意識レベルが重視されがちである。交換におけるこの問題は、だから、交換

という相互行為のより客観的な標識を求め資源の移転することに結びつく。

これに対して、**資源の授受**という第2標識は、物財だけでなく、人とサービス、情報、関係財といった各種の資源を他者の側に双方向的に移転するという客観化しやすい標識であって、私たちの日常的な行為のうちに経験している事実である。複数の行為者の間で資源が双方向的に移転する事実を、単なる一方的な提供に終わるものではなくて、まさに「授受」として成り立つと見るところに交換の特質がある。相互利得の算定に加えて、この授受の要件が充足されることにより、交換の事実がいっそう可視的(visible)になる。実際、私たちにとって、交換の経験的な基盤は広いから、石川 実が危惧しているように、この概念があまりにも広く用いられると、たとえば、行きずりの口論から二人の男が殴り合いをはじめるとか、「神」として内面化している存在と個人が自分のなかで交感しあうような出来事をも交換という用語で把えるということになりかねない。(『おみ』1979,134頁)。その点で、日常用語としての交換はともかく、社会学的な概念としての交換は **限定的に把える** のが有効であろう。

発想の原点は異なるが、社会学に交換の発想を具体的に導入した G. C. ホーマンズの場合は、B. F. スキナーの提唱した「オペラント心理学」の「**強化**」(reinforcement)という発想に依りながら、経済学的な交換論を拡張して『社会行動』(1961)を著わした。そこには、人間が報酬(rewards)を求め、それを獲得するために要する直接の対価や将来への投資、まとめて言えば費用(cost)を考慮し、その差益としての所産(outcomes)を極大化することを予想しながら相互行為に入る。《**その経験が当人にとって有益であれば、その後の行動を強化する働きが生じる**》という仮定がある。たとえば、彼が交換過程の基礎的な命題として挙げている、「**成功命題**」(報酬が多いほどその行為をする)、「**刺激命題**」(過去に経験した刺激と報酬の関係にもとづき、現在の刺激を判断して行為する)、「**価値命題**」(行為の結果に価値があれば、それだけその行為をする)、「**剥奪－飽和命題**」(最近の報酬が多ければ多いほど、その後は彼にとって報酬の価値が漸減していく)、といった命題群は、ある行為が、積極的には報酬の増大という基準に、消極的には懲罰の減少という基準に即して反復されたり回避されたりする事情を強化の原則とその変形原則にそって説明している(『おみ』135~42頁)。

これらの命題は、相互行為(彼の場合は、交換)をとおして差益の見込みが生じてくる事情について語ってはいるものの、必ずしも相互化の仕組みを解き明かしているわけではない。これらを<交換理論>の固有の命題と呼ぶなければならない理由が特別にあるわけではないと思われる。これに対して、ホーマンズが「**攻撃－是認命題**」(行為に対して予期した報酬が得られなかったり逆に罰をうけたりしたら、彼は攻撃的になる。また予期した以上の報酬や少ない罰をうけると彼は是認的な行為をするようになる)と呼んでいるのは、その根底に「**分配公正の原則**」を含んでいて、相互行為における報酬とコストのバランスと、他者との比較における相対的な均等性を最小限の基準とする、

相互利益への基本的な要求が訴えられている。この命題は、＜交換理論＞と呼ばれる、一連の論議のなかで中心的な原理であって、この点は、久慈利武がまとめている命題群を見ても明らかである(久慈、1988)。

9. 相互化の過程における「互酬性」の規範

メディアが相互化の積極的な制御機能を発揮するには、人びとが自己の利得を具現するために他者に何らかの意味で働きかけることが必要である。これは、行為状況の相互依存的な特質によっている。《人は、自己が生きるために他者を必要とし、他者の助力を得るために自己の資源を提供する》。もちろん、ここで言う助力や資源は広い意味である。この相互依存は私たちの考察にとって「公理」的な命題であって、経験的な証明をするつもりはない。この資源の提供は＜メディアの制御による他者(=相互行為の客体)の制御＞と言いなおすことができる。ゴフマンはこの過程で規範としての相互行為の儀礼が重要であることを明らかにしたが、それは、さながらアメリカン・フットボールの陣取りゲームのように、回避と呈示の儀礼をくり返しながら自我が他者のなかにいかにして入り込むかという戦略の問題であった。他者のなかに入っていかなければ制御は具体的にも、またしばしば効果的にもならない。交換は、手段的な意味を基準とした制御の過程であるから、その点で、戦略的なゲームにもなじみやすい仕組みをもっている。

けれども、他者または他者の資源を獲得することと引換えに自我が何らかの資源をコストとして提供するには、**最小限の交換コード**が必要である。よく引例される先住民社会のサイレント・バーターの場合でも、両者の合意がなければ海の幸と山の幸を勝手に取るわけにはいかない。そこには、多くの文化人類学者が発見してきたような、いわゆる「**互酬性の規範**」(norms of reciprocity)がある。実はその規範のうちには、交換利得の互酬性を判断させうる交換レートに相応する基準があるし、具体的な資源の授受方式についての様式もあり、またその交換それ自体と具体的な資源の効用(=手段性)についての評価基準もある。それは社会的に成立した規範の仕組みであって、その根底には、人間の《相互依存》観念があり、そのまた背後には人間相互の信頼感がある。

前述したように、非経済的な交換には、経済的な交換のような明白な制度が欠けており、交換市場も交換レートも交換ルールも厳密に存在していないことは確かであるが、上に整理した交換の構造が単なる個人的で勝手な行動ではない以上、そこに何らかの程度で様式化された規範が関わりあっていないと考えなければならない。しかも、その交換という事実、あくまでも最終の目的や目標ではなくて、社会生活における手段であり、相互依存としての共同生活のなかに自己を位置づける一つの過程にすぎない。人類学者のH. ベフは、ゲールドナアの揚げた「互酬性の規範」が、たとえば＜助けてくれた人には助けを返さな

ければならない>といった類の一般的な水準の規範であって、そこからいきなり交換の事実に至らないことを指摘した。つまり<どのような行為を親切とみるか>、<どの程度の助力にはどれくらい返すか>といった水準の基準が交換の具体的な場面では（私のいう利得の相互性と授受にとって）必要であり、このルールのことを、彼は「文化的に特定された交換規則」(cultural-specific rules of exchange)と呼んでいる。彼の指摘によれば、人びとは、この規則のもとでそれぞれの具体的な状況に適合した交換の戦略を決めているし、こうした規範、規則、戦略の背後にある社会的な様式として「文化的な準拠枠」が存在しているのである(H. Befe, 1980)。この指摘は、相互行為の一般的な仕組みにおいても当てはまるところから、「相互化の規範」(norms of interactionalization)と総称されてもよいであろう。

10. 相互化における互酬性の破綻と関係の転換

相互化の過程においては、選ばれる側にも選ぶ側にもそれぞれの利害と関心の異質性がある。あって個々人の働きも違えば特定の事態が個々人にとってもつ意味も異なるような条件のもとでは、他者の手段化や他者の選択という発想は生き生きとした原則となってくる。この場合、個々人の利益と関心を充足できるような資源のゆとりがあれば、人びと相互の「**ゼロ＝サムの**」な状況が生じないように見えるが、その代わり、各人の利害や関心の違いがあることから、相互行為の予想が立たないダブル・コンティンジェンシイの危機が顕在化してくることになる。自由競争的な市場の状態に潜在している問題状況がこれである。要するに、それぞれの相互行為の契機も、したがってまた相互関係の形態も社会の構成や生活の状態によって作用の意味や作用の仕方が違ってくるのである。

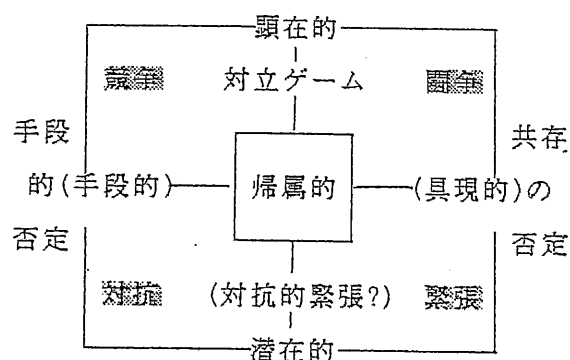
人びとの社会関係では、相互的な志向で結びついている場合も、共同的な志向で結びついている場合も、さらには共通なインタレストで並行的に努力している場合でも、基本的には関係しあう当事者の間に均衡がとれることを求めている。あるいは、求めないまでも、バランスのとれた状態が問題なくスムーズに關係を持続しやすいことが求められる。けれども、人びとの間に、貨幣資源でも、情報資源でも、肉体的な資源でも、さらには威信的な資源でも、それぞれの行為者が所有する資源、とくに提供しうる資源の落差が生じてくると、その行為者自身が自覚すると否とを問わず、対等な關係が崩れてくる。**地位の落差の発生**である。そこでは**互酬的な關係が何らかの程度に破綻している**ので、これが「**互酬性の破綻**」(breakdown of reciprocity)である。ここでは、優位に立つ行為者から劣位にある者への**影響力**(influence, または勢力, power)が成り立つことになる。その結果として、**人びとの關係は、権力、権限、威信、權威などとして変形された資源形態に媒介されて、日常の社会過程に支配關係が現れる**。そこでは、行為者の關係は、ヨコ並びの対等な關係ではなくて、**支配-服従のタテの關係**に移行しているの

である。M. ヴェーバーの有名な定義によると、「権力とは社会関係のなかで相手の抵抗に逆らっても自己の意志を貫徹する、それぞれのチャンス」である。これを私なりにアレンジすると、**権力** (power, Macht) は、有効な価値を操作することによって、他者を服従させる勢力が特徴である。**権限** (competence) は、組織上の達成課題に即して特定の地位の担い手に与えられる勢力である。**威信** (prestige, または威光) は社会一般の評価基準に照らして他者から尊敬や信頼を与えられうる勢力である。これに対して、**權威** (authority) は、特定の個別領域で他者から優越した特性を承認されていることから生じる勢力である。人びとの影響力には、具体的にみるとこれ以外の形態もありうる。たとえば、魅力的な女性が男性たちを意のままに支配することがあるかもしれないが、この場合は、—— 俗に＜パワー＞と呼ぶかもしれないが—— 社会学的な意味で勢力とは言わない。やはり＜魅力＞なのであろう。

ヴェーバーは、**支配** (ruling, Herrschaft) の基本形態を、支配される人びとがその支配の成り立ちについてどのようにそれが正統なものであるかという判断の根拠、すなわち「**正当性の信念**」 (Legitimitätsglauben) を基準として、伝統的支配、カリスマ的支配、依法的支配の3形態を示した。「**伝統的な支配**」は伝統社会の伝統性と同様に、長らくそのように行ってきたという根拠で、「**カリスマ的な支配**」は、その支配者のもつ、神から授かった天賦の資質が人びとを圧倒することによって支配が当然であると心服させるという根拠で、「**依法的または合法的な支配**」は合理的な法にもとづいて支配が行われることへの信頼感を根拠として支配関係が成り立つと、ヴェーバーは見ていた。近代の官僚制はこの依法的な支配の具体的な支配機構である。

相互化の規範は、関係が双方でバランスがとれる結合関係の場合だけでなく、自己の行為の目的または結果として、直接または間接的に、他者との不平等な地位関係に転化して支配関係が成り立った場合にも、またさらに、他者との共通または共有的な相互化の契機が何ほどか否定される、対立関係のなかにも存在する。そこに成り立った事実上の関係のバランスを保とうとする規範である。「**対立関係**」には、闘争、競争、緊張、対抗の4系列の事象が含まれる。「**闘争**」 (conflict) とは、動員できる手段のすべてを用いて、自己の存在や目標にとって阻害的な他者を否定し排除することを第一義とする顕在的な対立関係を意味する。これに対して「**競争**」 (competition) とは、特定の目標それ自体を効果的に達成する過程で、並行的に努力する他者の存在を意識しつつ、その目標達成の手段あるいは条件として他者を結果的に否定する顕在的な対立関係である。戦争、革命、労使闘争などは前者であり、販売競争や入試競争は後者の例

図. 対立的関係の基本図式



である。一見すると、対立関係は「反社会的」な現象のようにみえるが、それを抜きにしては社会の現実味は希薄となる。現実の社会過程を問題とする時には、対立の契機は無視できない。ジンメルはこの問題に敏感であった。彼の『社会学』では、闘争が社会や集団の統合や発展にとって有益な刺激材となることが詳しく述べられている。これを、アメリカの社会学者、L. コーザーは、16の命題に組み替えて学位論文を書いたほどである。

結びとして――社会関係の根底にある《結合観》の問題

私たちの置かれた日常の環境では、コミュニケーションの形態もますます手段的な性質を強め、技術の高度化も進んでいる。人びとの社会関係も、手段的な機能への評価を重視してかわりあう相手を選択する、ゲゼルシャフト型の関係観に支配されているようにも見える。そのような関係観は、個々の事実としては、時代や社会の違いにかかわらず、普遍的に現れてきた現象とも考えられる。問題は、それが本当に社会のあらゆるレベルで、あらゆる領域で、支配的で一般的な傾向となっているのかどうかということである。人びとが利害関係を共有するように運命的に課されていて、同じ集団やコミュニティに属する他者の損失が自己にとっても損失になるような状況で等質的な生活を営んでいる場合には、他者にとっても自己にとっても互いの利害が運命的に共同なのであるから、<個々人にとっての機能>という発想それ自体が大きな意味をもちえないし、等質的なメンバーのなかから<選択する>ということにも意味はない。誰をする選んでも同じだからである。このような利害の等質性・共同性・運命性・の問題は、それが個々人の間に利害の連鎖反応が生じるような相互連関の基盤があるところに見られるのであって、人びとの帰属状況が前に述べたように閉じた空間に拘束された、資源の乏しい、あるいは厳しい状況がともなっていない限り、そこには「ゼロ＝サム」的な状況が現れるとは言えない。その状況は、性質上、ゲマインシャフトである。

具体的な行為状況において、人びとが志向する相互関係のパターンはさまざまであるけれども、社会の伝統的な特質がそうした人間関係の支配的な傾向を形成していく時、重要な鍵をにぎるのは、人間という存在についての、したがってまた思考や行動の認識や判断の枠組に<等質性>の前提があるか<異質性>の前提があるかという問題である。それは、かつてデュルケムが機械的な連帯から有機的連帯への社会類型の特徴づけに用いた[等質的－異質的]の対比を超えた問題をも含んでいるように思われる。それはそれぞれの社会における関係性の伝統に関わっている。

たとえば、日本の社会は、きわめて典型的なほど外部から孤立した地理的および民族的な基盤をもち、それゆえ、人びとの社会的な交流においても、言語や宗教などを筆頭とする文化的な独自性と単一性においても、また意識のうえでの同類性においても歴史的に特異な条件を維持してきた。もちろん、私たちの社会には、早い時期から身分や階級の序列もあり、少数民族や少数者集団の人びとに対する差別があることも確かである。そもそも、個人の性格などの具体的な特徴に応じて人間の存り方と生き方が違っていることは当然のことであるが、それにもかかわらず、村落の地域社会を主な生活の拠点として共同生活を

してきた人びとの間では、人間という存在が根本的に異質なものであるという考えや感じはほとんど問題にされなかったと言ってよい。正確には、人間の個人がもっている異質性が原理・原則上の違いとして認識され、それが思考や行動の一般的な前提とされることはなかった、と言うべきであろう。これは、いわば<等質性の前提>であり、この前提を、社会の仕組みが変化して後もなお、私たち日本人は、《等質性の伝統的な前提》を継承し、<人間はみな同じである>という暗黙の了解が今日のなお、人びとのコミュニケーションや行為の前提となっていると考えられる。

等質性の前提は、単に和合的な関係の問題ではなく、日本人の人間関係一般にとって関連が深い事柄である。日本のように等質性を伝統的な前提とする社会では、人間の相互関係は、何らかの異質な個人と個人の間の関係である前に、人びとの相互的なつながりを位置または地位の関連として作りだしている社会のネットワークのなかで位置と位置の続きぐあいとして問われるのである。これを「縁」と言っておこう。この場合に、それぞれの位置についた個人の人格（パーソナリティ）はさしあたって問題にならない。喩えていえば、社会や集団の側に予め用意した椅子が幾つかあって、その椅子の関係は問題になるが、それぞれの椅子に誰が座るかということは問題にはならないというようなものである。この特徴は、よく語られる、日本人の他者類型化の傾向と対応している。

インド哲学者の増原良彦によると、これは、空間的、時間的、論理的な相互依存の原則であって、言葉の仏教的な意味での「縁起」（よりて起こる）を教える大原理である。彼は、人びとの関係が、個々の主体をはっきりさせながら太い絆で結ばれる連帯ではなく、結節点にあたる主体の部分は曖昧なままに白くして結ぶ糸に当る絆の部分だけが太いという共同体が日本人の生活の場であり、そこに成り立つ関係も没主体的な連帯であるから、「縁が太く、縁を大切にする」といっても、個々の人格や人間性や個性を認めたりするわけではないと言う。こうした理解から、増原は、日本人の「主体性のない構成員がつくる関係」を「縁」と呼んでいる（増原、1983、130頁）。事実、「ご縁があって」とか「おかげさまで」と言っても、特定の個人に対する謝辞ではないことを私たち日本人はよく承知している。

これに対して、人間がそれぞれ人種、民族、宗教、言語、身分などの異質な属性の担い手であり固有名詞をもった存在であるという認識と前提のもとで思考し行動する原則を確立した社会では、個人と個人との間でそれぞれの属性に応じ個々の状況特性に応じて相互に取り結ぶ関係を出発点におく。この関係は、各人がそれぞれの立場から作りだすものであって、この関係原理は一般に「契約」にもとづく処理と呼ばれる。この処理方式は、もちろん、各人の間で取り結んでいく和合観と並行するものであって、上にも見てきたとおり、人びとが比較的狭い世界で等質的な属性をもちながら生活しているような場合には特別な意義をもたない。だが、ヨーロッパの歴史的な状況では、多人種・多民族・多言語・多宗教の人びとが軍事、政治、経済、文化などの現実的な必要から相互に移動しながら他の属性の担い手と関わりあう必要が高まり、否応なしに共存することを要求されたのであった。そのなかで、こうした契約による人間関係の処理方式が一般的な原理として発達してきた。結婚も一つの契約として権利と義務を規定しているし、きれいごとを言わなければ、中世の女性は、しばしば取引きの素材とされた。あるいは、テンニエスが、中世

都市の共同体で成員の誓約によって成り立っていたという理由から、それを精神のゲマインシャフトと位置づけたので分かるように、とりわけ都市の生活場面で、この種の関係原理が洗練されていったのである。加えて、ヨーロッパでは、その支配的な宗教であるキリスト教が、＜神と人間との契約＞を基本とすることによって、「契約」関係についての一つのモデルを提供していたことも重要である。ユダヤ教、イスラム教と共通な原典である『旧約聖書』の創世紀には次のように書かれている。

「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。

わたしはあなたと契約を結び、大いにあなたの子孫を増やすであろう。」

そして、この契約原理は、中世都市で次第に歴史的に定着し、市民としての誓約や商業の取引や政治的な支配-服従関係など、人びとの日常的な相互関係にも具体化されてきたのである。よく引きあいに出される、封建臣従の契約においては、君主が複数の家臣とそれぞれの場合について具体的な契約を交わすのは当然として、家臣の側でも、彼にとって契約内容を矛盾なく履行できる限り、複数の君主と契約することができた。

日本の場合、その信仰システムは、前述したように、民間信仰をも含めて多神教的な重層性をもっているが、実際に民族的な規模で影響を与えた大乘仏教と儒教の教えには契約という原理は出てこない。むしろ、仏教の根本は、「縁(えにし)」であり、次のように説かれている。

「これ在ればかれ在り、これ生じるがゆえに生ず、

これ無ければかれ無し、これ滅するがゆえにかれ滅す。」

このように、縁と契約の観念は、人びとの結合観の根底にある考え方・感じ方であることが分かる。縁は帰属的な性質の優越した、所与としての、(誤解されやすい言い方であるが)自然のままの状態、自明の状態であった。他方、契約は、人間の作為であり、意志であり、決して自明なものではなかった。

隣人の感覚と こうした縁と契約の考え方の違いは、たとえば人びとのきわめて日

3 部門調整モデルと情報構造

藤山英樹

(獨協大学経済学部)

fujiyama@dokkyo.ac.jp

1 はじめに

複数の部門の調整問題については、これまでチーム生産のモデルによって分析されてきた (Cremer (1990), Radner and Marschak (1972), 青木・奥野 (1996, 2 章), Aoki and Takizawa (2002)). しかしながら、そこでは戦略的な関係は考慮されていない。戦略的な関係も含めたものとしては藤山 (2005, 5 章) があるが、情報の不完備性については完全にモデル化されてない¹⁾。そうした中で、Calvó-Armengol and Beltran (2009) によって、戦略的状況と情報の不完備性をふまえたベイジアン・ナッシュ均衡による分析が提示された²⁾。

現実にも調整問題の重要性は指摘されている。沼上他 (2007) では組織内の社内合意形成の日本的な特徴と問題点を指摘しており、これは調整問題が現代日本においても重要な課題となっていることがわかる。

しかしながら、実際の複数部門の調整という観点からは、以下のような問題点が挙げられる。すなわち、第一に、異なる部門が同じ情報を観測するモデルとなっている。第二に、観測値についての分散・共分散構造が仮定として直接与えられるが、そこに対するミクロ的な基礎づけがない。

したがって、本稿では次の修正をおこなう。第一に、異なる部門が異なる情報を観測するモデルとする。第二に、ミクロ的な基礎づけとして、情報の分散・共分散構造と、ノイズの分散・共分散構造を別々に取り扱えるようにする。

こうした修正のなかで、Calvó-Armengol and Beltran (2009) の議論がどこまで援用できるかを確認しつつ、情報構造と期待利得との関係を分析することが本稿の課題となる³⁾。

2 モデル

部門の集合は $N = \{1, 2, \dots, n\}$ であり、各部門 i に対する行動の集合を A_i とする。

外生的に与えられる情報は $\theta = (\theta_1, \theta_2, \dots, \theta_n)' \sim N(\theta_0, \Sigma_\theta)$ であり、ここで平均ベクトルは縦ベクトル $\theta_0 = (\theta_{01}, \theta_{02}, \dots, \theta_{0n})'$ となり、分散・共分散行列は n 行 n 列の $\Sigma_\theta = [\sigma_{\theta ij}]$ となる。ただし、以上の情報はノイズを含んで観測され、ノイズについては $\varepsilon = (\varepsilon_1, \varepsilon_2, \dots, \varepsilon_n)' \sim N(\mathbf{0}, \Sigma_\varepsilon)$ であり、ここで平均ベクトルは要素数が n の縦ベクトル $\mathbf{0} = (0, \dots, 0)'$ であり、分散・共分散行列は n 行 n 列の $\Sigma_\varepsilon = [\sigma_{\varepsilon ij}]$ となる。なお情報 (θ) とノイズ (ε) は互いに独立であるとする。各部門 i の観測値は $y_i = \theta_i + \varepsilon_i$ となる。

部門数が 3 における各部門の情報の観測状況が図 1 で示されている。比較として、Calvó-Armengol and Beltran (2009) の状況が図 2 で示されている。

¹⁾ 得られた情報からの他部門の情報の推測は定式化されているが、他部門の行動への推測は十分に考慮されていない。

²⁾ なお、チーム生産のモデルとベイジアンナッシュ均衡との関係は、ポテンシャルゲームの概念を用いて、Ui (2009) によって理論的に示されている。

³⁾ ただし、こうした修正をすることにより、均衡におけるパラメータが非常に複雑になり、比較静学をおこなう場合は本稿では部門数を 3 に限定している。

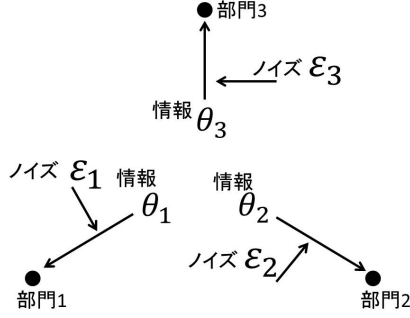


図1 本稿での情報構造

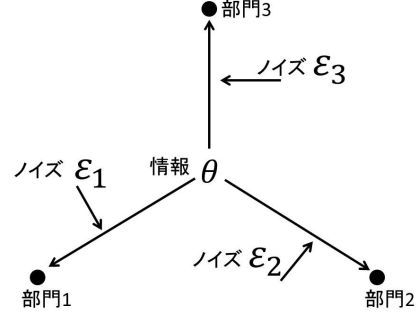


図2 Calvo-Armengol and Beltran (2009) の情報構造

なお、部門 i の利得関数は $\mathbf{a} = (a_1, a_2, \dots, a_n)'$ とし、

$$u_i(\mathbf{a}, \boldsymbol{\theta}) = -(1-r) \left(a_i - \sum_{s=1}^n \theta_s \right)^2 - r \frac{1}{n-1} \sum_{j \neq i} (a_i - a_j)^2 \quad (1)$$

で与えられる⁴⁾。第1項が情報への調整行動、第2項が他部門の行動との調整行動となる⁵⁾。また、どちらをより重視するかのパラメータが r , $0 < r < 1$ である。

3 ベイジアン・ナッシュ均衡

ベイジアン・ナッシュ均衡は Calvo-Armengol and Beltran (2009) と同じ方針で求めることができる。

利潤最大化の1階条件であるが、これは y_i の実現値を所与のもとでの条件つき期待利潤を最大にするように a_i を決定する。すなわち、

$$\frac{dE[U_i(\mathbf{a}, \boldsymbol{\theta})|y_i]}{da_i} = 0 \quad (2)$$

となり、これを解くと、

$$a_i = (1-r) \left(\sum_{s=1}^n E[\theta_s|y_i] \right) + r \frac{1}{n-1} \sum_{j \neq i} E[a_j|y_i] \quad (3)$$

を得る⁶⁾。つまり、最適な行動は、情報の総和の期待値への調整 ($\sum_{s=1}^n E[\theta_s|y_i]$) と他の部門の行動の平均の期待値への調整 ($\frac{1}{n-1} \sum_{j \neq i} E[a_j|y_i]$) から得られ、その調整比率は r となっている。

情報の不完備性を前提とすると、情報に対する予測 ($E[\theta_s|y_i] (s=1, \dots, n)$) だけにとどまらず、他部門の行動の予測 ($E[a_j|y_i]$) についても関数形も含めて考慮しなければならない⁷⁾。

ここでは y_i に対しての線形の最適反応関数

$$BR_i(\mathbf{a}_{-i}|y_i) = \alpha_i + \beta_i y_i \quad (4)$$

⁴⁾ Calvo-Armengol and Beltran (2009) では、情報が θ のみなので、第1項の $\sum_{s=1}^n \theta_s$ が θ となる。

⁵⁾ この定式化において $\sum_{j \neq i} (a_i - a_j)^2$ より、他のプレイヤーの行動水準が増加すると、自分の行動水準も増加させる方が望ましいことがわかる。すなわち、このモデルでは仮定から戦略的補完性が満たされる。

⁶⁾ 2階条件も $\frac{d^2 E[U_i(\mathbf{a}, \boldsymbol{\theta})|y_i]}{da_i^2} = -2 < 0$ より満たされるので、極大値であることがわかる。

⁷⁾ 藤山 (2005) では、情報の予測は仮定されていたが、他の部門の行動 \mathbf{a}_{-i}^* については均衡では既知としており、この意味で不完備情報の分析として不十分である。

をもとめる⁸⁾。

方針は期待値の残っている 1 階条件 (式 (3)) について、未知係数を含む線形最適反応関数 (式 (4)) を用いて整理し、係数比較をおこなうことである。具体的には、式 (3) の第 2 項について式 (4) を用いての表記とする。すなわち、

$$a_i = (1-r) \left(\sum_{s=1}^n E[\theta_s | y_i] \right) + r \frac{1}{n-1} \sum_{j \neq i} E[\alpha_j + \beta_j y_j | y_i] \quad (5)$$

$$= (1-r) \left(E[\theta_i | y_i] + \sum_{j \neq i} E[\theta_j | y_i] \right) + r \frac{1}{n-1} \sum_{j \neq i} (\alpha_j + \beta_j E[y_j | y_i]) \quad (6)$$

を得る。

ここで条件付き期待値は

$$E[\theta_i | y_i] = E[\theta_i | \theta_i + \varepsilon_i] = E(\theta_i) + \frac{\text{Cov}(\theta_i, \theta_i + \varepsilon_i)}{V(\theta_i + \varepsilon_i)} (\theta_i + \varepsilon_i - E(\theta_i + \varepsilon_i)) \quad (7)$$

となる⁹⁾。情報とノイズの独立性を用いると、

$$\text{Cov}(\theta_i, \theta_i + \varepsilon_i) = \sigma_{\theta ii} \quad (8)$$

$$V(\theta_i + \varepsilon_i) = \sigma_{\theta ii} + \sigma_{\varepsilon ii} \quad (9)$$

となり、左辺の $\theta_i + \varepsilon_i$ は実現値 y_i なので、期待値に対する仮定も含めて、

$$E[\theta_i | y_i] = \theta_{0i} + f_{ii}(y_i - \theta_{0i}) \quad (10)$$

ここで

$$f_{ii} \equiv \frac{\sigma_{\theta ii}}{\sigma_{\theta ii} + \sigma_{\varepsilon ii}} \quad (11)$$

を得る。

同様の方針で、 $j (\neq i)$ に対して、

$$E(\theta_j | y_i) = \theta_{0j} + f_{ji}(y_i - \theta_{0i}), \quad (12)$$

$$E(y_j | y_i) = \theta_{0j} + \omega_{ji}(y_i - \theta_{0i}) \quad (13)$$

ここで

$$f_{ji} \equiv \frac{\sigma_{\theta ji}}{\sigma_{\theta ii} + \sigma_{\varepsilon ii}}, \quad (14)$$

$$\omega_{ji} \equiv \frac{\sigma_{\theta ji} + \sigma_{\varepsilon ji}}{\sigma_{\theta ii} + \sigma_{\varepsilon ii}} \quad (15)$$

を得る。

以上より、

$$a_i = (1-r) \left((\theta_{0i} + f_{ii}(y_i - \theta_{0i})) + \sum_{j \neq i} (\theta_{0j} + f_{ji}(y_i - \theta_{0i})) \right) + r \frac{1}{n-1} \sum_{j \neq i} (\alpha_j + \beta_j (\theta_{0j} + \omega_{ji}(y_i - \theta_{0i}))) \quad (16)$$

⁸⁾ 後にこの最適反応関数が唯一であることを確認する。

⁹⁾ 稲垣 (1990, p.70, 93) などの統計学のテキストから確認できるように、正規分布を前提とする場合、条件付き期待値は $E[Y|X] = \mu_2 + \frac{\text{Cov}(Y,X)}{\sigma_1}(X - \mu_1)$ となる。ここで X は $X \sim N(\mu_1, \sigma_1)$ 、 Y は $Y \sim N(\mu_2, \sigma_2)$ なる確率変数であり、この性質を用いている。

を得る.

さらに y_i の項とそれ以外の項をまとめることによって,

$$a_i = \beta_i y_i + \alpha_i \quad (17)$$

ここで

$$\beta_i \equiv (1-r) \sum_{s=1}^n f_{si} + \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq i} \beta_j \omega_{ji} \quad (18)$$

$$\alpha_i \equiv (1-r) \left[\sum_{s=1}^n \theta_{0s} - \sum_{s=1}^n f_{si} \theta_{0i} \right] + \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq i} (\alpha_j + \beta_j \theta_{0j} - \beta_j \omega_{ji} \theta_{0i}) \quad (19)$$

を得る.

はじめに β_i に注目する. 連立方程式の形で示すと,

$$\begin{cases} \beta_1 = (1-r) \sum_{s=1}^n f_{s1} + \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq 1} \beta_j \omega_{j1} \\ \beta_2 = (1-r) \sum_{s=1}^n f_{s2} + \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq 2} \beta_j \omega_{j2} \\ \vdots \\ \beta_n = (1-r) \sum_{s=1}^n f_{sn} + \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq n} \beta_j \omega_{jn} \end{cases} \quad (20)$$

$$\Leftrightarrow \begin{cases} \beta_1 - \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq 1} \beta_j \omega_{j1} = (1-r) \sum_{s=1}^n f_{s1} \\ \beta_2 - \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq 2} \beta_j \omega_{j2} = (1-r) \sum_{s=1}^n f_{s2} \\ \vdots \\ \beta_n - \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq n} \beta_j \omega_{jn} = (1-r) \sum_{s=1}^n f_{sn} \end{cases} \quad (21)$$

$$\Leftrightarrow \left[\mathbf{I} - \frac{r}{n-1} \begin{pmatrix} 0 & \omega_{21} & \dots & \omega_{n1} \\ \omega_{12} & 0 & \dots & \omega_{n2} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \omega_{1n} & \omega_{2n} & \dots & 0 \end{pmatrix} \right] \begin{pmatrix} \beta_1 \\ \beta_2 \\ \vdots \\ \beta_n \end{pmatrix} = (1-r) \begin{pmatrix} \sum_{s=1}^n f_{s1} \\ \sum_{s=1}^n f_{s2} \\ \vdots \\ \sum_{s=1}^n f_{sn} \end{pmatrix} \quad (22)$$

となる.

以上を解いて, β を求めても良い.

しかし, ボナチッチ中心性および Calvó-Armengol and Beltran (2009) との比較が可能なように, 以下のよう整理しておく.

はじめに

$$\frac{\omega_{ji}}{\sum_{s=1}^n f_{si}} = \frac{\omega_{ij}}{\sum_{s=1}^n f_{sj}} \cdot \frac{\sum_{s=1}^n \sigma_{\theta sj}}{\sum_{s=1}^n \sigma_{\theta si}} \quad (23)$$

となることに注意する.

以上に注意すると

$$\text{式 (18)} \iff \frac{\beta_i}{\sum_{s=1}^n f_{si}} = (1-r) + \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq i} \beta_j \frac{\omega_{ji}}{\sum_{s=1}^n f_{si}} \quad (24)$$

$$\iff \frac{\beta_i}{\sum_{s=1}^n f_{si}} = (1-r) + \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq i} \left(\frac{\beta_j}{\sum_{s=1}^n f_{sj}} \cdot \frac{\sum_{s=1}^n \sigma_{\theta sj}}{\sum_{s=1}^n \sigma_{\theta si}} \cdot \omega_{ij} \right) \quad (25)$$

$$\iff \gamma_i = (1-r) + \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq i} (\gamma_j \cdot \hat{\omega}_{ij}) \quad (26)$$

となる。最後の式の整理では、

$$\gamma_i \equiv \frac{\beta_i}{\sum_{s=1}^n f_{si}} \quad (27)$$

$$\hat{\omega}_{ij} \equiv \frac{\sum_{s=1}^n \sigma_{\theta sj}}{\sum_{s=1}^n \sigma_{\theta si}} \cdot \omega_{ij} \quad (28)$$

を用いている。

ここで、連立方程式の形で示すと、

$$\begin{cases} \gamma_1 = (1-r) + \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq 1} \gamma_j \hat{\omega}_{1j} \\ \gamma_2 = (1-r) + \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq 2} \gamma_j \hat{\omega}_{2j} \\ \vdots \\ \gamma_n = (1-r) + \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq n} \gamma_j \hat{\omega}_{nj} \end{cases} \quad (29)$$

$$\iff \begin{cases} \gamma_1 - \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq 1} \gamma_j \hat{\omega}_{1j} = (1-r) \\ \gamma_2 - \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq 2} \gamma_j \hat{\omega}_{2j} = (1-r) \\ \vdots \\ \gamma_n - \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq n} \gamma_j \hat{\omega}_{nj} = (1-r) \end{cases} \quad (30)$$

$$\iff \left[\mathbf{I} - \frac{r}{n-1} \hat{\mathbf{\Omega}} \right] \boldsymbol{\gamma} = (1-r) \mathbf{1}_n \quad (31)$$

となる。以上で

$$\hat{\mathbf{\Omega}} \equiv \begin{pmatrix} 0 & \hat{\omega}_{12} & \dots & \hat{\omega}_{1n} \\ \hat{\omega}_{21} & 0 & \dots & \hat{\omega}_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \hat{\omega}_{n1} & \hat{\omega}_{n2} & \dots & 0 \end{pmatrix}, \quad \boldsymbol{\gamma} \equiv \begin{pmatrix} \gamma_1 \\ \gamma_2 \\ \vdots \\ \gamma_n \end{pmatrix}, \quad \mathbf{1}_n \equiv \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ \vdots \\ 1 \end{pmatrix} \quad (32)$$

を用いている。

以上の式を解くと、

$$\boldsymbol{\gamma} = (1-r) \left[\mathbf{I} - \frac{r}{n-1} \hat{\mathbf{\Omega}} \right]^{-1} \mathbf{1}_n \quad (33)$$

を得る．ここで k_i を $(1-r) \left[\mathbf{I} - \frac{r}{n-1} \hat{\mathbf{\Omega}} \right]^{-1} \mathbf{1}_n$ の第 i 要素とする．すると，

$$\gamma_i = k_i \quad (34)$$

$$\iff \frac{\beta_i}{\sum_{s=1}^n f_{si}} = k_i \quad (35)$$

$$\iff \beta_i = \left(\sum_{s=1}^n f_{si} \right) k_i \quad (36)$$

を得る．

以上で部門 i の最適反応関数における，観測値 y_i に対する係数が求められた．

ここで Calvó-Armengol and Beltran (2009) との比較をしておく．そこでのパラメータについて全て上付き添え字” cm ”をつけると以下ようになる¹⁰⁾．分散・共分散 σ_{ij}^{cm} は本稿では $\sigma_{\varepsilon ij}$ に対応する．また情報 θ は各部門が共通して観測する単変量であることに注意する．

以上のもとので，

$$f_i^{cm} \equiv \frac{\sigma_{\theta}^{cm}}{\sigma_{\theta}^{cm} + \sigma_{ii}^{cm}} \quad (\text{情報について}) \quad (37)$$

$$w_{ji}^{cm} \equiv \frac{\sigma_{\theta}^{cm} + \sigma_{ji}^{cm}}{\sigma_{\theta}^{cm} + \sigma_{ii}^{cm}} \quad (\text{相手の観測値について}) \quad (38)$$

である．これは自分の観測値の分散 $\sigma_{\theta}^{cm} + \sigma_{ii}^{cm}$ と自分の観測値と予想したい確率変数との共分散の比となっている．式 (14, 15) は以上についての，異なる情報を観測するという意味で素直な拡張となっている．

係数については，

$$\mathbf{\Omega}^{cm} = \begin{pmatrix} 0 & \omega_{21}^{cm} & \dots & \omega_{n1}^{cm} \\ \omega_{12}^{cm} & 0 & \dots & \omega_{n2}^{cm} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \omega_{1n}^{cm} & \omega_{2n}^{cm} & \dots & 0 \end{pmatrix} \quad (39)$$

が定義され， k_i^{cm} は

$$(1-r) \left[\mathbf{I} - \frac{r}{n-1} \mathbf{\Omega}^{cm} \right]^{-1} \mathbf{1}_n \quad (40)$$

の第 i 要素となる．

以上において $\hat{\mathbf{\Omega}}$ や $\mathbf{\Omega}^{cm}$ はボナチッチ中心性の概念においては隣接行列に対応する．つまり，各 ij 要素が部門 i と j がどの程度結びついているかを示す指標となっている．

以上より，結びつきが Calvó-Armengol and Beltran (2009) では単に観測値の相関で定義されるのに対して，式 (28) でわかるように本稿の拡張においては，各情報の他の情報への共分散の和の比 $(\frac{\sum_{s=1}^n \sigma_{\theta sj}}{\sum_{s=1}^n \sigma_{\theta si}})$ で補正される．つまり，相対的に自分の情報と他の情報との共分散の和がより大きい場合は， \hat{w}_{ij} はより小さい値となる．

最終的な係数は

$$\beta_i^{cm} = f_i^{cm} k_i^{cm} \quad (41)$$

で与えられる．式 (36) と比較をすると係数において，本稿の β_i においては複数の情報があるのでその全ての情報に対しての f_{si} が全て足しあわされることになる．以上のように，

¹⁰⁾ Calvó-Armengol and Beltran (2009) ではノイズの構造や相関の構造が観測値の分散・共分散行列 (σ_{ij}^{cm}) に集約される形で表現されている．しかし，実際に異なる部門の観測値の共分散として情報の分散を加えた $\phi_{\theta}^{cm} + \sigma_{ij}^{cm}$ を用いていることからわかるように，実質的に σ_{ij} とは情報への外部ショックとして定式化している．したがって，ここで示したような対応関係となる．

- f_{ij}, w_{ij} のレベル (相手情報や観測値の予測レベル)
- $\hat{\Omega}$ のレベル (戦略的關係をふまえた各部門の關係性のレベル)
- k_i の係数のレベル (k_i の補正レベル)

という3つのレベルで複数の情報を観測するという効果が出てくる。

つづいて α_i についての導出をおこなう。定義の式 (19) において、 θ_{0i} の項とそれ以外の項を分けると、

$$\alpha_i \equiv - \left[(1-r) \left(\sum_{s=1}^n f_{si} \right) + \frac{r}{n-1} \left(\sum_{j \neq i} \beta_j \omega_{ji} \right) \right] \theta_{0i} + (1-r) \sum_{s=1}^n \theta_{0s} + \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq i} (\alpha_j + \beta_j \theta_{0j}) \quad (42)$$

を得る。右辺第1項の係数が β_i (式 (18)) に他ならず、

$$\alpha_i = -\beta_i \cdot \theta_{0i} + (1-r) \sum_{s=1}^n \theta_{0s} + \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq i} (\alpha_j + \beta_j \theta_{0j}) \quad (43)$$

となり、左辺に α を右辺に β まとめることにより、

$$\alpha_i - \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq i} \alpha_j = (1-r) \sum_{s=1}^n \theta_{0s} - \left[\beta_i \cdot \theta_{0i} - \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq i} \beta_j \theta_{0j} \right] \quad (44)$$

を得る。

ここで次なる公式

$$\begin{pmatrix} \xi_1 - \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq 1} \xi_j \\ \xi_2 - \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq 2} \xi_j \\ \vdots \\ \xi_n - \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq n} \xi_j \end{pmatrix} = \left[\mathbf{I} - \frac{r}{n-1} \{\mathbf{J}_n - \mathbf{I}\} \right] \boldsymbol{\xi} \quad (45)$$

ここで

$$\mathbf{J}_n = \begin{pmatrix} 1 & 1 & \cdots & 1 \\ 1 & 1 & \cdots & 1 \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 1 & 1 & \cdots & 1 \end{pmatrix}, \quad \boldsymbol{\xi} = \begin{pmatrix} \xi_1 \\ \xi_2 \\ \vdots \\ \xi_n \end{pmatrix} \quad (46)$$

を用いる。

すると、 $i = 1, 2, \dots, n$ に対しての式 (44) の行列表現が

$$\left[\mathbf{I} - \frac{r}{n-1} \{\mathbf{J}_n - \mathbf{I}\} \right] \begin{pmatrix} \alpha_1 \\ \alpha_2 \\ \vdots \\ \alpha_n \end{pmatrix} = \left((1-r) \sum_{s=1}^n \theta_{0s} \right) \mathbf{1}_n - \left[\mathbf{I} - \frac{r}{n-1} \{\mathbf{J}_n - \mathbf{I}\} \right] \begin{pmatrix} \beta_1 \theta_{01} \\ \beta_2 \theta_{02} \\ \vdots \\ \beta_n \theta_{0n} \end{pmatrix} \quad (47)$$

となる。

以上を解くことによって、

$$\begin{pmatrix} \alpha_1 \\ \alpha_2 \\ \vdots \\ \alpha_n \end{pmatrix} = \left((1-r) \sum_{s=1}^n \theta_{0s} \right) \left[\mathbf{I} - \frac{r}{n-1} \{\mathbf{J}_n - \mathbf{I}\} \right]^{-1} \mathbf{1}_n - \begin{pmatrix} \beta_1 \theta_{01} \\ \beta_2 \theta_{02} \\ \vdots \\ \beta_n \theta_{0n} \end{pmatrix} \quad (48)$$

を得る。

以上の式は

$$\left[\mathbf{I} - \frac{r}{n-1} \{ \mathbf{J}_n - \mathbf{I} \} \right]^{-1} \mathbf{1}_n = \frac{1}{1-r} \mathbf{1}_n \quad (49)$$

なる等式を用いて,

$$\begin{pmatrix} \alpha_1 \\ \alpha_2 \\ \vdots \\ \alpha_n \end{pmatrix} = \left(\sum_{s=1}^n \theta_{0s} \right) \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ \vdots \\ 1 \end{pmatrix} - \begin{pmatrix} \beta_1 \theta_{01} \\ \beta_2 \theta_{02} \\ \vdots \\ \beta_n \theta_{0n} \end{pmatrix} \quad (50)$$

と簡潔に表現できる. β_i については, 導出した式 (36) を用いて,

$$\alpha_i = \sum_{s=1}^n \theta_{0s} - \left(\sum_{s=1}^n f_{si} \right) k_i \cdot \theta_{0i} \quad (51)$$

と最終的に表記される.

ここでも Calvó-Armengol and Beltran (2009) との比較をしておく,

$$\alpha^{cm} = \theta_0 + f_i^{cm} k_i^{cm} \theta_0 \quad (52)$$

なっている. ここで θ_0 は共通の情報 θ の期待値である.

つまり, 本稿との比較によって第 1 項の θ_0 は推測対象となる全体の総和 $\sum_{s=1}^n \theta_{0s}$ となり, 第 2 項の θ_0 は取得した情報に含まれる情報の期待値 (θ_{0i}) とそれぞれ異なる意味をもつことになる.

以上をまとめると, 次の主張が得られる:

部門 $i \in \{1, 2, \dots, n\}$ の最適反応関数が

$$a_i^*(y_i) = \left(\sum_{s=1}^n \theta_{0s} - \left(\sum_{s=1}^n f_{si} \right) k_i \cdot \theta_{0i} \right) + \left(\sum_{s=1}^n f_{si} \right) k_i \cdot y_i \quad (53)$$

となる.

なお, 以上について逆行列 $\left(\left[\mathbf{I} - \frac{r}{n-1} \hat{\mathbf{\Omega}} \right]^{-1} \right)$ については, 任意の $i, j \in \{1, 2, \dots, n\}$ かつ $i \neq j$ に対して,

$$|\sigma_{\theta ji}| < |\sigma_{\theta ii}| \quad (54)$$

$$|\sigma_{\varepsilon ji}| < |\sigma_{\varepsilon ii}| \quad (55)$$

という仮定のもとで存在することが示される¹¹⁾. また, $\left[\mathbf{I} - \frac{r}{n-1} \{ \mathbf{J}_n - \mathbf{I} \} \right]^{-1}$ の存在も α_i の導出のもとで具体的に形を示した. すなわち, 解の存在も証明される.

つづいて, 唯一性についてであるが, これも利得関数について Calvó-Armengol and Beltran (2009) と比較して θ_0^{cm} が $\sum_s \theta_{0s}$ と変わっているだけであり, ポイントとなる a_i と a_j の 2 階の偏微分においてはその項は消去されるので, Calvó-Armengol and Beltran (2009) と全く同じ議論で唯一性が示される.

¹¹⁾ 証明の記述は煩雑となるので省略する.

4 期待利得

4.1 期待利得の導出

利得関数 $u_i(\mathbf{a}, \boldsymbol{\theta})$ は式 (1) で与えられている。最適反応関数は観測値 y_i の関数 $a_i^*(y_i)$ であった。以上を考慮すると、

$$u_i(a_i^*(\mathbf{y}), \boldsymbol{\theta}) = -(1-r) \left(a_i^*(y_i) - \sum_{s=1}^n \theta_s \right)^2 - r \frac{1}{n-1} \sum_{j \neq i} (a_i^*(y_i) - a_j^*(y_j))^2 \quad (56)$$

$$\begin{aligned} &= -(1-r) \left(\sum_s \theta_s \right)^2 + 2(1-r) \left(\sum_s \theta_s \right) a_i^*(y_i) \\ &\quad - (a_i^*(y_i))^2 + 2 \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq i} a_i^*(y_i) a_j^*(y_j) - \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq i} a_j^{*2}(y_j) \end{aligned} \quad (57)$$

と表記できる。以上において確率変数および確率変数を含む項は $\theta_s (s = 1, \dots, n)$ と $a_s^*(y_s) (s = 1, \dots, n)$ の部分である。ここで期待値を取ると、

$$\begin{aligned} E(u_i(a_i^*(\mathbf{y}), \boldsymbol{\theta})) &= -(1-r) E \left[\left(\sum_s \theta_s \right)^2 \right] + 2(1-r) E \left[\left(\sum_s \theta_s \right) a_i^*(y_i) \right] \\ &\quad - E[(a_i^*(y_i))^2] + 2 \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq i} E[a_i^*(y_i) a_j^*(y_j)] - \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq i} E[a_j^{*2}(y_j)] \end{aligned} \quad (58)$$

となる。

ここで

$$E \left[\left(\sum_s \theta_s \right)^2 \right] = \sum_s (\sigma_{\theta ss} + \theta_{0s}^2) + \sum_{i=1}^n \sum_{j \neq i} (\sigma_{\theta ij} + \theta_{0i} \theta_{0j}) \quad (59)$$

$$E \left[\left(\sum_s \theta_s \right) a_i^*(y_i) \right] = \beta_i \sum_s \sigma_{\theta si} + \alpha_i \sum_s \theta_{0s} + \beta_i \theta_{0i} \sum_s \theta_{0s} \quad (60)$$

$$E[(a_i^*(y_i))^2] = \beta_i^2 (\sigma_{\theta ii} + \sigma_{\varepsilon ii}) + (\alpha_i + \beta_i \theta_{0i})^2 \quad (61)$$

$$E[a_i^*(y_i) a_j^*(y_j)] = \beta_i \beta_j (\sigma_{\theta ij} + \sigma_{\varepsilon ij}) + (\alpha_i + \beta_i \theta_{0i})(\alpha_j + \beta_j \theta_{0j}) \quad (62)$$

$$E[(a_j^*(y_j))^2] = \beta_j^2 (\sigma_{\theta jj} + \sigma_{\varepsilon jj}) + (\alpha_j + \beta_j \theta_{0j})^2 \quad (63)$$

となっている。

以上は全て確率変数の平均と分散・共分散および指定されたパラメータ r で決定され、具体的にモデルのパラメータが定まると具体的な値が定まることになる。

以上は事前の期待値ともいえる。というのも、期待値は確率変数 $\boldsymbol{\theta}$ に対しても取られているからである。つまり、様々な情報が発生し、ともなって様々な観測値を得て、長期的に利得が得られる機会があり、その中で総じてどのような利得が得られるかを分析していることになる。

期待利得に関するいくつかの命題を以下で記しておく¹²⁾。

Fact: 全ての $i \in \{1, \dots, n\}$ に対して、均衡での期待利得 $E[U_i(a_i^*(\mathbf{y}), \boldsymbol{\theta})]$ は $(\theta_{01}, \dots, \theta_{0n})$ に依存しない。

¹²⁾ 証明の記述は煩雑となるので省略する。

以上より、以下で均衡での期待利得の議論は全て、

$$\theta_{01} = \theta_{02} = \dots = \theta_{0n} = 0 \quad (64)$$

と仮定しても、結果を全く変わらないことがわかる。

Fact: 均衡でのプレイヤー i の期待利得 $E[U_i(\mathbf{a}^*(\mathbf{y}), \boldsymbol{\theta})]$ は

$$E[U_i(\mathbf{a}^*(\mathbf{y}), \boldsymbol{\theta})] = -\tilde{f}_i k_i^2 \tilde{\sigma}_{\theta i} - \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq i} \tilde{f}_j k_j^2 \tilde{\sigma}_{\theta j} + 2(1-r) \tilde{f}_i k_i \tilde{\sigma}_{\theta i} \quad (65)$$

$$+ 2 \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq i} \tilde{f}_i \tilde{w}_{ij} k_i k_j \tilde{\sigma}_{\theta i} - (1-r) \sum_{s=1}^n \tilde{\sigma}_{\theta s} \quad (66)$$

となる。ここで

$$\tilde{f}_i \equiv \sum_s f_{si}, \quad \tilde{\sigma}_{\theta i} \equiv \sum_s \sigma_{\theta si} \quad (67)$$

である。

Fact: 均衡での社会全体での期待利得 $E[\sum_{i=1}^n U_i(\mathbf{a}^*(\mathbf{y}), \boldsymbol{\theta})]$ は

$$E \left[\sum_{i=1}^n U_i(\mathbf{a}^*(\mathbf{y}), \boldsymbol{\theta}) \right] = (1-r) \sum_s \tilde{\sigma}_{\theta s} \left[\mathbf{k}' \begin{pmatrix} \frac{\tilde{\sigma}_{\theta 1}^2}{(\sigma_{\theta 11} + \sigma_{\varepsilon 11}) \sum_s \tilde{\sigma}_{\theta s}} & 0 & \dots & 0 \\ 0 & \frac{\tilde{\sigma}_{\theta 2}^2}{(\sigma_{\theta 22} + \sigma_{\varepsilon 22}) \sum_s \tilde{\sigma}_{\theta s}} & \dots & 0 \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & \dots & \frac{\tilde{\sigma}_{\theta n}^2}{(\sigma_{\theta nn} + \sigma_{\varepsilon nn}) \sum_s \tilde{\sigma}_{\theta s}} \end{pmatrix} \mathbf{k} - n \right] \quad (68)$$

となる。

4.2 知識インデックス \mathbf{k} について

ここでは知識インデックス \mathbf{k} について詳細に見ていく。 \mathbf{k} の各要素は次のように展開ができる。

Fact: 任意の $i (\in \{1, \dots, n\})$ に対して、

$$k_i = \left\{ \sum_k f_{ki} + \frac{r}{n-1} \sum_{j \neq i} \left\{ w_{ij} \cdot \left(\sum_s f_{sj} \right) \right\} \right\} + \left(\frac{r}{n-1} \right)^2 \sum_{i \neq l, l \neq j} \left\{ w_{il} w_{lj} \cdot \left(\sum_s f_{sj} \right) + \dots \right\} \quad (69)$$

となる。

パラメータ r との関係については、次の式が得られる。

Fact: \mathbf{k} の r についての偏導関数は、

$$\frac{\partial \mathbf{k}}{\partial r} = -\hat{\mathbf{M}} \mathbf{1}_n + \frac{1}{n-1} \hat{\mathbf{M}} \hat{\boldsymbol{\Omega}} \mathbf{k} \quad (70)$$

$$= \left\{ -\frac{1}{1-r} + \frac{1}{n-1} \hat{\mathbf{M}} \hat{\boldsymbol{\Omega}} \right\} \mathbf{k} \quad (71)$$

となる。ここで、

$$\hat{M} = \left[\mathbf{I}_n - \frac{r}{n-1} \hat{\Omega} \right]^{-1} \quad (72)$$

である。

Calvó-Armengol and Beltran (2009) では、 k_i^{cm} と r や各分散、共分散との関係において、 $0 \leq w_{ij}^{cm} \leq 1$ という条件が決定的である。というのも、以上の仮定と $[\mathbf{I}_n - \rho\Omega]^{cm-1}$ の等比級数から、 $0 \leq k \leq 1$ が得られるためである。¹³⁾

しかし、本稿の分析では、 w_{ij} の分子が共分散の和となるので、必ずしも $0 \leq w_{ij} \leq 1$ とはならない。したがって、以上の式の導出にとどまり、さらに踏み込んだ命題の導出は今後の課題となる。別の側面から述べると、これは Calvó-Armengol and Beltran (2009) の主張が各主体が同一の情報を観測するという仮定に強く依存した結果であることを意味している。

このように一般的な命題の導出が難しいため、次節では、 $n = 3$ とし、分散・共分散行列に対していくつかの仮定をしたもとで、Calvó-Armengol and Beltran (2009) で得られた主張との共通点と相違点を確認する。

5 分析

5.1 観測値の相関は自部門に望ましいか

主体数を3として、また、情報とノイズの分散と共分散をそれぞれ共通として、観測値の相関が各部門の期待利得にどのように影響を及ぼすか調べる。

さらに、本稿と Calvó-Armengol and Beltran (2009) との大きな違いは、本稿では情報が複数存在し情報間の相関も観測値の相関に影響を与えることである。

同じく観測値の相関においても、情報からの相関によるものか、ノイズの相関によるものかで分けることができる。なお以下の分析では、分散が共分散の絶対値より大きい ($\phi > |\gamma|$) という仮定をする¹⁴⁾。

5.1.1 ノイズの相関に注目するケース

ここでは、情報に関する分散・共分散行列と、ノイズに関する分散・共分散行列を

$$\Sigma_\theta = \begin{pmatrix} \sigma_\theta & 0 & 0 \\ 0 & \sigma_\theta & 0 \\ 0 & 0 & \sigma_\theta \end{pmatrix}, \quad \Sigma_\varepsilon = \begin{pmatrix} \phi & \gamma & \gamma \\ \gamma & \phi & \gamma \\ \gamma & \gamma & \phi \end{pmatrix} \quad (73)$$

と仮定する。

存在するパラメータは、ノイズの相関 γ 、ノイズの分散 ϕ 、情報の分散 σ_θ であり、それぞれの各部門 i の利得 (π_i) に対する導関数を調べる。すると、

$$\frac{\partial \pi_i}{\partial \gamma} = -(-1+r)^3 \frac{2r\sigma_\theta^2(\sigma_\theta + \phi)}{(\sigma_\theta + \phi - r\gamma)^3} > 0 \quad (74)$$

$$\frac{\partial \pi_i}{\partial \phi} = (-1+r)^3 \frac{\sigma_\theta^2(r\gamma + \sigma_\theta + \phi)}{(\sigma_\theta + \phi - r\gamma)^3} < 0 \quad (75)$$

¹³⁾ なお、 $0 \leq w_{ij}^{cm} \leq 1$ は $\sigma_{ij}^{cm} \leq \sigma_{ii}^{cm}$ かつ $\sigma_{ij}^{cm} \leq \sigma_\theta^{cm}$ より得られる。ケアレスマスのためか、 $\sigma_{ij}^{cm} \leq \sigma_\theta^{cm}$ は本文中では明示的に仮定されていない。

¹⁴⁾ これは逆行行列が存在する十分条件である。また、この仮定は Calvó-Armengol and Beltran (2009, p.130) でもなされている。

となる。さらに、

$$\frac{\partial \pi_i}{\partial \sigma_\theta} = \frac{1}{(-r\gamma + \sigma_\theta + \phi)^3} \cdot (-1+r)(2+2r-r^2)\sigma_\theta^3 + o(\sigma_\theta^3) \quad (76)$$

$$= \frac{1}{(-r\gamma + \sigma_\theta + \phi)^3} \cdot (-1+r) \cdot 3\phi^3 + o(\phi^3) \quad (77)$$

となる¹⁵⁾。

以上より、

- ノイズにより観測値の相関が高まるとより利得が大きくなる
- ノイズの分散が大きくなると利得は小さくなる
- ノイズであれ情報であれ十分に大きな分散のもとで、情報の分散が大きくなると利得は小さくなる

となる。

5.1.2 情報の相関に注目するケース

ここでは、情報に関する分散・共分散行列と、ノイズに関する分散・共分散行列を

$$\Sigma_\theta = \begin{pmatrix} \sigma_\theta & \gamma & \gamma \\ \gamma & \sigma_\theta & \gamma \\ \gamma & \gamma & \sigma_\theta \end{pmatrix}, \quad \Sigma_\varepsilon = \begin{pmatrix} \phi & 0 & 0 \\ 0 & \phi & 0 \\ 0 & 0 & \phi \end{pmatrix} \quad (78)$$

と仮定する。

ここでも存在するパラメータは、ノイズの相関 γ 、ノイズの分散 ϕ 、情報の分散 σ_θ であり、それぞれの各部門 i の利得 (π_i) に対する導関数を調べる。

情報の相関に注目するケースにおいては、導関数は

$$\frac{\partial \pi_i}{\partial \gamma} = -\frac{2(-1+r)}{(-r\gamma + \sigma_\theta + \phi)^3} \cdot (-3\phi^3) + o(\phi^3) \quad (79)$$

$$= -\frac{2(-1+r)}{(-r\gamma + \sigma_\theta + \phi)^3} \cdot (-1-3r+r^3)\sigma_\theta^3 + o(\sigma_\theta^3) \quad (80)$$

となる。さらに、

$$\frac{\partial \pi_i}{\partial \phi} = (-1+r)^3 \frac{(2\gamma + \sigma_\theta)^2 (r\gamma + \sigma_\theta + \phi)}{(\sigma_\theta + \phi - r\gamma)^3} < 0 \quad (81)$$

である。最後に、

$$\frac{\partial \pi_i}{\partial \sigma_\theta} = \frac{-1+r}{(-r\gamma + \sigma_\theta + \phi)^3} (2+2r-r^2)\sigma_\theta^3 + o(\sigma_\theta^3) \quad (82)$$

$$= \frac{-1+r}{(-r\gamma + \sigma_\theta + \phi)^3} \cdot 3\phi^3 + o(\phi^3) \quad (83)$$

である。

以上より、

- ノイズであれ情報であれ十分に大きな分散のもとで、情報により観測値の相関が高まるとより利得は小さくなる
- ノイズの分散が大きくなると利得は小さくなる

¹⁵⁾ 式 (76) と式 (77) の違いは、項をまとめるときに ϕ に注目するか、 σ に注目するかの違いである。第 2 項の関数 $o(\cdot)$ は $\lim_{a \rightarrow \infty} \frac{o(a)}{a} = 0$ なる関数である。

- ノイズであれ情報であれ十分に大きな分散のもとで、情報の分散が大きくなると利得は小さくなる

となる。

以上で注目すべきは、十分大きな ϕ もしくは σ_θ において、導関数のとる値は負となることであり、これは Calvó-Armengol and Beltran (2009, p.138, Proposition 4) とは異なる結論である。

分散については、より大きいとより利得が小さくなるという自然な結果である。したがって、共分散に注目して、主張を以下のようにまとめておく：

命題 1： 観測値の相関がノイズから来るものであれば、相関の増大が各部門の利得をより増加させる。しかし、相関が情報それ自身から来るものであれば、観測値の分散が十分大きい場合には、相関の増大が各部門の利得を減少させてしまう。

すなわち、各部門が同一の情報を観測するのではなく、異なる情報を観測する場合は Calvó-Armengol and Beltran (2009) とは異なり、観測値の相関が必ずしも各部門の利得を増加させない。観測値から利得への影響とすると、

- 他部門の観測値もより正確に推測できることからくる利得へのプラス効果
- お互いの戦略的な状況による過少・過大調整からくるマイナス効果

が考えられる。プラスの効果はノイズからの相関によってより強くなり、マイナスの効果は情報から来る相関によってより強くなると解釈できる。

5.2 主流と傍流のどちらに属すべきか

この小節では、さらにパラメータを特定化して、本稿のモデルでどのような分析が可能かの一例を示す。

ここでは観測値に相関がある 2 部門を「主流」と呼ぶ。これは観測値が正の相関であれ負の相関であれ関連しているという意味で類似の作業をしているという意味である。一方で、他部門と全く相関がない残りの 1 部門を「傍流」と呼ぶことにする。つまり、観測値の相関という意味で独立した作業をしている部門である。

観測値の相関は、情報に関する分散・共分散行列によるものと、ノイズに関する分散・共分散行列によるものの 2 種類がある。分析の単純化も考慮して、 $r = \frac{1}{2}$ とし、以下の 2 つのケースについて考察をする。

はじめに、情報による影響として、

$$\Sigma_\theta = \begin{pmatrix} a & \gamma & 0 \\ \gamma & a & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}, \quad \Sigma_\varepsilon = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} \quad (84)$$

とする。このとき、「主流」に含まれる部門の利得と「傍流」の部門の利得の大小関係は図 3 のように示される。

次に、ノイズによる影響として、情報に関する分散・共分散行列と、ノイズに関する分散・共分散行列を

$$\Sigma_\theta = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}, \quad \Sigma_\varepsilon = \begin{pmatrix} a & \gamma & 0 \\ \gamma & a & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} \quad (85)$$

とする。このとき、「主流」に含まれる部門の利得と「傍流」の部門の利得の大小関係は図 4 のように示される¹⁶⁾。

¹⁶⁾ なお、情報はただ一つで分散をもつに過ぎない Calvó-Armengol and Beltran (2009) と整合的なのはこのケースである。

以上より次の結論が得られる：

命題 2：

1. 観測値の相関については、それが情報に由来するのであれば、ノイズに由来するのであれば、
 - 正の相関があれば「主流」部門に属する方がより望ましく、
 - 負の相関であれば、「傍流」部門に属する方がより望ましい。
2. 観測値の分散については、
 - 情報の分散に由来するのであれば、より大きい場合は「主流」部門に、より小さい場合は「傍流」部門に属する方が望ましい。
 - ノイズの分散に由来するのであれば、より大きい場合は「傍流」部門に、より小さい場合は「主流」部門に属する方が望ましい。

「主流」部門に属する場合のメリットは正であれ負であれ情報の相関を利用してより高い精度で他部門の情報の予測が可能ということである。デメリットとすると逆に相手の情報に過度に影響を受けてしまうことである。その効果の大小関係が情報とノイズの分散の大きさに依存することが以上よりわかる。

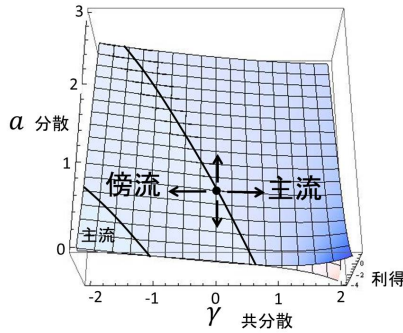


図3 情報の分散・共分散が変化するケース

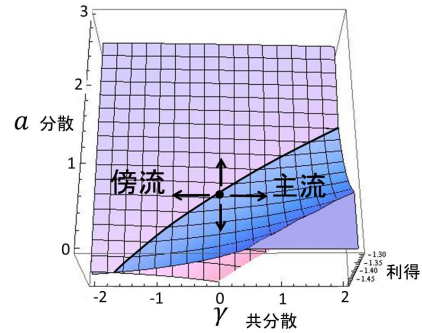


図4 ノイズの分散・共分散が変化するケース

6 むすび

本稿では Calvó-Armengol and Beltran (2009) のモデルを、各部門が共通の情報ではなく個別の情報を観測するように修正し、さらに、情報とノイズの分散・共分散行列をそれぞれ定義した。

均衡の導出や期待利得の導出においては Calvó-Armengol and Beltran (2009) のモデルの議論をそのまま援用できる。しかし期待利得に関するいくつかの命題を導出するにあたっては、Calvó-Armengol and Beltran (2009) では $0 \leq w_{ij}^{cm} \leq 1$ という仮定に決定的に依存しており、他方で、ここではそのような仮定をすることは難しく、同様の結論は得られないことが示された。以上より、Calvó-Armengol and Beltran (2009) の命題は各部門が共通の情報を観測するという限られた状況にのみ当てはまることが確認できた。

一般的な命題の導出が難しいため、つづいて $n = 3$ という仮定のもとでパラメータを特定化しいくつかの分析を行った。そこにおいて、同じ観測値の相関でも、情報によるものか、ノイズによるものかで期待利得に対して異なる影響が得られ、Calvó-Armengol and Beltran (2009) では得られない相関の利得に対する負の影響も示された。

さらに、よりパラメータを特定化した議論で、同じく観測値の分散が変化したとしても、それが情報の分散によるものか、ノイズの分散によるものかで、「主流」部門に属するべきか、「傍流」部門に属するべきかが異なってくることが示された。

もちろん、本稿のモデルにおける一般的な命題の導出は今後の大きな課題であるが、このように具体的な状況について部門数やパラメータを特定化しての分析も発展すべき可能性の一つとなる。

謝辞

本研究の一部は、科学研究費補助金(研究課題番号:21530536, 研究代表:桜井芳生)より補助を得ており、そこでの研究会は非常に有益であった。また、獨協大学情報学研究所の研究会でも貴重な意見をいただいた。ここに記して謝意を表する。もちろん、残りうる問題は全て筆者の責任である。

参考文献

- Aoki, Masahiko. and Hirokazu. Takizawa (2002) “Information, incentives, and option value: the Silicon Valley model,” *Journal of Comparative Economics*, Vol. 30, No. 4, pp. 759–786.
- Calvó-Armengol, Antoni and Joan de Martí Beltran (2009) “Information gathering in organizations: equilibrium, welfare, and optimal network structure,” *Journal of the European Economic Association*, Vol. 7, No. 1, pp. 116–161.
- Cremer, J. (1990) “Common knowledge and the coordination of economic activities,” in Masahiko Aoki, Oliver E Williamson, Bo Gustafsson ed. *The Firm as a Nexus of Treaties*. London: Sage, pp. 53–76.
- Radner, R. and J. Marschak (1972) *Economic theory of teams*: Yale University Press.
- Ui, Takashi (2009) “Bayesian potentials and information structures: Team decision problems revisited,” *International Journal of Economic Theory*, Vol. 5, No. 3, pp. 271–291.
- 稲垣宣生 (1990) 『数理統計学 (初版)』, 裳華房.
- 沼上幹・加藤俊彦・田中一弘・島本実・軽部大 (2007) 『組織の＜重さ＞ - 日本的企業組織の再点検』, 日本経済新聞出版社.
- 青木昌彦・奥野正寛 (1996) 『経済システムの比較制度分析』, 東京大学出版会.
- 藤山英樹 (2005) 『情報財の経済分析：大企業と小企業の競争, ネットワーク, 協力』, 昭和堂.

専門知と包括知…医療専門職におけるパラダイムの混交

—日本における新しい医師卒後臨床研修を事例として—

加藤源太

はじめに

本稿は日本の医師教育を題材として、専門知と包括知という、医学知のふたつの側面、およびその両方を支えるパラダイムが混在する状況下で、専門職の知の伝達がどのような状態にあるのかを検証しようとするものである。

二〇〇四年度より新しい医師卒後臨床研修制度がスタートした。この制度は「プライマリ・ケア」の理念に基づき、「医師が、医師としての人格をかん養し、将来専門とする分野にかかわらず、……、一般的な診療において頻繁に関わる負傷又は疾病に適切に対応できるよう、基本的な診療能力を身に付ける」（基本医療六法編集委員会 二〇〇三：四三二）という目標を掲げ、研修医教育を大きく変えるものとなった。医師

になる時点で専門領域を決め、はじめからその分野を研修していくのが主流だったのに対し、この制度では全員一律に幅広い「基礎的診療能力」を初期研修させることを狙いとしている。背景には、従来の研修を専門分野に特化した「病気は診るが、人は診ない」^①ものと位置付けている厚生労働省の認識も伺える。これ以降研修医は厚生労働省が定めた到達目標に沿って研修病院の複数の診療科を数か月単位でローテーションする研修を受けることとなった。「プライマリ・ケア」能力とは「臨床医の基礎的診療能力」のこととされ、^②研修の到達目標としてガイドラインには「プライマリ・ケア」という文言が何度も登場している。

従来は、指導医の教育目標は、指導医が実践する医療を研修医にもできるようにさせることであつた。同時に、研修医教育は専門医の再生産過程をとおしてなされていたため、専

門医の知の体系は、むしろ教育によって維持されていた(池田 二〇〇二)。だが新しい制度が掲げるのは「指導要綱」、つまりは「プライマリ・ケア」の理念に沿った医療である。一貫して専門分野の研鑽を積んできた専門医^③に対し、「プライマリ・ケア」という理念を強く意識させるとともに、その理念にのっとって彼／彼女らに対し、専門知を解体して「プライマリ・ケア」の文脈に沿った内容を断片的に抽出し指導することを促しているのである。

こうした「プライマリ・ケア」重視の傾向は、社会学における近年の科学技術社会論の志向とも合致する。それは、際限のない専門分化や科学技術への盲信といった現象を批判的にとらえ、知識の包括性に着目してどうすれば科学技術が社会と折り合いをつけて社会に有益なものとなるのかを追求する立場である(藤垣 二〇〇三・中島 二〇〇八)。この観点からは日本の医師教育における上述の変革は次のように理解することができるだろう。すなわち、専門知を至上とする古典的な専門職論に沿ったパラダイムと、包括的な知を至上とする新興の科学技術社会論に沿ったパラダイムが、医療専門職が社会化される場、具体的には研修医教育の現場で混交のさなかにあるという見解である。ただし、専門知と包括知そのものが直接対抗関係にあるわけではない。そうした知を支えるパラダイムが対立的色合いを残しつつ併存関係にあり、近年の日本の医師教育において両者の関係が変化しつつ

あるというのが現在の状況である。

本稿では、日本の医師教育を専門知と包括知それぞれを支える二つのパラダイムが交錯する事例としてとりあげ、指導医へのインタビュー調査^④により、専門知の担い手である指導医がこうしたパラダイムの交錯をどうとらえ、また実際にどう対応しているのかを明らかにする。そして、包括知の担い手と期待される研修医が制度改革を経た研修医教育をどのように受けとめ、享受してきているのかについてもインタビューを試みた。本制度の担い手、受け手の双方の質的資料から、古典的専門職とみなされる医療専門職において、包括知の導入がいかにして展開されているのか、その成り行きはどうなっているのかを分析していく。

1 先行研究との関連

まずここで profession と specialty の区別を明確にしておきたい。前者は「専門職集団」「専門的職業」といった意味であり、後者は「専門性」「専攻」「特殊性」といった意味である。しかし「医師の専門分化」というテーマには、profession と specialty の両方の意味が含まれることとなる。すなわち、研修医が医師という専門職になっていく過程だと考えれば professional socialization とみえることができ、専門医となっていくことだと考えれば specialization

表1 'profession' と 'specialty' にまつわる単語の区分

	職業化、カテゴリー化 を示す単語	社会化を示す単語	職業（担い手） を表す単語
profession 専門職	professionalization 専門職化	professional socialization (専門職の) 社会化	professional 専門職者
specialty 専門性、専門分野	specialization 専門（分）化	specialization 専門（分）化	specialist 専門家、専門医

ととらえることもできる。ところが、profession と specialty それぞれの単語を邦訳した場合、前者の professional は「専門職」「専門職者」、後者の specialist は「専門家」と、どちらにも「専門」という語彙が入ってしまい、混乱をきたしかねない。ここで、これらの単語、英単語を表1のよう
に区分しておく。

医師教育を論じてきたこれまでの専門職論では専門職としての立場に焦点が当てられ、profession が前面に出る議論ばかりが積み重ねられてきた。とくに、医学生や研修医の専門職化については初期の機能主義論者たちが質的、量的調査からさめた関心の detached concern や不確実性 uncertainty への対処といった専門職者の資質を新参の研修医が身につける過程に注目したのに対し、専門化に対する議論ではその根拠をせいぜい個々の興味や嗜好に求める（進藤一九九二：五〇―）程度であった。こ

れは、相互作用論者であるベッカーらの *Boys in White* においても同様に指摘できる特徴である（Becker 1961: 401-18）。だが専門化という現象も官僚制や学問など、近代化に伴って出現した合理的な体系において取り扱われている（ウェーバー 一九三六：二二―）。その意味では、日本における従来の医師教育の実態は、「専門職化」と「専門化」を同時に追求するものであったといえるだろう。

一方、「専門職化」、「専門化」の両者に対して、すでに批判的な分析も数多く蓄積されている。専門職化については、他者はおろかクライアントも含めて業務への介入を閉ざしていることが専門職の権限の源だとする Freidson や、専門職のいとなみを知識市場の独占にあると論じた Larson の研究などの専門職批判が一九七〇年代以降の専門職論の主流となってきた（Evetts 2003: 401-2）。専門化についても、官僚制における逆機能の一例として過度の専門化が現実世界において機能不全に陥る矛盾をマートンは trained incapacity と表現した（Merton 1939: 561-2）。これは専門的学問やその担い手である専門家が非効率なまでに細分化し、彼／彼女らによる処理や反省が日常生活において人々と共有できなくなってきたことを憂慮するハーバーマス（ハーバーマス 一九八一：二二―四）や、細分化した専門をすり抜ける危険に対するより統合的なアプローチやその担い手の必要性を説くベック（Beck 1986: 111）らの主張の先駆けをなすもので

ある。専門化の硬直性から距離をおき、総合的なアプローチを希求する姿勢は「プライマリ・ケアの充実」という新制度の目標に親和的である^⑤。そして、こうした包括性への志向は前述の科学技術社会論が立脚する、科学技術と社会との融和というパラダイムへと連なっている。だが、必ずしも「専門職化」そのものに対する批判的な立場を新しい臨床研修制度から見出すことはできない。つまり、「専門職化」は維持されたままでの「専門化」への反省および包括知への転回という現象が、新臨床研修制度に見られる特徴である。

研修医や指導医を対象にして本制度の是非を分析した研究は数多いが、これらはいずれも医学界とくに医学教育の領域からの実践的な分析にとどまっており、広く社会科学の俎上にのせて分析を試みた研究はみられない。本稿ではこうした側面からの分析を心がけたい。

2 調査方法

本稿ではまず、この臨床研修制度のもとで研修医を指導した指導医^⑥一八名に対して行ったインタビュー調査を一次資料として用いている。インフ

表2 18名の指導医

No.	年齢	性	専門診療科	教育病院	インタビュー日時	受止め方
A	30代	男	内科（老年）	大学病院	2006年4月4日	消極的
B	40代	男	救急	市中病院	2006年4月8日	直接的
C	40代	男	内科（内分泌）	市中病院	2006年4月15日	消極的
D	50代	男	救急	市中病院	2006年4月27日	直接的
E	40代	女	内科（総合）	市中病院	2006年5月11日	直接的
F	40代	男	内科（循環器）	大学病院	2006年6月1日	消極的
G	50代	男	麻酔（小児）	市中病院	2006年6月3日、2006年7月21日	直接的
H	50代	男	外科（整形）	大学病院	2006年9月21日	消極的
I	30代	女	産婦人科	大学病院	2006年9月28日、2006年11月9日	消極的
J	30代	男	内科（循環器）	大学病院	2006年11月25日	消極的
K	30代	男	内科（呼吸器）	市中病院	2008年2月6日	消極的
L	30代	男	小児科	大学病院	2008年12月4日	打算的
M	30代	男	救急	大学病院	2008年12月10日	消極的
N	30代	男	外科（消化器）	大学病院	2008年12月13日	消極的
O	30代	男	麻酔科	大学病院	2008年12月16日	消極的
P	30代	男	外科（消化器）	市中病院	2008年12月27日	消極的
Q	40代	男	外科（脳神経）	大学病院	2009年1月15日	消極的
R	30代	女	産婦人科	大学病院	2009年1月21日	打算的

表3 5名の研修医

No.	年齢	性	専門診療科	教育病院	インタビュー日時	指導医
I	30代	男	内科（感染症）	大学病院、市中病院	2011年5月13日	B
II	20代	女	産婦人科	市中病院	2011年5月21日	R
III	20代	女	産婦人科	大学病院	2011年5月21日	R
IV	30代	女	産婦人科	市中病院	2011年5月22日	R
V	20代	女	内科（内分泌）	市中病院	2011年5月24日	C

オーマントは知人を介したスノーボールサンプリングにより確保した。質問内容は「これまでの経歴について」「新制度のもとで行っている（いた）研修医教育について」「新しい臨床研修制度や厚生労働省の方針についてどう思うか」の三項目についてインフォーマントに自由に回答してもらう非構造的インタビューの形式とした。同様に、これら指導医より直接指導を受けたことのある医師五名にもインタビューを行い、研修医教育を受けた経験について自由に回答してもらった。なお、次節ではこの制度に対する各指導医の受け止め方を「直接的」「打算的」「消極的」の三つの類型に区分けして、分析を行っている。分析に先駆けて、その類型も表2・表3に記しておく。

3 分析——指導医からみた「新臨床研修制度」、研修医からみた「新臨床研修制度」

指導医一八名の対応は以下の三類型に区分することができた。まず厚生労働省の掲げる到達目標やパラダイムに賛成し推し進めようとする直接的受容（B、D、E、G）、新しい制度を研修医にアピールする好機ととらえ、包括知のパラダイムをやりすぎし自分たちの専門知を濃密に提供しようとする打算的受容（L、R）、これらにあてはまらず指導医個々が状況に応じた指導を行っている消極的受容（上記以外の指導医全て）の事例である。以下この分類に沿って具体的な分析を行い、これら指導医の教えを受けた研修医についても触れていく。

3・1 「直接的受容」の事例

B、D、E、Gの四名いずれも、臨床研修制度に対してのみならず研修医の姿勢や態度に対しても一貫して肯定的に評価していた。

（研修医は）非常にみんな、前向きで積極的です。……、消化器回ったときにはその二か月間は消化器内科のことを一生懸命やってる、循環器のときは一生懸命やっている、……。

（B）^⑧

(新しい制度になって) 良い質の研修医が集まるようになってます。……この新しいプログラムで、うちが今までやってきたことになかなりマッチしていますからね。(D)

眼科とかね、皮膚科とか、ああいうマイナーといわれる科(を志望する)の子たちが一生懸命内科の外来やって、非常に上手にやるんですよ。(E)

(他の先生らが) みなさん非常に感心してる。(研修医が) 非常に熱心で、(G)

この指導医たちが研修医を肯定的に評しているのはなぜだろうか。一つにはこれら指導医が臨床研修制度に親和的なスタンスを有していることがあげられよう。この四名はGを除いて救急や総合内科を専門としているが、これら診療科は日常業務が「プライマリ・ケア」の理念に近い⁹ため自らの専門性と臨床研修制度の目標とのギャップに煩わされにくい。総合内科医や救急医の業務は、様々な患者に適切な診断・治療を行い、必要があれば専門医に紹介するというもので、特定の臓器や疾病に偏らない点で「プライマリ・ケア」の理念に親和的である(加藤 二〇〇七:七九七-八、二〇〇九:一二五)。

(プライマリ・ケア志向が) 日本の現在の(医療の)現状に対する揺り戻しとして、っていうか危機感としてそういうことをいわれているのではないかって思うんです。(B)

サブスペシャリティに特化する、ということは非常にかっこいいっていう時代から、少しいろんなグローバルに、ジエネラルにっていう流れは重要だと思っんですね。(E)

またBは、職場の他の医師に専門志向が強いことをこう評し、憂いている。

自分の専門領域から離れたときに患者さんを診ない、っていうことがあって……。だから(他の医師の姿を見て)研修医が(専門科にきれいに)分類されない患者を診ることに対して、ものすごく救急室でいやがるんです。(B)

診断のつかない患者は専門診療科が決定できず、専門医たちも担当したがない場合がある(加藤 二〇〇六)が、これはベックの指摘した「細分化した専門から滑り落ちる危険」の具体例ともいえるだろう。逆にBにおいては「包括知」パラダイムが肯定されており、医師としての彼自身のアイデンティティの拠りどころにまでなっている。

いいかえればこの「直接的受容」の事例では、臨床研修制度の「理念」そのものが肯定的に評価されているといえよう。

3.2 「打算的受容」の事例

L、R二名の指導医は、新しい臨床研修制度によって多くの研修医がローテートしてくることを、研修医に自分たちを知ってもらおう好機だと考えていた。一方、指導内容については、厚生労働省の提示する包括知の枠組みにはとらわれず、自分たちの専門知のエッセンスをできるだけ詰め込んで研修医を教育しようとしていた。R（産婦人科）の職場では、当時すでに「産婦医不足」にあつたため、「研修を受けた人の心をつかんで、大学医局の入局者を増やそう」と、ある席で教授が呼びかけたことがあつた。^⑩ そのためには、「実りある研修を提供」する、つまり単に産婦人科の医療を指導するだけではなく「産婦人科の魅力を伝え」ることが重要で、それが「何年後かに絶対に自分たちに返ってくる」つまり産婦人科を将来専攻してくれるだろうという結論に至つたのであつた。その結果、具体的には「正常産を一人とれるようにする」「手術を一つさせる」というハードルの高い目標を独自にかげ、ローテートしてくる研修医すべてに経験させるようにした。こうした、産婦人科という専門性を押し出す教育に対して研修医の反応は上々だという。

いい経験ができたとか、縫わせてもらつてよかった、とか（いう研修医の反応がある）。大変ですけど、私たちは。でもやっぱり、すぐく反応がいいので、……。 （R）

一方、L（小児科）も、Rと同じように当初は研修医に対しても専門的な内容を前面に押し出していた。しかし、やがて研修医のほうから「別にやりたくもない」のに「忙しすぎる」という不満が噴出し、病院の「研修委員会」を通して「研修のあり方を見直してくれ」という要望が小児科のほうに届けられた。その結果、研修医への負担が軽減された研修内容に変えざるをえなかった。

（もつと患者を診たいという研修医は）いない。それが一番残念なところですね。 （L）

Rの部局では、こうした積極的な研修医指導が功を奏して後期研修を希望する研修医が少なくないという。「プライマリ・ケア」の理念にとらわれず、専門性をより先鋭化させて研修医に提示することで、かえって研修医たちに産婦人科に興味を抱かせることに成功した。だがLの病院では失敗に終わっており、必ずしも専門性の押し出しが研修医たちに好意的に迎えられているばかりではないようである。^⑪

いいかえればこの「打算的受容」の事例では、臨床研修制

度の「理念」よりも研修医との接触の機会が増えるローテートシステム、つまり「形式」が評価されているといえよう。

3.3 「消極的受容」の事例

ここに分類されるのは、臨床研修制度の「理念」および「形式」いづれに対しても、積極的な受容をしていない指導医たちである^⑩。

3.3.1 「包括知」パラダイムへの順応困難——「カリキュラム」指導

新しい制度の導入とともに、指導内容を改めたことについて積極的に言及していたのは、指導医C、F、Hであった。C（内分泌内科）は、基本的な薬の作用や副作用についての自主的な勉強会を開くことにした。これは内科一般に通じる薬剤を対象としており、その点で「プライマリ・ケア」の理念に合致した研修医教育となっている。F（循環器内科）も、みんなに役立つような基本的な内容を選別し指導していた。CとFは、自分たちの専門領域のなかから「プライマリ・ケア」の理念に合致する部分を自発的に抽出し、教育に反映させていた。一方H（整形外科）も、「外科系として、あるいは運動器（疾患を担う診療科）として」、「到達目標」に沿った内容のうち「整形外科がやれることをやる」よう心がけていた。指導要綱への準拠を意識することでプライマリ・ケア

習得のサポートを心がけていたのである。ところが、この三名は総じて、以前と比べて研修医のモチベーションが低いことを嘆いている。

（一八時からの毎週のカンファレンスに）忙しくなくても来ないやついますよ。そんな時間帯にやると。 (C)

一生懸命教えようと思うんだけど、教えてくれない、とかって、企画しても来ないくせに……、結局どうやってもそういう気持ちのない人はなかなか伸びないだろうし (F)

それ（研修時間）を外れば自分たちの研修は終わったんだと理解していくという、そういう研修医たちがいてもおかしくはない。……必修でまわってきた人間には、もうこれはしゃあない。どうせやる気がないんやったら、さっさと帰れって言える……。 (H)

この三名は、臨床研修制度の趣旨を忠実に汲んでいたが、聞かれたのは研修医の学ぶ意欲の低下や、指導形式そのものへの疑問であった。時に専門知が発揮される現場から離れた座学を援用しながら臨床研修制度が掲げる教育を行っても、指導医にとって研修医は手応えのない「よそよそしい」存在

としてしか映っていなかったのである。

3・3・2 専門知パラダイムへの引き込み——研修医に

応じた指導

研修医に応じて指導の内容や方法を変えていると強調する指導医もみられた。O（麻酔科）は、研修医の能力やモチベーションによって指導内容を変えていることを強調している。しかしその方向は、熱意を感じにくい研修医が少なからずいることへの否定的な評価に向かっている。

一歩引いてる研修医っていうのは結構いますね。もう自分は強制でまわってるから、みたいな。……必要以上にこの人たちになんか無理に、教えてやらせよう、とは思わないですね。……普段ろくに本も読んだこともないくせに、挿管だけやらせろ、みたいなやつがいるんですね。……。昔みたいに麻酔科の研修医とかで、こいつには教えなきゃいけない、っていうのがあればやりますけど、（O）

一方P（外科）は、この制度のもとで研修医を指導するにあたり、これまで通りのやり方で指導することにした。しかし、かつては夜中でも研修医を救急外来に「全部呼び出して」知識や技術を教えていたが、臨床研修制度以降「呼んでください」と志願した研修医だけを呼び出すようになったという。

僕もはじめは教える対象が外科に来ないんだったら、自分としてはモチベーション湧かないんじゃないかって思ったんですけど、そんなことは全然なくって、……自分でつかもうとする姿勢があれば、こっちとしてはなんか教えてあげたくりますよね。……小児科に行きたいって言うって人でも、外科で学べるだけ学び取ろうとする姿勢がある人とかいるんですね。（P）

研修医を否定的にみるOと肯定的にみるPとで、研修医に対する評価の方向性には違いがみられる。ただ、研修医教育が専門医たちによる再生産過程としての側面をほぼ失ったこの制度下で、専門知の押し出しを手控えている指導医も、研修医のモチベーションを契機として「強制的でない」専門知を提供しうるものがPの事例からうかがえる。ここから、包括知のシンボリックな担い手である研修医を介した、専門知と包括知の新たな関係が構築される可能性を指摘できるだろう。次に、研修医の側が新しい臨床研修制度をどう受け止めているかを、みていくこととする。

3・4 受け手の側の意見

後日、一八名の指導医より教育を受けた医師五名にインタビューを行う機会を得た。この五名は「直接的受容」のBか

ら指導を受けたⅠ、「打算的受容」のRから指導を受けたⅡ、Ⅲ、Ⅳ、「消極的受容」のCから指導を受けたⅤに分けられた。

3・4・1 プライマリ・ケア教育に存在する「理念」

と「現実」の乖離——医師Ⅰから

Ⅰは新制度初年度に研修医となった医師である。しばしば自身を「ジェネラル志向がある」と語っており、感染症内科という、臓器別の医療モデルにあてはまらない分野を専攻している。その彼は、臨床研修制度について以下のように述べてくれた。

正直二年間で（ローテートの）その科の基本的な手技を全部学ぶっていうのは……絶対無理だと思うんですよ。……結局救急外来での対応がわからないまま終わっちゃうんですね。……僕は少ない科を絞って長いことまわる風にしたほうがいいと思います。（ローテーション先でも）特殊な疾患を（指導医の先生が）持たせたがりがちなんですけど、……しんどいだけで……。

Ⅰは各診療科を細切れに回ることにより、研修医の側に消化不良が生じることを、自身の経験を踏まえて問題視していた。その一方で、一般的な疾患や夜間緊急の事態に焦点をあてた教育は、必ずしも各診療科でなされていたという実感が

ない様子であった。すなわち、各診療科をローテートすることが必ずしも包括知に沿った「プライマリ・ケア」の習得につながってはいないと考えているようであった。Ⅰの意見は、自らの後進を再生産するという機能を失った新しい制度下での研修医教育においてもなお、専門知の伝達という旧来の指導様式を各専門医が捨て切れていないことを示すものである。

3・4・2 専門医になるまでの「経験」としての新制度

——医師Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ

Ⅱ、Ⅲ、Ⅳは「打算的受容」型の指導医から、Ⅴは「消極的受容」型の指導医から教育を受けてきているが、いずれも産婦人科、内分泌内科と、専門性の高い領域を専攻している。この四名の医師からは、総じて自分たちが受けてきた臨床研修を肯定的にみる意見が聞かれた。

研修の一番最後に後悔したのが、内科の症例をあんまり見てない自分がいて、……このあと産婦人科一生やるんだから（内科を）もうちょっと長くやれるような病院に（研修に）行ったほうが良かったんじゃないかな、と思いました。で、今はちようどよかったかなって思ってます。（Ⅱ）

ある程度、内科の知識、外科の知識、外科だったら手技と

かになると思うんですけど、必要だと思っんですね。……
いらないうちの方でもいらつしやるかと思っんですね、
私のなかではやつといてよかった、と。

(Ⅲ)

以前の（専門診療科にストレートに進む研修）はないな、
と私の中では思いますね。他の科のことも少しは知つた
たほうがいいんじゃないかなつていう気持ちがあります
ね。……私は最終的にはある程度満足してました。（Ⅳ）

今だからこそ（さまざまな診療科の）繋がりがつていうのが
見えるので、あながち捨てた制度ではないかな、と……

(Ⅴ)

この制度での研修を経た各自の実感は、おおむね良好なも
のであった。今後触れる機会の少ない医療に接したこと自体
への肯定的な評価や、たとえ少ない接触であっても、その後
何らかの役に立つのではないか、という期待が込められた意
見はこの四名に共通していた。

3・4・3 ローテートの限界——指導側に求められる「プ

ライマリ・ケア」への姿勢

だが、この制度が「プライマリ・ケア」の習得そのものに
ふさわしいシステムになっているか、という問いに対しては

見解が一致しなかった。Ⅲは、この制度で「臨床的な状態と
か、血液のデータとかをみてある程度の鑑別疾患を挙げられ
る」習慣がつくことを肯定的に述べていた。その一方で研修
病院における教育や診療の姿勢を問うような意見もみられ
た。

（ある病院で）自分の専門の科じゃない患者さんだから診
ないつていう、夜間の救急が断ることを多々見てきたん
ですね。そこで育ててきた研修医を見ると、……トンチンカ
ンな答えが返ってきたりするのを見ると、指導者側を育て
ないと目標を達成できないんじゃないかなつて。（Ⅱ）

（「プライマリ・ケアの習得というねらいがこの制度で達成
されているか」という問いに）私のなかでは……。私の病
院は少なくともまったくなかったな、と。……やつぱり人
が欲しかったつていうことでしょうね。一般病院は。（Ⅳ）

Ⅱは、ある勤務病院で研修医のプライマリ・ケア能力がい
まひとつであったことと、その病院の患者受け入れのアクテ
イビティに密接な関係があると感じ取っていた。またⅣは、
研修病院における研修システムが未成熟で、各診療科で自身
が単なる人手として扱われていることを強く実感していた。
この両者に言えるのは、いずれも研修病院そのものが積極的

に「プライマリ・ケア」を推進し、それを研修医に教え込む文化を有しているか否かが、研修医の「プライマリ・ケア」習得に大きな影響を及ぼすと考えていることである。

専門医をめざす研修医にとっては、プライマリ・ケアは実践の必要や義務に乏しい以上「鑑賞するもの」の域を出なくとも絶対的な問題とはならない。ところが、プライマリ・ケアへの意識が高かったり、当直業務などでプライマリ・ケアの実践に追いこまれる状況になれば、プライマリ・ケアは「実践するもの」となり、その質が重視されることとなる。専門志向の医師たちが自らの二年間の臨床研修を「それはそれとして」受け入れていたのに対し、Iがその不備を指摘していたことは、この相違を浮かび上がらせるものである。

3・4・4 指導医のスタンスと各研修医の受け止め方

最後に、各研修医を指導した指導医の類型分類が各研修医にどの程度影響を及ぼしているかについてみておきたい。「直接的受容」の指導医BとIの間では、専門医が多数を占める総合病院において「プライマリ・ケア志向」を同じくする医師同士の関係が作られているようであった。そこではある種マイノリティとしての「プライマリ・ケア志向」アイデンティティが、指導医―研修医間で共有された関係を垣間見ることができた。

B先生も結構その、病院でご苦労されて、たとえばもう、どこの科も見んような人とか、そういう人とかも抱え込んであったんです。……できる範囲で自分もお手伝いしようかな、と。

同様に、「打算的受容」の指導医Pの教えを受けた研修医II、III、IVにおいても、指導医との濃密な師弟関係を示唆する発言が少なからず見受けられた。

P先生はもう……、私のあこがれている先生です。(III)

P先生に出会ったのも、私にとってはほんとに……私にとってはとても大きかったので……(IV)

これらの発言からは、「打算的受容」により研修指導の機会を生かし、自らの専門知を十二分に提示した指導医と、それを教わる過程で診療科のみならず指導医にも憧れを抱き、同じ産婦人科を選択した研修医との関係がうかがえる。包括知ではなく、固有のアイデンティティを備えた専門知が授受される過程において、強固な師弟関係の醸成が示唆されることは興味深い知見である。

一方、「消極的受容」の指導医Cから指導をうけたVからは、自身の専攻選択に際して、指導医Cとの強いつながりを示唆

するコメントはみられなかった。

(C先生に強く勧誘されたことは)ないです。あんまりこう、入れ入れ、みたいな感じではなかったですね。入りたかったら歓迎する、みたいな感じで。

(V)

この研修医Vの発言からは、指導医Cとのアイデンティティの共有や、強固な師弟関係をうかがわせるものはない。

4 結語

レイヴとウェンガーによる実践共同体論では (Lave and Wenger 1991: 1-12)、知が新参者に獲得されていく根拠をその共同体への参加や役割獲得によってもたらされるとしており、医師教育もそれになぞらえられることがある(池田二〇〇二)。しかし本稿が対象とする指導医と研修医の実践共同体では、かつては専門性によって閉ざされていたものの、プライマリ・ケア志向による専門知の組み換え要請や研修医の絶え間ない流動によって、現在では同一性に揺らぎが生じつつある。こうした揺らぎゆえに専門知の提供を思うように図れない現実が、「消極的受容」の指導医が多くなる結果になっているかと思われる。研修医の側も、プライマリ・ケア能力の習得という観点からは必ずしも本制度が完成に達して

いないと見る向きが多かった。もともと、専門医を志す医師にとってそれは致命的な問題にはなっておらず、専門医へと自己形成する際の初期の一過程として肯定的に認識されており、それによって「プライマリ・ケア」志向へと自己が揺さぶられているわけでもない様子もうかがえた。

4・1 専門医固有の「プライマリ・ケア」と、

外挿的な「プライマリ・ケア」との折り合い

今回のインタビューにおいて、自分たちが行っている医療と「プライマリ・ケア」との違いに戸惑いながら、両者の区別に疑問を抱く意見を聞くことができた。

専門医であることの基礎に、一般、ジェネラルフィジシャンであることは絶対必要だし、それは日々の診療のなかで生きてきます……。

(C)

プライマリ・ケアも、専門的ケアもいっしょなんですよ。……ただの患者さん、ひとりひとりの患者さんの治療、っていう目線でしかとらえてないので、……たとえば、……ここまでは自分が診れるけど、これ以上は専門医に紹介しようっていう……(そうした専門外への対応が)プライマリ・ケアなのかどうかはわかんないんですけど。……そういう診療はしてます……。

(II)

専門医の側からすれば、患者への治療を優先することで厳密な意味での専門性から逸脱することはしばしばあり、それを日常的にやっている彼／彼女は、それがそのまま「プライマリ・ケア」だと理解しているのである。患者への継続的な治療を根拠にして、包括知の運用も行っていると自己評価している、と捉えることもできるだろう。

米国では、「プライマリ・ケア」のセクションは、一般の患者がまずかかるべき医療施設として独立しており、専門医療へのゲートキーパーにもなっている (Waizkin 2000: 272)。つまり、医療を供給するシステムが、「プライマリ・ケア」と専門医療とに完全に二分されているのである。一方、日本において「プライマリ・ケア」の定義が確立していないことは厚生労働省も認めており (注②を参照)、それを実質的に担うセクションの役割も曖昧である (Meads 2006: 127)。これは従来のセクション、すなわち専門知のセクションたる専門医が、曖昧な状態で米国の「プライマリ・ケア」の機能、いわば包括知の運用を担ってきたということを示すものである。

本稿の冒頭で述べた「専門職の知の伝達が、専門知と包括知という、医学知のふたつの側面、およびその両方を支えるパラダイムが混在する状況下でどのようなようになされているのか」という問いに対しては、以下のようなことが言えるので

はないだろうか。つまり「プライマリ・ケア」という概念、いわば包括知パラダイムが研修医教育の現場に外挿的に導入されたことにより、包括知の運用も一体として行ってきたと自負する専門知の担い手、すなわち専門医たちに戸惑いが生じたことである。そして、戸惑いの中から「消極的受容」を経てなされる教育を受けた研修医は、やはり厚生労働省の提案する「プライマリ・ケア」、すなわち包括知の運用についてまでは意識が及んでいないものの、「包括知」としてパッケージされた教育そのものは肯定的に享受しているという現状である。

もし科学技術社会論に則って日本の医療においても包括知の運用を推進し続けるのであれば、専門医たちの自負する自分たちの「プライマリ・ケア」と厚生労働省の提案する「プライマリ・ケア」との精緻な比較を行い、果たして本当に前者が後者に代わられるべきなのかどうか、そうであれとするならばそれはどの点においてであるかを明らかにしていく必要があるだろう。

注①厚生労働省 (二〇〇九a) を参照。

②指導要綱は「プライマリ・ケア」という言葉が保健医療システムの窓口的立場を示す「一次機能概念」、すべての臨床医が備えるべき「臨床能力的概念」、第一線の医療現場を指す「現場主義的概念」、「プライマリ・ケア」自体が独自の専門性を

有するという「専門的概念」と様々な意味で用いられていることを認めている。そのうえで今回、理念的支柱として掲げられる「プライマリ・ケア」が指しているのは「主として臨床医の基礎的診療能力であろう」と示されている。記載は「であろう」と曖昧にされている（新医師臨床研修制度における研修医指導に関する研究班 二〇〇九）。

③ インタビューによれば種々の診療科での研修経験を有している指導医が多かった。しかしそれは周辺領域であることが殆どで、かなり多くの領域を研修していたKでも精神科や地域医療といった領域の研修は行っていなかった。

④ 著者自身も指導医として研修医に相對していた時期があり、その知見は本稿の分析にも反映されている。この意味で本研究は広義の参与観察に位置づけられる。

⑤ Beckがイメージしているのは、細分化した専門家たちを横断的に統合する新たな専門家の養成だと思われる。これに対して臨床研修制度が掲げる目標は、その趣旨こそ専門分化にとられない総合的かつ一般的な医療の重視であるが、文面から判断すれば、細分化した専門医たちを統合するコーディネーターを新たに養成することではなく個々の医師に総合的かつ一般的な医療能力を身につけさせることに主眼が置かれている。

⑥ 厚生労働省および国立保健医療科学院作成の指導ガイドラインによれば、指導医の条件として「常勤医」「原則として七年以上の臨床経験」「プライマリ・ケアの指導方法等に関する講習会の受講歴（努力目標）」といった要件を満たすことが求められている。ここに合致しない医師は、たとえ研修医に指導

を行っていてもガイドラインでは上級医として扱われている。現実には常勤医と非常勤医の区別があいまいな場合や指導医講習会受講者の数が当時少なかったこともあり、本稿では新制度の導入以降に研修医への指導を行ったことのある者はすべて指導医とみなすこととした。

⑦ KからRまでのインフォーマントは二〇〇七年九月から二〇〇九年三月までハーバード大学保健政策学科に客員研究員として私が滞在していた際に得ており、これら指導医にとつての研修医指導はインタビュー時点ではすでに過去の事項となっていた。ただ、日本でインタビューした指導医も全員がインタビュー時点で研修医指導を行っていたわけではなく、教育の義務を解かれた医師もいたことから今回は問題視しなかった。同様に本調査では調査期間が二年以上に及んでおり、新しい制度に対する受け止めがインタビュー時期によって異なるということも考えられるが、米国で得たインフォーマントの場合も新制度の初期に指導を行っている場合が多いため、インタビュー範囲内では教育年度の違いが回答に及ぼす影響は必ずしも大きくはないと判断した。

⑧ 引用文内の括弧は筆者による補足。以下同様。

⑨ 指導医Mは救急医でありながら新しい研修制度や研修医に対して必ずしも受容的なコメントはみられなかった。だが、所属病院での研修医や指導システムに対して否定的なのに対し、週に一回他の病院で研修医を指導したときは、研修医に対して「彼らと一緒に当直したりもしてますけど、（モチベーションが）こんなに違うものなのか」と述べており、研修医のモチベーションが自身の教育への熱意に大きく反映されて

るものと思われる。

この教授の発言は、大学医局としての使命の遂行やさらなる発展を意図しているものと思われる。それゆえか、産婦人科医の「希少性の維持」「収入水準確保」といった認識を垣間見ることはできない。

⑪後期研修とは、初期臨床研修終了以降のより専門に特化した研修のことを一般に指すが、後期研修についての明確な定義はない。村岡（二〇〇八）を参照。

⑫小児科医は近年増加基調にあるのに対し、産婦人科医は一貫して減少傾向にある（小池ら 二〇〇八：二六）。しおよびRの事例と反対の結果であり、必ずしも各診療科に対する研修医の人氣が反映されたからではないと思われる。

⑬「消極的受容」に分類された指導医一二名のうち七名は紙幅の都合で言及できなかったが、いずれも臨床研修制度の「理念」、「形式」いずれに対しても、必ずしも積極的な評価を下しているとはいえなかった。

文献

- Beck, Ulrich, 1986, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (＝一九九八、東廉・伊藤美登里訳『危険社会』法政大学出版局)
- Becker, Howard Saul, 1961, *Boys in White*, Chicago: University of Chicago Press.
- Evetts, Julia, 2003, "The Sociological Analysis of Professionalism; Occupational Change in the Modern World", *International Sociology*, 18(2): 395-415.

Freidson, Eliot, 1970, *Professional Dominance: The Social Structure of*

Medical Care, New York: Atherton Press, Inc. (＝一九九二

進藤雄三・宝月誠訳『医療と専門化支配』恒星社厚生閣)

藤垣裕子, 二〇〇三, 『専門知と公共性——科学技術社会論の構築へ向けて』東京大学出版会。

ユルゲン・ハーバーマス, 三島憲一訳, 二〇〇〇, 『近代 未完のプロジェクト』岩波書店 (＝Habermas, Jürgen, 1981, *Die Moderne - ein unvollendetes Projekt*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.)

池田光穂, 二〇〇二, 「外科医のユートピア——技術の修練を通してのモラリティの探究」田辺繁治・松田素二『日常実践のエスノグラフィ——語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社：一六八—九〇。

加藤源太, 二〇〇六, 「専門分化した医療における「専門医」の現実的対応——ある病院の救急外来での事例から」『ソシオロジ』五〇(三)：一四三—五九。

加藤源太, 二〇〇九, 「医療専門職における自己コントロールの再検討——日本における新しい医師卒後臨床研修を事例として」『ソシオロジ』五四(二)：三—一八。

加藤博之, 二〇〇七, 「プライマリ・ケアと新医師臨床研修制度：原点と今後の課題」『clinician』五六〇：七九七—八〇二。

基本医療六法編集委員会, 二〇〇三, 『基本医療六法 平成16年版』中央法規。

小池創一ら, 二〇〇八, 「診療所勤務医の状況の変化と多相生命表の原理を用いた医師数の将来推計について」『厚生指標』五五(一一)：二二—一八。

厚生労働省「二〇〇九」『医師臨床研修制度の変遷』(<http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/isei/rinsyo/hensen/index.html>, 2011.1.31) .

厚生労働省「二〇〇九」『臨床研修病院の指定基準及び指定基準の運用』(<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2002/06/s0627-3k.html>, 2011.1.31) .

Lave, Jean, and Wenger, Etienne, 1991, *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, New York: Cambridge University Press (＝一九九三' 佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』産業図書)

Meads, Geoff, 2006, *Primary Care in the Twenty-First Century: An International Perspective*, Abingdon: Radcliffe Publishing Ltd.

Merton, Robert K., 1939, "Bureaucratic Structure and Personality", *Social Forces*, 18: 560-8.

中島秀人「二〇〇八」『社会の中の科学』放送大学教育振興会。

村岡亮「二〇〇八」『医師臨床研修制度の今後と後期研修制度のあり方』『臨床消化器内科』二三(九): 一二五―一四。

進藤雄三「一九九九」『医師』進藤雄三・黒田浩一郎『医療社会学を学ぶ人のために』世界思想社「四二―五九」。

新医師臨床研修制度における研修医指導に関する研究班「二〇〇九」『第二章 指導方法』『新医師臨床研修制度における指導ガイドライン』(<http://www.niph.go.jp/soshiki/jinzai/kenshu-gl/pdf/2/2syou.pdf>, 2011.1.31)°

Waitzkin, Howard, 2000, "Changing Patient-Physician Relationships in the Changing Health-Policy Environment", Chloe E. Bird, Peter Conrad, Allen M. Fremont eds.,

Handbook of Medical Sociology, 5th ed., New Jersey: Prentice Hall, 271-83.

Weber, Max, 1936, *Wissenschaft als Beruf*, Duncker & Humblot: Berlin. (＝一九八〇' 尾高邦雄訳『職業としての学問』岩波書店)

(かじつ げんだ・厚生労働省保険局総務課)

科学研究費補助金 2009 年度～2011 年度

ネットワークデータによる、「心・身・文化」の健康社会学

研究課題番号：21530536

報告論文集

発行 桜井 芳生 (鹿児島大学 法文学部 教授)

sakurai.yoshio@nifty.com

発行日 2012 年 3 月 30 日